ふわけ。かうやつて毎日いくらかながら利益も上る。それに食べるものも費用をしまつする。少しでも蓄つて來ると、日日必要な家具や或は身につける着物を買ふ。さうして一向無駄費ひなどしない。只一つ、いつも心に掛けてゐるのは父親であるが、ふと氣がついたのは今まで自分のことは朱重と名告つてゐた事である。これでは誰だつて自分の姓は秦であることを知る筈はない。さうしてもし父親が尋ねて來たからと言つて何の手がかりもあるまいといふので、彼はたうとう再び姓を秦とすることにした。さればといつて上流社會の人物で、官位でもあるといふのならば、もとの姓にまた返るに就ても、公文書で朝廷へ奏上するとか或は禮部の官省なり大學なり國學なりその他の役所へ屆け出るとかしなければならないわけだから、官吏名簿が書き代へられて、さうすればこれは一般民衆にも知れるのであるが、たかが油賣男が名を代へたとなつても、誰も知る筈はない。そこで彼には一つの工夫があつた。といふのは油を盛る桶の片側には、一面に大きな字で「秦」と書き、もう一つの片側には生れ故郷の「汴梁」の二字を書いた。さうしてこの桶を目標として、誰にでも一目でわかるやうにしたのだ。かういふわけで臨安の町の人たちは彼の姓は朱ではないことを知り、彼を油屋の秦さんと呼ぶ陽氣であつたが、照慶寺の坊さんが九晝夜の功德をするといふことを、油屋の秦は聞いたものだから、きつと油が澤山必要だと思つて、彼は桶を荷負うて寺へ油を賣りに行つた。和尚たちは油屋の秦さんといふ評判を聞いてゐて、彼が外の人よりも品もよく値も安いといふのも知つてゐた。そこで彼の一手から油を買取ることにした。かういふわけでこの九日間といふものは、秦重はただ照慶寺へだけ通うてゐた。つまり、「手きびしいのは儲けぬが、律氣にやれば元手は缺けぬ」といふものである。

この一日でもう九日もおしまひといふ日に、秦重は油を賣りさばいてしまつて、空荷をかついで寺から出た。まことに天氣の冴え冴えとした日で、遊樂の人は蟻のやうにうぢやうぢやしてゐた。秦重は湖に沿うて歩いて行つたが、遠く十里の土堤を見渡せば、桃は紅に柳は綠に、湖上の舟は畫のやうで笛の音さへ洩れて、彼は歩きながら眺め樂しむのであるが、なかなか見飽きぬ風情である。そこらを一まはりして來て體がひどくくたびれたものだから、路をまがつて照慶寺の右側の少し廣廣とした場所へ出たので、荷を下して、石の上へ腰かけて脚やすめをした。

と、見ると傍に一軒の家があつて、兩びらきになつた扉は眞新で金で塗つた大きな門である。內側の朱い簾のなかから

門と戸とで手の行屆いた美しさがわかる。見てゐるうちにそのなかから頭巾をかぶつた人が四五人出て來て、そのうしろからはひとりの年若な女が見送りに出た。門の端までくると、相方が手を把つて挨拶をしながら「左樣なら」と言つたかと思ふと、若い女は家の方へ行つてしまつた。秦重はぢつと見つめてゐたのだが、この女のにこやかに美しいこと、その體つきのきやしやでしかも肉づきのいいこと。このやうなひとをまだ見たこともない。暫くはもううつとりとして、體中しびれたやうになつてしまつた。

一體、秦重は實直な青年だつたから色めかしい小路のあることなどはまだ知らない。これはまあどういふ方の家であらうかと、心に怪しんでゐた折から、見れば門のなかからひとりの中年增の女が走り出て來た。別にもうひとり髫垂髮にした小女がついてゐたが、それが門にもたれてぼんやり外を見た。中年增の女が油の荷を持つた男を見たものだから、

「おや」と言つた「いま油を買ひに行かうと思つてゐたところへ、ちやうどいい、油屋がこんなところへ來てゐるよ。あの人の買つてみたらいいぢやないの。」

そこで小女は油壺を持つて、油賣の方へ走りながら呼んだ。

「油屋さん。」

秦重はぱつと氣がついて、

「はい、油屋ですが。お入りなさいまし。」

明日になれば持つて參りますが。」

小女はいくらか字が讀めたものだから、油桶の上に秦と書いてある字を見て、中年增の女にむかつて、

「この油屋さんは秦といふ名だわよ」

すると、中年增の方は人の噂によつて、秦といふ油賣は商賣が正直だと聞いてゐた。そこで秦重に言ひつけるのであつた。

「うちではね毎日油が入るんだよ。お前さんが毎日持つて來る時うちもお前さんのお主顧になつて上げるよ。」

「お買ひ下さいますか。有難うございます。間違ひなく持つて上りますから。」

年增の女と小女とは行つてしまつた。秦重は心の中で考へるのであつた。——あの小母さんはさつきの若い女の何に當るのか知らないが、ここへ毎日來て油が買つて貰へることになれば、儲けなどのことはどうだつていい。あの若い女を存分に見ることが出來るだけの事でも、これや前世から持つて生れた仕合せだわい。さう思ひながら荷を擔ぎ上げて秦重は立たうとした。

と見れば、ふたりの轎夫が青い絹の幔を垂れた轎をかついで來る。そのうしろから小厮がふたりついて來る。飛ぶやうに早く驅けて來て、例の家の門まで來て轎は下された。小厮

が何か衣で包んだものを捧げ持つて家のなかへ這入つて行つた。秦重はこれまた不思議なことだ、どんな人が出て來るんだらうと思ひながら、暫く經つと、ふたりの小女が出て來て、ひとりは猖獗緋の衣に包んだものを捧げてゐるし、ひとりはまた湘妃竹で出來た卷繪の文匣を捧げてゐた。それをみんな轎夫に渡して轎の座席の下に置かせた。さつきのふたりの小廝は、そのひとりは手に琴を入れた囊を抱き、もうひとりは卷物を捧げて、別に腕には碧玉の簫の笛を掛けてゐる。そのあとから先刻のあの美しい若い女が歩み出て來た。若い女が轎に乘ると、轎夫がそれを擡上げ、大通の方へ行つてしまつた。小廝も丫鬟も一緒に轎について行く。

秦重はまたしても一度詳しく見ることが出來たが、彼女に對する疑ひが心のなかでいよいよ募りながら、油の荷物をかつぐと、ぶらぶらと歩き出したが、ほんの少しばかり歩くと、ふと湖を見晴すところに酒館があつた。秦重はふだんは酒は飲まないのだけれども、今日はあの若い女を見てから、心のうちでうれしいとも思ひ、わびしいとも思ひ、そこで荷を下して、酒館のなかへ這入つたのだ。小さな腰掛へ坐ると、店の主が來て尋ねる。

「ほかにどなたかお連れでもありますか。それともおひとりですかね。」

「上等の酒を持つて來ておくれ。ひとりで三杯ほどやりますよ。何か季節の果ものを一皿二皿貰ひませう。葷菜は欲しくない。」

店の主人が酒を注いでくれる時に、秦重は言つた「時に、あすこに金塗りの塀や門があるがあそこは誰方の家だらう。」

「あれは齊といふ衞内　高官の子弟を指す）の花園なのですがね、今ぢや王九媽が住んでゐますよ。」

「さつきあそこで若い女が轎に乘るところを見かけたが、あれやどんな人ですかね。」

「あれは有名な藝者でさ。王美娘といふのですが、みんなは花魁娘子と稱へてゐますよ。もとは汴梁の都の人だといふことだが、流れ流れてここへ來たのださうですが、笛でも絃でも歌でも舞ひでも、琴であれ棋であれ書であれ、畫であれ、藝事なら何でも知らないことはないといひますよ。通ふのはみんなえらい方ばかりでさ。十兩といふ御祝儀でやつと一晩とめるつて事ですが、これぢや素寒貧はより附けませんや。以前は清波門の近所にゐたさうですがね、家が狹いといふので、齊の若樣があの女と深い馴染ださうで、半年ほど前にあの別莊を女に貸してやつたのですよ。」

秦重は汴梁の都の人と聞いたものだから、同じその故郷のことを思ひ出して、心は更に一層の思ひを催すのであつた。さて何杯かの酒を飲むと錢を拂つて、荷をかつぎ再び路に出たのである。

彼は歩きながら、路路肚のなかで考へ耽るのであつた——世間にはまああ美しい女もあるものだらうか。それがあんな商賣をしなけやならないとは、さてさて氣の毒なことである。と思ふあとから彼はまた自分で自分を嘲る氣持にもなつた　尤もあんな商賣でもしてゐなかつたら、とてもわれわれ油賣風情がお目にかかれるわけもないさ。何かと考へてゐるうちにいよいよ馬鹿げた謀反氣が湧いて來て、彼は考へるのである——人の命は一生、草の命は一秋とやら、あんな美人を抱いて一晩を明せるやうなら、命もいらない。さう思ふとあとから又しても考へるのだが——へん。高が日がな一日油を賣つて驅けずりまはつてゐる身空でさ、一日の儲けと言へば何厘だか何毛だか。そいつがこんなことを考へるんだから身の程を忘れた話。全く癩蝦蟆が泥溝のなかにしやがんでゐて白鳥の肉を吃つてみたいとは手前の事だ。とても思ひも及ばない事だなあ。それからまたかうも考へる——あのひとがつき會つてゐるのはみな貴公子や王家の若樣のやうな御身分の方ばかりだといふが、たとひ金があつたからと言つて到底我我油賣などに會つてくれるものではあるまい。と思つては又彼は考へる——しかし、聞けば藝者屋の抱へ親なんてものは慾の目のないもので、たとへ乞食でも金銀さへあれや女に會はせない筈はない。增してや、俺は商賣人なのだから、何も人の前へ出られぬやうな恥しい身分ではなし、金さへあれば會へないと言ふ筈はないわけだ。ところでさ、何兩などいふ大金が一體まあどうして手に入れられるのだい。こんな風に祿でもない思ひに耽りながら、自問自答をするのである——手前ぼまあ、この世界にこんな馬鹿がまたとあるものか知ら、高が小商人の、元手と言つたらすつかりで三兩、それが十兩の金を出してあの名うての藝者を買はうといふのだからな。春さきの陽氣に、手前夢でも見てゐやがるんだらう。だがさ、昔から思ひ立つたら出來ぬ事は無いとも謂ふのだが……。彼はこんな風にああも考へかうも思ひ、そのうちにたうとう一つの決心が浮んだのだ。彼はひとり言に云つた。さうだ。明日から早速初めよう。毎日元金だけは差引いて、あとの儲けを積み立てて置く。一日に一厘積み立てるとして一年に三兩と六錢。すると、三年經ちさへすればこの事は出來るのだ。もし假りに二厘づつ積立てるとしたら、日數は今の半分ですむ。もし又、それよりも多く積立てられるとすれば一年を大して越えないでもすむ。

そんなことを心に描きつづけてゐるうちに、いつの間にか自分の家へ歸りついてゐたのであるが、そこで錠をあけて門から戸のなかへ這入つてみると、路すがらさまざま餘計な事を空想して來たものだから、自分の家へ歸つてあたりを見まはすと、まことに早、男鰥のみじめ極る殺風景。もう夕飯さへも食べる氣にもならない。そのまま牀のなかへもぐつては

見たものの、寢返りばかり打つてゐて、あの美女が心にこびりついてゐて、到底睡れるものではない。月なす面影と花なす色香とはただ、心の猿、思ひの駒を猛らせるばかり。

たうとう夜が明けてしまつて、牀のなかから爬ひ起きると、彼は油の荷を用意して朝飯を煮て食べると門には錠を下ろし、油桶を荷負ふが早いか、一散に王九媽の家を目ざして足を急がせた。その家の門はくぐつたが、さて直ぐに家に這入ることもなし得ないで、頭を上げて裏の方を見まはしてゐるのであつた。

王九媽はやつと寢牀をはなれたばかりの事とて、まだ髪もとかさず、仲居に言ひつけて朝の食事の御菜を買ひにやるところだつた。秦重はその九媽の聲をききつけたものだから聲をあげて呼んだ。

「王のお神さん。」

九媽は聲をききつけて出て見ると油賣の秦さんであつたものだから笑ひながら言つた。

「正直者だよ。本當に信用が置けるわね。」

そこで彼を呼び込んで荷を持つて來させた。一瓶量らせると五斤あまりもある。いい加減に金を拂つても、秦重は一向に値段のことをとやかく言はない。王九媽はひどく滿足して喜んで言ふのだ。

「この瓶の油で、うちでは二日分間に合ふよ。だからお前さん、一日置きに來ておくれよ。わたしはほかからは買はないからね。」

秦重は承知をして荷をかついで出た。殘念なことにはつひに花魁娘子を見ることが出來なかつた。それでもこの主顧が出來たのはうれしい。あの人をだつても今日は見えなくなつても必ず此の次には見られる。この次に見られなければ、三度目は見られよう。それにしても王九媽の家一軒のためにこれほどの遠くまで來るといふのは、商賣の上からいふとあまり割のいい事ではない。照慶寺へ行くのが道筋だから、お寺では今日はもう功養もあるわけではないが、まさかふだんの油だつて不用なわけはあるまい。一つ持つて行つて注文を受けて見よう。もしまたあのお寺の部屋部屋を主顧にする事さへ出來るやうならば錢塘門の通までは出ずとも、ここらあたりだけで桶の油は賣りつくすことも出來るのだ。そこで秦重は荷を持つて照慶寺へ這入つて行つて都合を尋ねた。

一たいこの寺の部屋部屋の和尚さん達も油賣の秦さんのことは好く思つてゐるものだから、いいところへやつて來たといふので、多かれ少かれどこの部屋でもそれぞれに油を買つてくれた。彼はこの寺の部屋部屋とも約束をしてもらつて、一日おきに油を持つて來ることにした。この日はちやうど偶數の日であつたものだから、この日を初めにして、奇數にあたる日には彼はまた別の街の方へ行つて商ひをして來る。さ

うして偶數日が來ると、錢塘門の通をやつて來て門をくぐつて、先づ第一に王九媽の家のうらへ來る。さうして油を賣るといふ名目で花魁娘子を見るのであつた。見られる日もあつたし、見られない日もあつた。見られない日には見られないで物思ひをしなければならないし、見た日には見たでまた一しほの物思ひである。全く「天は長く地は久しいと言ふとも盡きる時もあらうが、この物思ひこの情ばかりはいつになつたら盡きようとも思へなかつた。」

さて秦重は王九媽の家へしげしげと行つてゐるうちには、家中だれもかれも油賣の秦さんを知らない人は無くなつてしまつた。

月日の經つのは早いもので、いつしか一年あまりの月日が經過して、日日毎日、足色細絲（純分の多き紋銀なりと卽ち質のいい貨幣なるべし）を擇つて、或日には三厘、或日には二厘、少くとも一厘は積立てることにした。何錢かになるともつと大きな銀塊にとり換へる。日が經ち月が累なるうちには大きな一包みの銀貨袋が出來て、掻き集めたる塵もつもつて、自分自身でさへもいくらあるかは知らない。

その日は奇數の日であつたが、折からの大雨に逢つて、秦重は商賣には出られなかつた。さうしてあの大きな銀の塊があるのを思ひ出してうれしくなり、今日の空閑を幸に一つ天秤にかけて目方を試べてみてやらうといふので、兩替屋へ向ひ側の銀鍛冶屋へ天秤を借りに出かけたのである。するとこの銀細工人といふのが何と人を見縊つた奴ではないか、油賣りなどの蓄へた少しばかりの銀なんぞを掛けて見るならこれで澤山といふので、五兩掛けの天秤を貸して、それさへも第一の紐手は必要なからうと思つたのだ。秦重は銀の包みをとり出してそれを開けた。そのなかの大部分は大小さまざまの不揃ひな粒銀で、一定の形をした銀塊はあまりなかつたが、粒銀の方は澤山あつた。銀細工人は目の利かぬつまらない男であつたが、そんなどつさりの銀を見ると、急にびつくりして、人は見かけでは判らぬもの、海は升では量れぬものと氣がついて、慌ててまた別の天秤やら、大小さまざまの法馬やらを持ち出した。秦重は包のままで量つて見たが、目盛の少しでも狂はないやうにやつて見て、それがきつかりと十六兩あつた。（一兩は我國の約十匁に當る）そこで秦重は考へるのに、このうち元手の三兩を引いて、あとを遊びの費用にしたところで、それでもまだ餘分が出るわけ。しかし、と彼はまた考へた。こんな寄せ集めの小錢ばかりでは、どうも手から出すにもきまりが惡い。人が輕蔑するやうな氣がする。今幸と銀鍛冶屋へ來てゐるのだから、一つ大きな塊と取換へて貰はないといふ法はない。その方が體裁がいい。と、そこで十兩だけは質のいい大きな塊と換へて貰つた。あとの

一兩八錢分は別に小さい銀の錠に取換へ、あます四兩二錢といふものは小さな塊にした。

それから幾錢かの銀を出して緣取の飾のある鞋と淸潔な白襪とを買ひ、外に萬字頭巾を一つ新調した。自分の家へかへると、着物を出してきれいさつぱりと糊をつけ、安息香を買つて來て、それを焚きしめた。さうして天氣のいい日を揀んで朝早くから身づくろひをしたのである。さてかうしたところを見ると、素晴らしい富貴豪華のお客とは見えないまでも、なかなか小意氣ないい若者ではあつた。

かうやつてきちんと身じまひをすると、兩方の袖の中へ銀を藏ひ込み、自分の家には戸じまりを用心し、一散に王九媽の家を目ざして急ぐのであつた。うれしいの何のとは言ふにも及ばぬ沙汰である。

秦重は王九媽の門の前へ來てみると、きまりが惡るくなつて來てしまつた。といふのは、ふだんはいつも荷を擔いでこの家へ油を賣りに來る者が、今日は突然に遊興のお客に來たのだから、さて何と言つて口を開いものかと躊躇してゐた折しも、ふと、「おや」といふ聲を門のあたりで耳にしたかと思つたら、王九媽が走つて出て來て、秦重を見つけて言ふのであつた。

「秦さんは、今日はどうしてさう悄れてゐるのです。そんなに外出着などを着込んでさ。ひよつと、外の土地へゆく用事でも出來たといふのではないのかねえ。」

そこで秦重もかうなればもう肚を据ゑてしまつて、進み出て禮をした。九媽の方でもともかくもお時宜は返した。秦重が言ふには、

「いえ、わたしは何の變つた事もありはしません。ただお神さんに會ひに來ただけなのです。」

このお神さんは、海千山千なのだから相手の顏を見さへすればその心持ちが判る。秦重がこんな裝束をして、自分に會ひに來たのだと聞くとこれはてつきり、うちの子の誰かを見そめたので、一晩遊び明したいとか、それとも一座敷會ひたいとでも言ふに違ひないが、それにしてもあまり結構なお客大明神でもない。持つて來た代物はまづ、菜っ葉か 蟹ぐらゐなところ。——こいつの錢をせしめて、御飯の副食ぐらゐにするにはこれでも役に立つ。と、そこで顏につくり笑をこしらへながら言ふには、

「あなたが、わたしに會ひに來て下さつたんですつて。これやきつと何か有難い事ですわね。」

「わたしはどうも口無調法なものだから、どうも言ひにくいので。」

「仰言いよ、構ひませんのに。それよりはまあうちの座敷へでも通つていただいて、ゆつくりお話しなさいな。」

秦重は今まで油を賣るために王九媽の家へ來た事は幾百回

もあるが、彼の尻はまだこの座敷の椅子とは一向に馴染がない。面會をするのはこれが初めてといふわけ。

王九媽たちは客座敷へ來たが、自然と主客に分れて坐ることにもなる。席についてお茶を呼ぶと、しばらくして小女がお茶を用意し來て見ると、お客といふのは油賣の秦さんなのだ。どうしたわけで、お神さんがこんなに待すのだらうと、くすくす頭を下げながら笑ひ出してしまつた。それを見て王九媽は叱りつけて言つた。

「何だつて笑つたりなんかするの。お客さんに向つて何といふ御無禮です。」

小女は笑ひやめて、お茶をつぐと出ていつた。そこで王九媽はやつと初めて口を開いて尋ねた、

「若旦那はわたしにお話があるんですつて。言つて下さいよ、ねえ。」

「話といつて外でもないのですが」と秦量は言ふ「お宅の姐さんをひとり呼んでもらつて一杯お酒を飲ましてもらひたいのですよ。」

「まさかついお酒だけといふわけにもいきませんから、一晩おとまりにならなきや。あなたは石部金吉だと思つてゐたのに、いつからそんな粋な道樂を思ひ立つたの。」

「わたしの思ひ込んでゐるのは、今日や昨日の事ではないのです。」

「うちには幾人も姐さんがゐて、みんなあなた御存知だが、お氣に入りは一たいどの人？」

秦重が言ふには「外の人には誰も用はないのです。ただ花魁娘子と一晩を明したいのですよ。」

九媽は彼が冗談を言つて居ると思つた。そこで顏色を變へて言つた。「途方もない事を言ふもんぢやありませんよ。人をからかうにも程があるよ。」

「わたしは野暮な人間です。決して嘘をなど言ふものですか。」

「糞桶にだつて耳がふたつあるんだから、まさかあなただつて、うちの美兒（みいやと呼ぶが如し）の相場ぐらゐは知つてゐてもいいでせうよ。あなたのやうな油屋さんが身代限りをしてみたところが、あの子の一晩を半分買ふにも足りますまいよ。いつそのこと何とか間に合せて我慢をしておいたがいいでせうに。」

秦重は首を縮めたが、その代りには舌を伸して言つた「これは御自慢ですね。では伺ひたいものですが、うちの花魁娘子は一たい一晩何十兩ぐらゐいりませうかね。」

九媽は相手がかういふのを聞くと、嗔つてゐたのをまた笑顏にかへして言ふには

「何な、そんなにたんとぢやありませんよ。さあほんの十兩入るだけですがね、外にお酒盛の費用がいくらか、これはま

た別ですけどねえ。」

「せいぜいそんなものですか。大した事もない。」秦重はさう言つて袖のなかへ手を入れ禿禿のなかから例のびかぴか光る質のいい銀の大判をさぐり出すと、それは鵜兒に渡しながら、「この一枚は十兩の値打、質も目方も不足のないものです。さあ、お神さんこれを受取つて下さい」それからまた今度は小判を一枚取だしながら、「この小判は二兩のもの、これでどうぞちよつとしたお酒盛りでもさせて貰ひませうと。でお神さん、わたしのこの願がかなふやうなら、死んでも忘れませんよ。いづれはまた來てあなたには御禮をしませうよ。」

九媽は大判を見たものだからもう、手がむづむづし出した。がまた一方、相手が一時の感興のために纏つたお金をなくしてしまつて後になつて煩悶するやうなことがあつては、とも案ぜられたので、そこは充分に言つて置くに越したことはないと思つたので、言つた「この十兩といふお金はさ、あなた商賣の方なのだから、貯めるのだつて大變でせう。もう一ぺんよくよくお考へになつたがいいわよ。」

秦重が言ふ「わたしの考へはもうよく決めてあるのです。分別のあるあなたの御心配も無駄ですよ。」

九媽は銀の大判小判をとつて袖のなかへ入れながら言ふのだ「それはさうと、ちよつと手にをへない事があるんですわ。」

「だつてお神さんはここの御主人ではありませんか。どうして手にをへないんです」

「ね、うちの美兒のところへでかけておいでるのは、皆身分の高い方やらお金持ちばかりなのでせう。それこそえらいお方が笑ひ友達で、ただの者とは往來はしないといふわけでせう。だからあの子がどうして、あなたのやうな商人の秦さんなどに目をくれさうにもないのですもの。とてもお相手を受けさうにもないわねえ。」

「そこのところを、どうぞお神さん」と秦重は言ふのだ「何とか色よく取計らつて下さい。これが成就したからには、御恩はきつと忘れませんから。」

九媽は相手の決心が固いのを見ると、眉をよせたと思つたらもう一思案浮んでゐた。そこで口を開いて笑ひながら言ふ「わたしがあなたのためにいい智惠をつけて上げますがね、それからさきはあなたの運次第ですよ。うまく行つても喜ばなくてもいい代りには、まづく行つても惱りつこなしですよ。あの子は昨日は李學士のお邸へ行つてお酒の相手で、まだ歸つて來ません。今日はといふと黄衞内と舟遊びのお約束があるし、明日はといふと張山人のお仲間の浮世ばなれをした方方が、あの子を呼んで詩の會をなさるといふし、明後日はといふと韓尚書の若旦那様が、數日前からの御申込みで、わたしのところで、御宴會だと仰言るし、あなたは明明後日お出で

になつてごらんなさいな。それからまだ相談があるんだけれど、あなた、その間は幾日かわたしのところへ油を賣りに來るのはやめたがいいわ。かうして値打をつけて置くんですよ。もう一つ相談だけれどあなたが著てゐるその木綿の著物は、どうも上等のお客らしくないわね。今度の時には絹のと著換へておいでなさい。さうすれば了たちも、あなたが秦さんだとは氣がつかないでせうし、わたしもうまくごまかして上げますからね。」

「なるほど、一一よく心得ました。」

話がすんで秦重は別れを告げて門を出た。

さうしてその三日間といふものは商賣を休んで油を賣りには出なかつた。質屋へ行つて例の絹の衣服のあり合せの中古を買つた。それを身につけると近所を散歩しては教養ある人の樣子振を研古するのであつた。それこそ花柳界の内幕を知る用意にと先づ道學者の禮式を稽古するといふもの。

かういふふうに三日を過した。四日目になると、朝早く起きてすぐ王九媽の家へ行つて見た。行つたのはよいがあんまり早すぎた。門がまだ開いてゐなかつた。そこで考へ直してもう一度來ることにした。この日は著物があんまり立派だつたものだから、照慶寺へ行つて見ることも出來なかつた。和尚から議論を持ちかけられるのが怕ろしかつたのだ。そこで十錦塘へ行つてその堤で散歩した。しばらくそこにゐて再び來てみると、王九媽の家の門はもう開いてゐて、門前には轎や馬が並んでゐるし、門内にはたくさんのお供の衆がゐて待つてゐる。秦重は實直ではあつたが、また心の底は氣の利いたところがあるから、門のなかへは進まなかつた。こつそりと馬方を手招きして、

「このお乘物はどなた樣のものですかね。」

と尋ねた。すると馬方は答へた。

「韓の御屋敷から若樣をお迎へに來たのですよ。」

秦重は韓公子が昨晩から宿込んでて、まだ歸らずにゐるのだと知つた。そこでもう一度出直すことにして或る飯店へ入つた。有り合せの菜で御飯をたべて、しばらくそこで坐つてから、やつとの事で九媽の家へ行つて樣子を窺つてみると、門前の乘物はもう行つてしまつてゐた。門のなかへ入つてみると、王九媽が迎へに出て言ふのだ、

「すみませんね、今日も都合がわるいのですよ。今のさつき韓の若樣が、早咲きの梅を御見物といふので連れて行きました。あの方は居つづけでせう。きつとさうですよ、聞けば明日はまつた靈隱寺へ行つて棋師と賭棋をなさるといふ御話でしたから。齊衙内が又、二三度も御さそひに見えてゐらつしやる。この方はこの家の持主なのだから、これもお斷りは申されず、それにあの方はお見えになると三日も五日もここにおいでになるので、わたしにさへ何日お歸りだか見當がつきま

せんよ。秦の若旦那、あなたもし本當にお遊びになりたいのなら、ぜひまあ我慢をしてもう一度氣永に待つて下さいな。それではならぬと仰言るなら、先日御預りのものは一厘一錢だつて手はつけて居りませんから、もし何ならば御返し申しませうか。」

秦重は答へる「いやいや、わたしは、何よりあなたに取持をしてくださらぬといはれるのが辛いのです。たとひ遲くなつても間違ひさへなければ、わたしは一萬年でも待つてゐますとも。」

「さう仰言るなら、わたしもしつかりお骨折をしませう。」

秦重が別禮をして立たうとすると、九媽が

「秦の若旦那」と呼びとめて言ふには「もう一つ御相談があるですけれど、もしこの次においでの節は、あんまり早くつてはいけませんわ。おほよそ午後の四時ごろには、客はあつても客はゐません。お爲めを思うて本當の御話をするんですよ。どちらかといふと遲ければ遲いほど好いのです。わたしにうまい指金があるんですからねお氣を惡くしてはいやですよ。」

秦重はつづけさまに「何の、何の、どうしまして。」

この日も秦重は商賣を休んでしまつたが、次の日には油の荷を用意して、別の場所へ行つて商ひをした。錢塘門通りは歩かなかつた。毎日商賣がすんで夕方になると、身なりをきちんとして王九媽の家へ行つて樣子を窺つてみる。どうも思はしい機會がない。一ヶ月あまりと云ふものは無駄足を運んだ。

その日はちやうど十月の二十五日であつたが、大雪は降りやんだが、西風が吹く。積つてゐる雪は氷になつてしまつた。寒いの何ののお話ではない。でも地面の乾燥してゐるのはまだしもいい。秦重は半日あまりで商ひはおしまひにして、いつものとほりの身なりで、また出かけて行つて樣子を探つてみた。王九媽は溢れるばかりの笑顔をして出迎へて言ふのであつた、

「あなたも今日こそお仕合せ。もう九分九厘までは出來たも同然ですよ。」

「あとの一厘は」と秦重が「どういふわけで不足なのです。」

「その一厘と言ひますのは、肝腎要めの本人がうちへは歸つてゐないのです。」

「でも、歸つて來るんですか。」

「今日は兪大尉のおうちで雪見があるのです。お酒盛は湖水の舟の上ですけれど、兪大尉といふお方はもう七十の御老體ですもの、お色氣などはもうからりとお無くなりで、夕方がすぎればきつと送り歸して下さるわけなのですよ。あなたは暫く花嫁御の御部屋へ這入つて、まあお酒でも溫くしてお陽氣に、ゆつくり、あの子を待つてやつて下さいな。」

「それではお神さん案内をして下さい。」

王九媽は秦重をつれて、うねりくねりとまがりながら澤山

の房の前を通つて、一つの場所に來た。二階の小室ではなくつて、平屋が三間つづきである。實にのんびりとさつぱりしてゐた。左側には小女のために小さな房が一つ空けてあつてそこには牀榻などの用意があつたが、實はこれはお客の用に供するもの。また右側にあるのは花魁娘子の寢室で、そこにはしつかり錠を下してある。他の兩側にはそれぞれ耳房があつて、眞中が客座敷といふわけ。上の方には名人の手になつた山水の一幅が掛けてある。香机の上の博山古銅の香爐には、安息香を練り固めたものが焚かれてゐるし、兩わきの書棚には古い美術品がいくらか置かれ、壁にはたくさんの詩の草稿が貼つてある。秦重は自分が文學を解する人物でないのを愧づかしく思つたので、別に詳しく目をとめることも得爲なかつた。ただ腹のなかで思ふには、このやうに外の部屋がきちんとしてゐるのだから內の部屋へ這入れば、その飾りつけは定めし目もあやなものに違ひないが、それを今夜は自分が樂しむのだが、一晩十兩も、これならどうして高いものではない。

九媽は秦の若旦那にすすめて客席へ坐らせると、自分は主人になつてお相手をした。しばらくすると、小女が灯を手にして這入つて來た。また八角の卓子を一つ運び込んだが、季節の果物六皿と、盆に一面の口取小皿盛の類。酒と言ひ肴と言ひ、口もとへ運ばぬうちに先づ香でもつて刺戟をする。九媽は盞をもつて相手に勸めながら言ふ、

「今日は若い者たちはみんなお客がありましてね、だからわたしがお相手をさしていただきますよ。さあさ、呑氣にひとつ、思ふ存分におあけなさいましよ。」

秦重は一たい酒量の多い方ではない。そこへもつて來て尙のこと氣にかけてゐることがあるものだから、ただ半杯ほど飲んだだけであつた。やつと飲みほしてしまふと、もう斷わつて飲まない。九媽が言ふ、

「あなたは、きつとお腹がすいてゐらつしやるのでせう。ぢや、ちよつと御飯を召上つて、それからまたお酒になさいませ。」

小女が雪花白米飯を捧げて來た。一杯たべるとまたお代りをもつて、秦重の目の前へ置いて行く。これは御吸物であつた。お神さんはなかなかいける口だから、御飯などはたべない。酒で御招伴をしてゐる。秦重は一杯食べるとお箸を置いてしまつた。

「夜は長いのですよ」と九媽が言ふ「もう少し召上れ。」

秦重はまた半杯ばかりは食べた。

小女が行燈をもつて來て、

「お湯がわきましてございます。お客さまどうぞお這入り下さいませ。」

秦重はもうお風呂へは這入つて來てゐるのではあつたが、

別に斷わりは言はなかつた。そのまま受けて湯殿へ行つた。しやぼんや香料の湯で一ととほりよく洗ふと、彼は著物を著てまた座敷へかへつた。九媽は小女たちに言ひつけて小皿の類を片づけさせ、寄せ鍋を酒の肴にするのであつた。

折から日はもうとつぷりと暮れてしまつて、照塵寺の夕の鐘はみな撞き終つた。美娘はそれでもまだ歸つて來ない。思ひ焦れて待ちに待つ男をよそに、よき人は樂しみ戯れて何處に時を忘るるやら。よく言ふとほり、待つ身は辛いもの。秦重は思ふ藝者を見ずに家へ歸るのは、あまりにやる瀬ない。お神さんから四方山の話をとりとめもなく聞かされながら、酒を勸められてゐるうちに、どうやらまた一更は終つたらしい。と、急に戸外が騒騒しくなつた。花魁娘子が歸つて來たのだ。

小女の知らせに、お神さんは大急ぎで立上つて迎へに出た。秦重も席を離れて立ちあがつた。見れば、美娘はひどく醉つてゐる。やつと供女中に扶けられて歩ける。入口の前まで來たが、美娘は醉のためにぼやけたその眼に自分の部屋の燈がきらきら眩しく、盞や皿がごつたかへしてゐるのを見て、立ちどまつて尋ねた。

「おや、誰方がいらしつて、うちでお酒をあがつてゐるの。」

「ねえ、お前」九媽が言ふのだ「そら、わたしがいつぞやお前にお話した秦の若旦那がさ、あの方は永いことお前のことを思つてゐて下さるので、もう先から頂き物をしてゐるのだよ。お前にいい機がないものだから、つい一月あまりもお待たせ申してね、今日はいいあんばいにお前が間だから、わたしはあの方をここへお引止めしてあるのさ。さあ一緒においで。」

「秦の若旦那さまなんてそんな名前は臨安一たいでは一向聞かないわね。わたし厭だわ、そんな人のお相手は。」

美娘は身をかはして逃げるのを、九媽は兩手をひろげて、慌ててとめながら言ふのだ。

「あの方はほんとうに頼もしい人なんだよ。嘘ぢやないんだからさ。」

美娘はどうにか身をかはして、やつと入口の部屋まで這入つて、顔を上げて客を見た。どうやら見覺えのある人らしいが、醉つてしまつてゐるものだから、胴忘れしてしまつて名を口に出せない。そこで言つた。

「わたしあの人は知つてゐるわ。でもいい家柄の方ぢやないんだもの。あんな人のお相手などしちや、人に笑はれますよ。」

「これさ、お前」と九媽が「あれは湧金門のわらの緞子店の秦の若旦那さまだよ。以前わたしたちが湧金門に住んでゐた時分に、お前もよくお目にかかつた筈だもの、お顔はよく知つてゐるだらうさ。お人違をしてはいけないよ。わたしはあの方の貴意が見えたればこそ、お引受けをしたのぢやないの。恥をかかせないでさ、わたしの顔も立てておくれよ。いいかげんに、一晩だけでいいのだから、それやお前のために悪いことはわかつてゐるんだが、明日になればそれだけのお禮はしますよ。」

一方口でかう言ひながら、また片一方手では美娘の肩をもつて押すものだから、美娘も、養母にはさからひ切れず、仕方なく部屋へ這入つて客に會ふ。全く、どうしたからとて媽婆さんの口は斬りぬけられぬ、かうしたからとてその手からは逃げ出せない。どうにかかうにかの方法がたとひあるにしたところが結局言ひなり放題になつてしまふのがまだしも憎らしい。

これらの女たちの對話を、秦重は一言一言みな聽きとつたのだ。しかし聞かないふりをしてゐた。

美娘は會釋をすませて、そばへ近づいて行つて坐つた。さてつくづくと相手を見て、甚だ腑に落ちない。ひどく不興になつてむつちりと口も利かない。小女を呼びつけて熱いところを持つて來させて、そいつを大きなどんぶりで飲み出したものだ。美娘が客に敬意を表すために、先づ自分でさういふ大杯を飲み盡すのだらう、とさう思つた九媽は、

「これさ。お前は醉つてゐるんだから、たんとお飲みでないよ。」

「大きにお世話さまですね、わたしは醉つてやしませんわ。」

美娘はさう言ひざま、たてつづけに十杯ばかり煽つた。それこそ酒後の酒、醉中の醉。醉つたまぎれの深酒だつたから足がふらついて立つてもゐられなくなつたのを自分でも氣がついた。そこで小女を喚びつけると寢室を開けさせて、灯をともさせ、頭飾もとらず、帶もほどかず、繡鞋を足で拔ぎ捨てて、著物のままで、倒れて臥てしまつた。

お神は娘のこのやり方を見て、甚だ氣に入らない。秦重にむかつて言ふのだ。

「むすめはお客さまに慣れてしまつて、我儘で仕方がありません。今日はあの子がどんなつもりなのだか一向わかりません。きつとむしやくしやした事があるんですよ。あなたのせゐぢや無いのですから、どうぞお氣を惡くなさらずにねえ。」

「何の。どういたしまして。」

秦重はさう答へた。お神は秦重に酒を何杯か勸めたが、秦重は再三ことわつた。お神は彼を寢間の方へ送り込みながら、耳に口をよせて「あの子は醉つぱらつてゐるのですから劬つておやりなさいよ」さう言つてから、又、聲を高く呼んだ「美娘や、さあ起きて著物を脱いで、お休みよ。」

美娘はすつかり眠込んでしまつてゐて、まるで返事もしなかつた。

お神が行つてしまふと、小女が來て、皿や杯をかたづけ卓を拭いてから言つた、

「秦の若旦那さま、お休みなさいませ。」

秦重が言ふ「熟いお茶を一つ貰つて置きたいのですがね。」

小女は茶瓶に濃茶を入れて部屋へ持つて來た。それから部屋の扉を閉めると、側の室へ引き下がつてしまつた。秦重はつくづくと美娘を見ると、彼女は敷布團の上へ顔を押しあてて、ぐつすりと睡入つてゐる。錦の掛布團は體の下へ敷き込んでしまつてゐる。秦重は酒に醉つた人がよく風を引くことを思ひ、しかし彼女の目をさまさせたくないとも思ふ折から、見れば欄杆の上に別に一枚の紅い絹の掛布團が置かれてあるのを見つけたので、そつとそれを取り下すると美娘の體に着せかけた。さて灯をひきよせて、あかあかと挑たて、あの熟いお茶の瓶を持つたまま、鞋を脱いで牀に上つた。美娘のそばに寄り添ひながら、左手には茶瓶を懷に抱きかかへ、右手は美娘の體の上にのせた。さうして眼を閉ぢようともしなかつた。情は交さぬながらにも、香床しい玉の膚は身に近い。

さて美娘は睡つたままで夜中になつたが、目が醒めてみると、酒の爲めに苦しくつて我慢が出來さうにない。胸もとがむかむかとして來た。爬ふやうにして寢牀のなかに起き上つた。うつ伏せになつてしきりと空嘔氣をしてゐた。秦重も急いで起き上つて、彼女が吐きたがつてゐると見るなり、抱いてゐた茶瓶は放出して、彼女の背をしばらくの間は撫でてやるのであつた。美娘は喉にこみ上げて來て、言ふより早く、もう口から吐き出した。秦重は寢牀を汚すと見てとつて、自分の道袍　袖廣の上著也）の袖をひろげて彼女の口に當がつた。美娘は何が何やらわからなかつた。思ふ存分に吐いてしまふと、再び目を閉ぢて、口を嗽ぐための茶を求めた。秦重は寢牀から下りると、手早く道袍を脱ぎすてて、それを床の上へ置き茶瓶をさがした。まだ冷めないでゐるのを、一杯くんで、その香の高い濃茶を美娘に渡した。美娘は二杯飲んだ。胸のなかはそれでもうさつぱり落着いたやうではあつたが、體はやはりぐつたりとしてゐるので、もとのとほりに打倒れて、腑伏のままに睡入つてしまつた。秦重は脱ぎ棄てた道袍をとり上げて、袖に吐いてあつた汚物を、くるくると卷き籠めてそれを牀のそばへ捨て置いた。さうしてもとのとほりに牀に上つて、また初めの時のやうに美娘を抱いた。

美娘はその一睡でぐつすりと夜明まで眠つて目が覺めたが、寢がへりをして見ると、傍に誰だか寄添うてゐる。それで尋ねた。

「あなたは誰方ですか」

「わたしは秦といふものです。」と秦重は答へた。

美娘は昨夜からのことを思ひ出さうとしてみたが、ぼやけ

てしまつてゐてどうも本當の事がわからない。そこで言つた、

「わたし、ゆうべはひどく醉つてしまひました。」

「それ程ではありませんよ。」と秦重が答へた。

「吐きはしませんでしたか知ら。」

「いいえ。そんな事はありませんよ。」

「まあさうなら好うございましたけれど」美娘は言つたもののしかし思ひかへしてまた言つた。「でもわたし、何だか吐いたやうな覺えがありますよ。それにお茶も飲んだやうに思ひますの。まさか、夢ではありますまい。」

さう言はれて秦重はやつと初めて言ふのであつた「吐きましたよ。實はあなたがあんまりお酒を上がるものだから、吐きはなさるまいかと思ひましてね、わたしはお茶をもらつて懷で暖めて置いたのでした。すると案じたとほりあなたは吐いて、お茶を仰言るのです。わたしが汲んで差上げると、あなたはわたしの心をお受け下さつて、二杯も飲んで下さいましたよ。」

美娘は大へん驚いた「その汚いものはどこにありませう。」

「あなたのお牀がよごれると惡いと思つたので、わたしの袖のなかへ入れました。」

「今、どこにありますの。」

「著物と一緒にまるめてあそこにあります。」

」お氣の毒に、あなたの晴の御著物を臺なしにしてしまひましたのねえ。」

「わたしの著物にとつては仕合せな事でした。あなたのもので濡れたのですものを」秦重はさう答へた。

美娘はこれを聽いて、心のなかにこれは愛の味のわかる人だと感じた。その心には幾分かの喜びが湧いた。

この時夜は明け放れてあかるくなつた。美娘は起きて牀を下りて憚りへ行つた。秦重をつくづくと見て、やにはに想ひ起したのは、これは油賣の秦さんだつたといふ事だ。たうとう尋ねるには、

「どうぞ、わたしに本當のことを言つて下さい。あなたはどういふ方ですの。どうして昨晩はここにゐらつしやつたの。」

「花魁娘子ともある方がおたづねなさるのだから、どうして出任せが言へませう。わたしは實は、日頃からお宅へ參りますあの油賣の秦重でございます」と彼は、たうとう始めて彼女が客を送り出すところを見たことから、二度目には轎に乘るところを見かけて、心に慕はしの思ひがつのり、遊びの代を積立てた事の次第をつぶさに一とほり語つてから、「昨晩はあなたのおそばで一晩を明させていただいて、おかげさまでわたしの過去も現在も未來も三世の仕合を得たといふものです。わたしの願ひは叶うたのです。」

美娘はこれを聞いてから一とほと氣の毒の思ひを增して言つた「昨夜はわたし、醉つてしまつてゐたものですから、何

のおもてなしもいたしませんでした。あなたに無駄なおあしをどつさりお使はせして、ほんたうに濟みませんでしたのねえ」

「あなたは天上の仙女です」と秦重は答へた「わたしはただお世話が行屆かぬのではないかとそればかりを心配いたしました。あなたの御小言がないのはわたしには此上もない仕合せです。何のわたし風情が柄にもない及ばぬ願を持つものですか。」

「あなたは商ひをなさるお方、少しづつやつとお蓄へになつたお金を、どうしてお家の爲めに殘してお置きなさらなかつたの。あなたは出稼ぎの方でいらつしやるでせう。」

「わたしはひとり身です。家の爲めとおつしやつても、妻も子もない者です」

美娘は默り込んでしまつたが、やがて言つた「あなた、今日お歸りになつたなら、いつかはお出でなさるでせう」

「いえ、いえ。昨晩かうして一晩お近づき申した上は、もう日頃の心は滿足いたしました。この上はどうして又身に餘るやうな大望は持ちませうか。」

美娘は秦重の返事を聞いて、心に感じたには、何といふ世にも珍らしい好もしい人であらう。賴み甲斐はあり、分別はあり、その上にまた情も深く粋も利く。厭はしいことは隱してくれる、氣に會つたことは言つてもくれる。たとひ千百萬の人に遇はうともかういふ人をひとりはなかなか出會すものではない。殘念なことにはただの素町人だが、これがもし身分のある家の若者なら、かういふ人にこそ身を任せて苦勞をしてみたいものだ。

美娘がそんなことをぢつと考へ込んでゐる折から、小女が顏を洗ふ水を捧げて室に這入つて來た。それから姜我湯を二杯。秦重は顏を洗つた。しかし、昨晩から枕はしなかつたから髮は別に梳く必要もなかつた。姜我湯を幾口か飲んでから、さて別れを告げるのであつた。

「もう少しはここに居らつしやつてもよろしいのよ。お話し申したい事もありますのに。」

美娘がさういふと、秦重は答へた。

「わたしはあなたをお慕ひ申してゐる者でございますもの、それは一時でも多くお傍に居たいのはやまやまです。それにしても人樣のことは考へずに自分ばかりを言つては居られますまい。昨晩からこちらに居させていただくのさへ不屆な事、これがもしも外へもれて、お名前にかかはるやうなことでもあつてはと、そればつかりが心配です。どうやら、早くお暇を願つたはうが無事のやうでございますよ。」

美娘はうなづいた。それから小女を室の外へやつてしまつて、急いで化粧箱を明けると、二十兩の銀を取出してそれを秦重に贈りながら、

「昨晩はほんたうにお迷惑さまでした。この銀は少しばかりではありますが、あなたの資本に差上げたいのです。誰にも言つてはいけませんわ。」

しかし、秦重はそれを受ける筈もない。

美娘は更に言つた。わたしのお金は手に入るのも容易。ほんの僅かではありますが、あなた一晩の御親切のお禮ですよ。さう仰言らずに御受取り下さいな。もしまた、元手でも御不足のやうな節には、いつか御役に立つことも御座いませうから、わたしがおよごし申したあの御著物は、子女どもにきれいに洗はせてお返しいたさせますわ。」

「あんなわたしの著物なぞ、決して御心配は下さいますな。わたしは自分で洗濯出來ますよ。それにしても折角ながら御惠みのものは頂くわけには參りません。」

「まあそんなこと仰言らないでさ。」

美娘はその銀を無理に秦重の袖のなかへ押し込んで、彼を推やりながら自分は身を退いた。秦重は推却すことは出來さうにないのを見て、ともかくも受けた。丁重にお辭儀をすると、例の汚れた上着をもつて急いで部屋の戸口を出た。仲居の部屋の前をとほる時、仲居は彼の姿をみつけて叫んだ、

「お神さん、秦の若旦那がお歸りです。」

王九媽は折から淨桶の上で憚をしてゐたものだから、口さきだけで叫んだ、

「秦の若旦那、お歸りがあんまり早いぢやありませんの。」

「ちよつとばかり野暮な世間用がありましてね。いづれそのうち出直してお禮に參ります。」

秦重は別にくどくどとは言はずに行つてしまつた。

さても美娘と秦重とは、膚身を許した間柄ではなかつたが、女は男の實意のこもつた心を知つて、歸つて後も氣の毒に思ふのであつた。或日、惡醉のおかげでお客を斷つて、家に垂れ籠めて休んでゐたことがあつたが、數知れぬ古い馴染客のことは一向に思ひ出しもせずに、秦重の事だけをまるきり一日思ひつづけたものであつた。そのころかういふ唄があるのでもよく判る——

廓に慣れたる殿ならで、こがるる主は商人の、堅氣な方が何として粋と甘いを嚙みわけた。こころ盡しのわけ知りや。おもひやりある主さんの、よもやかけまい薄なさけ。思案つくして忘れようと、さう思ひ出してゐるわいな。

說は二つに分れるが、かの朱十老の家に在る番頭は、女中の闌花と出來合つてしまつて、主人の朱十老が永患ひで牀についたのを、全く見向きもしない。朱十老は幾度か怒つた。

番頭と女中とのふたりは、一つの惡企みを思ひついた。夜が靜かになつてだんだん更けてくるころを見はからひ、帳場の現金をかつぱらつて、雲を霞と逃げ去つて行方も知れぬ。翌朝になつて朱十老はやつと氣がついて、近所の人に賴んで盜難屆を出して、幾日か探したけれども更に樣子はわからない。思へば、いつぞやあの番頭の手に乘つて、朱重を逐ひ出してしまつたことが殘念でならない。今になつて日數が經つてみてすつかり人の心もわかつた。聞けば朱重は衆安橋の近くに借屋をして荷をかついで油を行商してゐるとの事、いつそもとどほりにあの子をつれて來て、死水をとつて貰ひたいものだが、もしやあれがあの時の事を根に持つてゐてくれなければいいが、と、そこで隣の人に賴んで、どうぞ恨はわすれて昔の誼だけを思ひ出して家へかへつてほしいと、ねんごろに朱重を說いて貰ふことにした。

秦重はこの言葉をきくと直ぐさま、その日のうちに家財をひつくるめて、十老の家へ移り歸つて來た。顏を合せて互に心の限りに泣いたのである。十老は有つただけの金銀は一つ殘らず秦重に讓渡した。秦重は自分でも亦二十兩から資本がある。そこで再び店を整理して帳場に坐つて油を商つた。朱の家へ歸つて來たといふのでまた朱重と名告つて、秦といふ字は使はなかつた。

一月にもならぬうちに十老の病が重くなり、醫者の治療も甲斐なくて、悲しい事になつてしまつた。朱重は胸に槌を打たれる思ひで聲をかぎりに泣叫んだ。葬儀服裝から四十九日間の法事まで生みの親につかへるのと全く同じやうに盡すのであつた。朱家の墓は淸波門のはづれにあつたのだが、朱重は眞心を盡して安らかに葬らひ、何ごとにつけても禮儀を缺さなかつた。隣近所みな、朱重の忠實な心掛を賞めぬものはなかつた。

葬らひの事も落着くと、またもとのとほりに店を開いたが、もともとこの油屋は老舖の事ではあり、以前から景氣がよかつたのを、あの番頭があまり掛引がひどいので一時は得意先をも失ひさうではあつたのに、今は若旦那が歸つて來たといふので誰しも買はぬものは無い。それ故景氣は以前にも一段と增る勢。朱重はたつたひとりではあり、誰かしつかりした手代を至急に欲しがつてゐると、よく口入をする金中といふ人が、或日、ひとりの五十あまりの年寄をつれて來た。

一たいこの人こそは幸善であつたので、汴梁の郊外の安樂村に住んでゐたものが、いつぞやの年に戰の騷ぎを避けて南の方へ逃げたが官軍の兵のために、娘の瑤琴は追ひまくられて、夫婦ふたりだけがまごまごうろうろとあちらに逃げたりこちらに迷うたり、うかうかと幾年かを過したのであつたが、或日、臨安の繁華な事、そこには北の方から落延びた人が大部分その地に居着いてゐると聞きもしたので、もしや娘が

そこに流れて行つてゐはしないだらうかと、わざわざここに來て手蔓を搜してゐるうちに、身のまはりの旅費はつかひ果す、旅籠屋の拂ひは滯る。宿から追立を食つてどうにも仕方が無くなつた。折から金中の話を聞いてみると、朱家は油屋で油賣の手代を求めてゐるとの事、自分も以前は雜貨の商ひをして油賣なら心得もある。そこへ持つて來て朱の若旦那といふのが汴梁の人だといふ、それなら自分の故郷でもある。さういふわけで金中に紹介されてここへ來たのであつた。

朱重は事の次第をつぱらかに尋ね得て、故郷の人同士が出逢つたのだから、つい知らず心を動かされて、もうしつこく言ふことはない。

「あなたたち夫婦ふたり、それぢや、來てわたしのところへ住み込むがよろしい。鄕親として世話をします。ゆつくりと娘御の樣子をさがされるのがいい。それからさきは後でまた相談もしませう。」

ともかくもといふので二貫の錢を朱重は幸善に與へた。それで旅籠屋も仕拂ひ妻の阮氏をもつれて來て、朱重と引合せもすませた。空いてゐた一部屋を片づけて、幸の夫婦もそこへ來て落着いた。このふたりがまた店のために心一杯精一杯に、店のことや內輪のことをしてくれる。朱重もそれには大へんに喜んだ。

月日は矢の如く、いつの間にやら一年あまりは經つてしまつた。いろいろな人達が、朱重の年ごろすぎても妻を持たぬのを見て、商賣は繁昌だし、爲人は堅いし、仕度金などはいらぬ、娘を妻にしてやつてほしいといふ。けれども朱重は花魁娘子とうたはれる王美の、そのこの上ない美しさを見そめてゐるのだから、ありふれたのはどうも目にとまらない。腹ではぬるすぐれたのでもあつたら、まあ考へて見てもいいぐらゐな調子である。それでついその儘にのびのびになつてゐる。言はば「一たん海へ入つたのはもう眞水にはならない。——心に染みたのでなければ語らひたくない」といふわけである。

さて美娘の方はといふと、九媽の家にゐて、嬌名をうたはれて朝から晚まで氣隨氣儘。所謂、御馳走が鼻につきお蠶ぐるみでも重いといふ身分である。さうはいふものの見かけはかうしてゐてもいつも苦勞の絕え間はない。お客たちが身勝手なことをして、嫉妬をしたり或は相方を代へたり、さうかと思へば自分が病氣になつたり苦しい酒の醒め際などに、夜も更けわたつた折から、誰もわが身を劬はつてくれる人とても無いにつけ、秦の若旦那の好もしさを思ひ出しては、また會ふ折もないのを恨むのであつた。

しかしそのうちに彼女の惡運の星もどうやら變り目になつて來たらしい。一年の後にふとした事が持ち上つたのである。

ここに臨安の市城の中に、吳八公子といふのがあつた。父

親は吳嶽と言つて現に福州の太守をしてゐる。この吳八公子は今度、父親の赴任と一緒にここへ來たのだが、金銀はなかなかある。いつも暇なものだから、博奕は好きなり酒は飲む。遊女屋は歩きまはるといふ仕末。それが花魁娘子の評判を聞いてはゐるが、まだ顔は知らない。度度人をよこしては迎へに來て、彼女と馴染まうとしてゐるのだが、美娘は彼の氣質を聞いて氣に入らないものだから、事にかこつけては毎度斷つてゐた。吳八公子が遊蕩兒連と一緒に自分で王九媽の家へ出かけて來たことも幾度かあつたが、いつも會はないでゐた。

清明節（三月の節句）になるころの事であつたが、家家では墓詣りをする。方方へ野遊びに出かける。美娘は毎日毎日の春の遊びに草臥れたところへ、また詩や畫などの約束がどつさり滯つてしまつて、まだ果してないのがある。そこで家中の人に言ひつけて「一切お客さまが見えてもどうぞ辭つて下さい」といふので、部屋の扉は閉め切つてしまつた。

香爐にはよき煙をたたせて、さて筆紙墨硯の文房四寶を取揃へて、今や筆をとらうとして居た折しも、ふと戸の面の騷ぎを耳にした。これは吳八公子が十何人といふ惡い家來を引つれて美娘を押遊びに迎へに來たのだ。仲居たちがいつも彼をかへすといふので、家の中へ來て亂暴をし出したのだ。道具類をたたき壞し投げ壞し、美娘の部屋の眞前まで乗込んで來たのである。一たい妓樓には客をかへすのに方法があつて、藝者を部屋のなかへかくまつてしまつて、部屋の扉は閉め切る。さうして客には留守だと言つて申しわけをごまかす。堅氣な人ならこれでだませるものなのだ。吳八公子はといふとこれはその道の人だから、どうしてこんな月並な手に乗るものぢやない。家來に言ひつけて扉の錠前は扭ぢ切らせると、扇を蹴飛ばした。美娘は身をかくす間もあらばこそ、公子のために見つけられてしまつた。有無を言はさず、ふたりの家來に言ひつけて右左から手をひつぱらせて、部屋のなかから外へ引きずり出させ、口ではなほも罵りわめき立ててゐるのである。王九媽は出て行つてあやまり宥めようとしたが、權幕があまり凄じいのでそれすら出來ずに逃げてしまつた。家中のものは誰も彼も隱れてしまつて人影半分も見えない吳八公子の惡黨家來は美娘を引きずり出して王九媽の表門を出た。彼女の鞋の小さいのもかまわず、街のなかを飛び跳ねた。公子はそのあとについて、鼻高高と誇らしげである。西湖のほとりに來た美娘を湖水の船のなかへ引きおろして、そこでやつと手を放したものだ。

美娘は十二の年から王九媽の家に來て、綾錦につつまれて育てられ、珠玉の御皿で御膳立をされた身の、今までにどうしてこのやうな辱めを受けたことなどがあらうか、船におろされると船頭の方に行つて、面をかくして大聲を上げて泣い

た。吳八公子はまだ顔色を和げず、ぷんぷん怒つてまるで關羽が刀をひつさげて孫權の會に赴く舞臺をそのまま。一臺の床几に腰かけて外むきに坐ると、家來どもはみんなその傍にひかへ、一方では船を出すように言ひつけ、また一方ではそれからそれへとつづけざまに罵り叫んだ。

「この素町人め。不見轉女が。人のひいきをも恭いと思はず、いつまでも泣いたりなどしてゐると擲りつけるぞ。」

美娘はそんなことぐらゐ怕れる筈はない。哭きつづけてやめなかつた。

船は湖心亭に着いた。吳八公子は御馳走の重箱を亭内に用意させてある。自分は先づ船から出て、さて家來に言ひつけた「その素町人をつれて來て酒の相手をさせろ。」

美娘は欄干にしがみついたまま、そこから離れ去らうともしない。ただ大聲に泣きわめくばかりである。吳八公子もさすがに興が失せるやうな氣がした。彼は何杯か手酌でひつかけると、ひつ返して船へ下りて來た。自分で美娘を引つぱつた。美娘は兩足をばたばたと地團太ふみながら、泣き叫ぶ聲は益高くなつた。吳八公子は非常に怒つて、家來を叱つて美娘の髻を引拔かせた。彼女は髮をふり亂して逃げ出して舳から水へ飛び込まうとしたところを、家來たちのため抱きとめられた。

公子は言つた「横着者。貴樣などは怕れはせぬぞ。貴樣などはたとひ死んだところが、おれはただ銀の二兩も無駄費ひすれば素知らぬ顔で濟ませるわい。だが死ねば貴樣の死に損だ。それに寢醒めもよくはないわ。もし貴樣が哭きやむやうなら、おれは貴樣を歸してやる。どうだその方が貴樣もよからう。」

美娘は歸してやると聞いたものだから、ぴたりと哭き止めた。吳八公子は命令をして淸波門の近所の人目の少いあたりへ船を着け直させた。そこで美娘の美しい飾鞋を脫がせ、纏足の布をも剝取らせると、一對の金蓮（婦女の美しい足のこなり）がむき出しになつた。まるで二本の玉で出來た筍のやうな形である。そこで家來を叱りつけて彼女をひつぱらせて岸へ上らせた。さうして罵つて言つた。「素町人め、貴樣にだつて能力はある。自分で家へ歸れ。誰も送つてなどはやるものか。」言ひ終ると一緒に一竿ぐつと押し出すと、船は再び湖のなかへ向つた。まことに、琴を焚いて鶴を煮る無風流漢は昔からよくあるが、玉を惜しみ香を憐れむ深き情を知る人も稀れである。

美娘は足をまるだしにされてしまつては、一寸も歩くことが出來ない。心に思ふには、己は心も顔立も何不足なく、ただ泥水のなかに身を沈めたばかり、このやうな辱しめをも受けるのである。日ごろは徒らにあまたの王侯貴人を知り合つてはゐるけれども、いざといふ時にはその人たちも何の役に

も立つてはもらへない。さうしてこんな恥をも豪る。たとひ家に歸つて見たところで、どうして人に顔向けが出來ようか。いつその事死んでしまつた方が增しである。それでも死んで何の譽れになることでもない。心ならずもこのやうに名を謳はれ、このやうな身分にもなりながら、思へば百姓家の女房が自分などよりはどれだけいいかわからない。これといふのもみんなあの時あの劉四媽のあの口さきが自分をたぶらかして自分を深い穴のなかに落しこみ、壕のなかへすべり込ませて、おかげで今日のやうな事になつたのだ。昔から見目美しければ幸少しとはいふものの、それにしても誰だつて自分のやうにかうひどくは有るまいに。——かういふ風に、美娘は思へば思ふほど苦しさ悲しさが募り、聲も出るにまかせたままにはげしく哭いた。

折も折とてひよつくりと、朱重はこの日清波門の外の朱十老の墓場へ來てゐたのである。お墓詣でをすませて、祭物を置くと船を下り、自分は歩いてこのあたりを通りかかつた。人の哭き聲を聞いたものだからやつて來てみると、髪もしどろに顔もけがれてはゐるけれども、玉なす貌花のすがたは、もとより二つとはないばかりのもの、どうしてこれを見忘れようか。甚だ驚いて言つた「花魁娘子よ。これはまたどうしたお姿なのです。」

美娘は哀しみ泣いてゐた折から、なれなれしい聲を聽きつけたものだから、泣く聲をやめてよく見ると、これはそもそも深切も情愛も深い秦の若旦那であつた。場合が場合でもあつたしこの時は親切な人を見る心地がして思はずも心の限り肚の底まで明して、事の始終をこの人に告げ訴へた。朱重も心のうちに甚だいとしい思ひがしてこれも亦涙を流すのであつた。彼が袖のなかに持つてゐた一筋の白絹の汗巾は、五尺ばかりもあるものであつたから、それを取出して半分に引裂いて、それを美娘に與へて足をつつませ、また彼は手づから彼女のために涙を拭うてもやつた。それから彼女の著物に手をかけ繰返し繰返して溫い言葉で彼女を慰め、美娘の泣きやむのをみて、急いで轎を呼んで來た。美娘にそこへ坐らせて、彼自身は歩いて直ぐに王九媽の家へ送つて行つた。

九媽は女兒の樣子が知れないものだから、四方へ人をやつて尋ねさせ、うろたへ切つてゐる最中に秦の若旦那がその子を送りとどけたのだから、それこそ失はれたと思つた寶の球が一顆、彼女の手に還つたのだもの、嬉がらないわけはない。その上にまたお神は、秦重がその後一向うちへ油を賣りに來ないところから人の話で聞いて彼が朱十老の店の後とりになつて、金廻りも身分も、なかなかどうして今までとは違ふことも知つてゐたものだから、自ら注意を拂つて待遇をした。また女兒のこの樣子を見て、そのわけを聞いて、彼女がひどい難儀の最中を、やつと秦の若旦那の御蔭で助けられたと知つたものだから、重ね重ねに厚く禮をし、酒の用意をさせて歡迎した。

日はもう暮れてしまつて朱重も幾杯かの酒を飲んだものだから、立つて別れの挨拶をすると、美娘はどうしても歸さうとはしない。

「わたしはいつも心にあなたの事を思つて居りましたのに、ついぞお目にかかれないのを殘念がつてゐましたのに、今日こそどうしてあなたをこの儘でお歸し出來ませうか。」

お神さんも出て來て引きとめる。秦重は思ひも設けぬ喜びである。

美娘はこの夜は舞ふやら歌ふやら、絃を彈くやら笛を吹くやら、ありつたけの藝を盡して秦重をもてなした。秦重はまるで仙界に遊んだかのやうな夢心地、喜しさのあまり魂もとろけ心も飛んでしまふ。手も足もぢつとしてはゐられない。夜ふけまで宴は盛んであつた。……

美娘が言ふのである、

「ね、わたし、是非とも聞いていただきたい事があります。言ふからあなた、いやだとおつしやらないでね。」

「え、え。わたしの身に協ふことならば」と秦重は答へた。

「火のなかへでも湯のなかへでも飛び込みます。いやだの、聞かないのとそんな筈があるものですか。」

「わたしね、あなたのところへお嫁に行きたいのです。」

しかし秦重は笑つた「あなたがお嫁に行く方を一萬人お數へになつたからとて、わたしの番にはまはつては來ますまいよ。笑談はおやめなさい。それにわたしの食代だつて足りなくなりますもの。」

「いいえ。わたしの言ふのは心からなのです。どうして笑談などと仰言るのです。わたし十四の時に酒に醉はされて梳弄をされたその時から、お嫁入りをしたいと思込んでゐるのです。それが今だに相手が見つからなかつたのです。好し惡しの見わけがつきかねるので一生の大事を間違へては大變だと思つたのですもの。それはその後もいろいろな方にお目にかかりはしましたけれど、みんな伊達者の遊び好きばかり、ちやほやされて喜ぶことは知つてゐても、ほんたうに女をいとほしいと思ふ眞心などはありはしません。つくづく考へますのに、賴もしい實意のあるお方といふのはあなたばかりだとわたしは思ひました。聞けばあなたにはまだお獨身とのこと、もしもわたしのやうな賤しい稼業のものでもお厭ひなさらぬなら、どうぞわたしを何時何時までも偕白髮であなたに仕へさせて下さいませ。もしもあなたがお聞入れ下さらぬなら、わたしはあなたの御覽になるところで一そ縊れ死んでわたしのこの心をお目にかけるばかりです。それでもまだ、昨日あんな下等な人たちの手にかかつて殺されて、名譽も外聞も失ひ人の笑ひの種になるよりは、ずつと增しでございます。

美娘はかう言ひ終つたかと思ふと、聲を上げて泣き出したのであつた。

秦重が言ふ「泣かずともいいのですよ。それほどまでにあなたに思つていただいて、わたしには天にも地にも得がたい幸ですのに、どうしてわたしがお斷りなどをしませうか。でもあなたは千兩といふ値打のある方、それにわたしの家は貧乏、どうしてそれだけのお金を取揃へることが出來ませう。思うても力の及はぬ話ではありませんか。」

美娘が言ふ「そんなことは御心配はありませんの。實はわたしは今までにお嫁入のことを考へて、用意に蓄へたものがよそに預けてあります。自分の身の代には、ちつともあなたの心配はかけませんから。」

秦重が言ふ「身の代はお自分に用意はあつても、あなたは毎日毎日、立派な御殿にゐてお蠶ぐるみに三度三度の御馳走で暮してゐられる身分。わたしのやうな貧乏人のところで、どうして暮してゐられませう」

「わたし木綿の着物で麥御飯をいただいてそれで死んでも厭ひませんわ。」

「あなたはさうだかも知れませんが、それでもお神さんが承知をするかしら。」

「それやわたしにはいい考へがあるのよ。」

かうして、かうして、かういふふうに、と彼と彼女とは語り明して夜が白んだ。

美娘は以前から、黄翰林の若樣や韓尙書の若君、さては齊太尉の執事などと、かういふ大官の知合ひの幾人かのところに、箱や籠などを預けて置いてあつたのだ。美娘はそれが必要な時になつたといふので、方方からそれをあとへあとへと取寄せた。それからこつそりと秦重を招いて、彼に言ひふくめて自分の家のなかへ匿まつた。かうして置いて彼女自身は一臺の轎子を言ひつけて劉四媽のところへ出かけた。

嫁入りをしたいといふことを美娘が訴へると、劉四媽は言ふのである。「そのことはいつかもわたしが言つたとほり結構な事さ。ただ、どうもまだ年が若すぎるのだがね。一たいお前さんは誰のところへお嫁入りがしたいのです。」

美娘が言ふ「姨さん。誰だつて管はないぢやないの。わたし、確に姨さんのお言葉はよく覺えてゐてよ。これこそほんとうのお嫁入りの、樂しいお嫁入りの、行末變らないお嫁入りですわ。どうして嘘のものや、ひと時のものや、末を遂げないものやなどなものですか。ねえ、姨さんさへうんと言つて下されればお母さんの方はどうにでもなるんですわよ。わたしには別段これといふお贈物もないけれど、お金がほんの十兩ばかりあるから、これを姨さんに差上げたいのです。ほんの少しではありますが、叙の一本もお買ひ下さいまし。お母さんにはどうぞよろしく御取りなしを願ひます。うまく事が

成立つた暁には、別に差上げますから。」

劉四媽はこのお金を見ると、目を細くして笑顔になつて言ふのであつた「何のうちのお前さんのことではないか。それに嬉しいことなのだもの。そんなものなどは要るものかね。でもこのお金は假りにまあ受取つて置くよ。お前さんの爲めにしまつて置いて上げるんだからね。しかしこれはわたしの考へだけれども、お前さんは娘なのだから、お前さんのお母さんにしてみれば、謂はばお前さんは金のなる木も同然。さう易易と、お前さんを手放すものか知ら。お金の千兩も出さなければ、あの人はお前さんをうちから出す氣になるか知ら。何にしても、わたしは一度あの人にも會つてお前さんの爲めに、うまい方法を考へて上げますよ。」

「姨さん。餘計なことはどうでもようございますよ。わたしが自分で身代を拂へば、ついそれだけの事ぢやありませんか。」

「で、お母さんはお前さんがわたしのうちへ來た事を知つてゐるの。」

「知らないのです。」

「お前さんはまあ、この儘ここに居なさるのがいいよ。わたしはこれから一つ、お前さんのうちへ行つて、お母さんと相談をしてみるからさ。相談が纏つたらすぐ來て、お前さんに報らせて上げるよ。」

劉四媽は轎を雇つて王九媽の家に行つた。

九媽は迎へて内に這入ると、劉四媽は先づ吳八公子の事件をたづね出すのであつた。九媽が一とほりの事を蹤跡をこぼすと、そこで四媽が言ふのであつた。

「一たい、わたし達のやうな藝者屋では、あまり上玉でない中ぐらゐのを置く方が儲けになるのよ。それにその方が無事でさねえ。どんなお客にだつて相手をするから、遊ばしておく日はないわけだもの。ここのあの子のやうに、ああ評判が高くなつてしまつては、早い話がまあ一尾の養魚が地びたへ落ちて、そいつへすつかり蟻がたかつたやうなもの。景氣はいいけれど、仕末には惡いわね。一晩十兩といつたところが、謂はばただ景氣だけのものだよ。といふのは、お客樣は身分のある方ばかりだから、一遍お來しになつたところで何時もどうどうと幣間をお供にして毎晩朝まで何だかだと事が面倒で仕方がない。取卷きがどつさりでないといふと自然苦情も多くなり、不行屆でも仕出かさうものなら嫌なことを言つてうるさく叱りつけたり、道具を傷めたり、それを家主の方へは一一さうことわつて行けばこごとは言はれるしさ。そこへもつて來て、書家やら詩人やら浮世ばなれの閑人のあまりが、一月のうちには屹度幾日かあるわけだから、これがまたお金持ち連のお坊ちやんとはそりが合はぬ。一方が得意になれば一方が氣に入らぬ。張家を引受けて李家を斷われば、

片方ではよろこぶが片方では屹度怒る。それにしても今度の吳八公子の騷ぎといふのは、これがまた命取りとも言ひたい出來事だねえ。若しもひよんな事にでもならうものなら、お役人と下下との喧嘩なのだから全るで裁判沙汰にもならぬわけさ。是非とも虫を殺して我慢をしなければならぬわけだのに、でも、今日のところは此方の人氣が素晴らしいものだから、先づ先づ無事にをさまつて謂はば空雷鳴が鳴つたやうなもの。若しこれが一方が山で此方が水で——迚もつり合ひの取れぬやうな間だつたら、取返しのつかぬやうなことになつてゐたのだがね。聞けば吳八公子は今度の事を面白く思はぬとかで、まだここと喧嘩をしたがつてゐるらしいやうすださうではないかねえ。一たいうちのあの子は、氣立てはよくないよ。何時だつて人の言ふことはきかないんだものさ。今度の事だつても皆んなそれがもとではないか。」

九媽が言ふ「全くその事だよ。わたしもそれが心配でねえ。吳八公子は名高い偉い人で下下のものとは違ふんだのに、あの子が死んでも嫌だなどと振るものだから、今度のやうな事が持ち上るんだよ。以前、まだ小さかつた頃にはどうやらわたしの言ふ事をきいて、今日のやうな評判も出來、お金持の坊ちやんや若樣がお出でになつてあれの機嫌を取つたり、おだてたりするものだから、それが馴れつこになつてしまつてあいつを甘へかして終つたのだよ。何かにつけて我儘ばかりして、お客が來たとて自分の好きな時ばかりは相手もするが、嫌だと言ひ出したら牛を九匹で引張つたつて、あれを動かす事は出來ないのさ。」

劉四媽が言ふ「一たいが少しいい子になると、皆んなそれさ。」

「就てはお前さんにも相談をしたいのだが、若しも誰かお金を出す人でもあれば一そあれを賣つて終つたら、却つてさつぱりして何時ものうのうして暮せるかも知れぬのだがねえ」

「なるほど。これはこの上なしの考へだねえ。あの子を一人賣つて終つて、外に五六人を抱へる事にすれば、うまく行くやうだとひよッとして相當な玉が十ぐらゐは買へるかも知れないよ。かういふいい事こそ早速やらねばなりますまいねえ。」

「わたしは前前から氣をつけて考へてはゐたのだがね、羽振りのいいやうな人はお金を出したがらないものだから、よくよく相手を詮議してかからなきや。また幾らかお金を出す事を承知する段になつて、子どもが難癖をつけて嫌がるやうでも困るし、手頃な旦那があつたら、お前さんに取りもつて貰ひたいものだよ。どうぞ纏めておくれ。若しまた、いざといふ時節になつてあれが首を振るやうならお前さんにおだててもらはなきや。あいつはわたしのはなしは根つからきかないんだからね。ただお前さんが話してくれさへすれば、あれもそ

の氣にはなるんだよ。」

劉四媽は大きな聲をあげて笑ひながら言ふには「わたしがあの子の爲めに仲媒をする段になると、一たいお前さんは幾らのお金を取つたらあの子をうちから出すつもりですかね」

「お前さんはもの解りのいい人だよ。この商賣には安買ひといふこともあるのだもの、そりや安賣りだつてあるさ。でもあの子はここ幾年か全盛で、この都では誰知らぬ者もない花魁娘子ではないか。まさか、三百兩や四百兩の金であれが動く筈はなし、きつと千兩は出すでせうさ。」

「それぢや待つて居らつしやい。條件に叶ふやうなのがあつたら、またそのうちに來ておはなしするから。若し掛合ひがつかなかつたら、來ませんよ。」劉四媽は歸りがけになつてわざと尋ねるのだ。「一たいあの子は今日どこへ行つたんです。」

王九媽が言つた。「問はないでおくれよ。あいつは吳八公子はたまげさせられてからと言ふものは、また來て暴ばれられては大變だといふので、一日中轎に乘り廻して方方のお屋敷へ行つては言ひつけて歩いてゐるのだよ。一昨日は齊大尉のお屋敷に居つたし、昨日は黃翰林のお屋敷に居たさうだし、今日はどこをうろついてゐるものだか。」

「御主人のあなたがさう秤の目を決めたからには、あの子も屹度言ふことを聞かないわけには行きますまいよ。萬一きかぬやうな場合には、わたしもあの人によく勸めてみますが、ただ旦那を見つけて來てから、あんたが調子に乘つてつけ上がるやうな事はありますまいね」

「それは一旦言つたことだもの。何で二枚舌を使ふものかね。」

九媽はさう言ひながら四媽を門口まで送つて出る。四媽はかまびすしく挨拶を囀りつづけて轎に乘つた。全くはや、口先きの上手な雌陸賈、鶯を烏と言ひくるめる女隨何、やりて婆さんの口先きのとほりなら、深さ一尺の水に萬丈の波も興らうといふもの。

劉四媽は家へ歸つて、美娘に言ふのである。

「わたしはお母さんに會つて來て、かういふ風に今度の相談を持ちかけると、お前さんのお母さんはすぐと言ふとほりになつたが、ただおあしの顏を見せてやらずばなるまいが、これがすぐにもどうにかなるか知ら。」

美娘が言ふには「お金ならわたしはもうちやんと用意をしてあります。姨さん、明日きつとわたしのところへ來て下さいませ。首尾よく成就させるには、お天氣の變らぬうちにもう一度改めて御相談をお願ひしますから。」

「さうと決めたからには勿論、お宅へ行きますよ。」

美娘は劉四媽と別れて家へ歸ると、この話は別になかつた。

次の日のお午頃に劉四媽は約束通りやつて來た。王九媽が「どんな鹽梅だね」と尋ねると、劉四媽は「八九分通りは大丈夫。ただちよつと當のあの子に會つて說き伏せて見なきや。」さう言つて彼女は美娘の部屋の中へ這入つて來た。相方互に聲をかけ合つてからしばらくはなしをするのであつたが、四媽は尋ねた、

「で、一たい旦那といふ人は見えぬやうだが、れいのおあしはどこに來てゐるんです。」

美娘は寢牀のあたりを指しながら、「それ、そこらにある鞄の中にありますよ。」

言ひながら美娘は五六箇の革の鞄を取り出して皆んな一度に展いた。五十兩を一包みにしたものを十三四包み取り出して、それにまた金や珠玉や寶石をも取り出したが、その價だけでも千兩がものは充分ある。劉四媽はそれを見ると吃驚して目からは火が出、口からは涎が流れて、心の中に思ふには、こんなに若くてこれ程の深い考へがあつたか。どんな仕方でこんなにどつさりなものを貯めることが出來たのだらう。うちにも幾人も藝者があつて、皆んなお客を持つてゐるのに迚もこの子には叶ひはせぬ。金持ちになれぬなどは言ふまでもないこと、幾文ぐらゐ持つてゐるだらうかと尋ねると、西瓜の核子を食べ、飴玉を買つてしやぶれば後は破れた紙下どめも買ひ代へられぬ始末。わたしがあれらの偽めにそ

の布を買つてやるのではないか。それにつけても九媽姉さんといふ人は、どこまでも仕合せに出來てゐることだか。永い間この子でいいお金儲けをして置きながら、いざ家から出るとなるとまたしても大したお金が這入るのだから、こんなにうまい汁を吸ひながら、自分は何一つ世話を燒くのぢやない。——こんな事を心の中で思つてゐるものだから、口では何も言ふ暇もない。

美娘は劉四媽が默り込んでゐるものだから、もつとお禮でも欲しい言ふのだらうと、大急ぎでまたしても潞路を四匹、それに立派な銀釵が二つ、まだその上に一揃ひの鳳を型どつた玉の簪を卓の上に投げ出して言ふには、

「この品物をこれだけ姨さんにお仲媒の御禮に差上げますわ。」

劉四媽はそれこそ限りもない悅び、そこで王九媽に向つて言ふのであつた。「あの子は自分で自分の身代を拂ふのだが普通の身受けに比べて少しも値ぎりもしないのだ。お客などが身受けをするのに比べては、仲介人があつてはなしを纏めるのではなし、お茶よ酒よと御馳走をして、その上さういうてあいにもそれぞれに御禮を出さなければならない中といふことはないのだからね。」

王九媽は養女の鞄の中には一ぱいものがあつたと聞き、ちなつと腹立たしさうな顏色だつた。「それどころぢやない。世

間ではやりてだの女將だのと一番ずるいものゝやうに言ふが、藝者になつてもそれぐらゐのものは工夫さへすれば、自分のものに出來るのだからね。」さう言つて、どうやらやつと氣さく氣な顏をして見せた。といふのは、藝者の鞄やつづらの中に金目のものでもあるといふ噂でも聞けば、やりては藝者が外出をしてゐるのを見すまして、鍵を空け、鞄をかき廻はしたりつづらを引つくり返したりして、すつくり取上げて終ふものなのだ。それだのに美娘は、素晴らしい人氣のうちに、交際つてゐるのは皆世の中の大頭株だから、その蓄へたものをこつそり卷き上げるのも憚られ、その上、美娘の氣質がちよつと意地張なものだからうつかりと、かかり合ひはしなかつたものだ。かういふわけで自然、美娘が寢室へは仲居どもなども足は踏み入れなかつた。さうして彼女にこんな錢があらうとは誰も氣がつかなかつたものなのだ。

劉四媽は九媽の顏色が面白ないと見てとると、追つかけて言ひつづけるのであつた「姉さん、あなた氣が變つてはいけないよ。さういふものは皆、あの子が自分で貯めたものなのだからね。それはもともとあんたのものぢやないのだから、あの子が費つてしまひたいと思へば、費つてしまつて今まで殘つてはゐなかつたものなのでせう。みんなお馴染が貢ぎ込んだのだから、あんたの知つた事ぢやないぢやないの。それにこれと家の偽めになつてゐる事はのべつみな導かれ

の子が自分で何の貯へがなかつたら、いざ嫁入りといふ時になつても、まさか全る裸でここから放り出せるものではなし、頭の先から足の下までぜひとも一通りには飾つてやらなければならぬわけ。あの子がこれから他へ行かうといふのに、自分でそれだけのものを持つてゐるのだから、糸一筋だつてあんたが心配してやるものはない——つまりはお金さね。あんたがあの子を着の身着のままで放り出しても、あの子は今朝からすぐにどこへでも行けるといふわけ。それが謂はばお前さんの娘ではないかね。若しも、身分のよい人にでもなつてごらん、物日旗日には多分あの子はあんたのところへ贈物を持つて來るよ。嫁入つて終つたからには、もともとあの子には父親も母親もないのだから、あんたが訪ねて行けばつまりは里方の母、きつと何かともてなすわねえ。」

こんなうまい事を言はれて、王九媽もすぐに涼しい氣持ちになり、すぐ承知して終つた。四媽はそこで銀子を取り出して、一包み一包み量つてからこれを九媽に渡すのであつた。それからまた、れいの金や珠玉や寶石類を取り出して、一一品物を見せて値ぶみをした。さうして九媽に言ふには

「これはね。わたしがわざと安く見積つてあるんだよ。若し誰かに賣りでもしてごらんよ、まだ何十兩と儲かるから。」

王九媽はもともとやりてではあつたが、根はぢみちな人で

あつたが劉四媽がさう言ふものだから、つい取つて置く氣にもなつた。劉四媽は王九媽がこれらの品物を納めたのを見て、亭主を呼んで證文を書かせて美娘に渡してやると、美娘は姨の後を追うて九媽のところへやつて來て、「わたしはここへ、お父さんやお母さんに家を出るお別れに參りました。一二日の間を姨さんの家に居さして頂いて、吉日を選んでお嫁入りをしたいものですが。姨さん、さうさせて頂けませうか。」

劉四媽は美娘からどつさり御禮を貰つてゐるものだから、九媽の心變りをおそれ、美娘をその家から出して願ひ事を叶へてやりたいものだと思ひ、「ああいいよ。さうしなさいとも。」

そこで美娘は、自分の部屋にあつた自分の鏡臺やら化粧函文函、行李などの類を一纒めにしたが、この家のものなどは塵一つだつてごまかしはしない。すつかり取纒めたものだから劉四媽に從ひて自分の部屋を出て、養父養母に別れをするのであつた。彼の姨もその中に加はり、互に挨拶をする。王九媽も一とほりには聲をあげて泣いた。美娘は人を呼んで行李を荷はせいそいそと轎に乘るのであつた。劉四媽も同じくその家を出た。

劉四媽は或る靜かな落ちついたいい部屋へ美娘の行李を置かせると、そこの僕者達も皆んな來て美娘の爲めによろこびを述べる。その晩朱重は莘善を使にして、四媽の家へやうすをききにやつた。もはや美娘の身受けが出來たと聞いて、佳き日を選び笛や太鼓の芽出度い音樂のうちに愛するものを嫁取つた。劉四媽は仲媒親になつて花嫁を送つて行く。朱重と花魁娘子とは新衾の燭火かがやかに、げによろこびは限りなく、古い馴染のこととは言へ、新婚のたのしみは減るわけのものではない。

次の日、莘善老夫妻は花嫁に引合はして貰ひたいと言ふので、それぞれに顏合せをすると、その驚きは一とほりではない。わけを問ひ尋ねて親子三人は、相抱いて激しく泣いた。朱重はやつとこれが舅と姑であつたことを初めて知り、その人に請うて上座に坐つて貰ひ莘善夫妻二人に向つて改めてまみえるのであつた。親しき友達や近所の者達も、これを聞き知つて驚き喜ばぬものはない。この日祝ひの宴を開いて夫婦新婚と親子再會との重ね〳〵の悅びを祝ひ、酒を飲み悅びを盡して宴を終つた。三日目には美娘は夫に賴んで幾重にも充分な御禮を用意して、それをもとの知り合ひのそれぞれのお屋敷に贈り屆け、かうして今まで物を預つて貰つてゐた恩を返し、同時によき夫を得て身の落着いた事を報らせた。これといふのも美娘には初めも立派なれば終りも立派なところがあるわけ。王九媽や劉四媽の家にさへ、それぞれのお禮を贈り屆けたので心に感ぜぬものはなかつた。一ヶ月の後、美娘が

鞦やつうらを開けたが中は悉く金と銀、綾と錦、どうして百やそこらであらうか。併せて三千餘金もあつた。それらのものは悉く金に代へて夫に渡すと、追々と家や屋敷を買ひ財産も整へ、油店の業もすつかり舅がよく目をかけた。一年にもならぬのに、財産は益殖えて來て花か錦かとまがふばかりに家の中は賑ひ、奴は置く婢は使ふ、甚だ芽出度いありさまであつた。朱重は天地神神の身を護つて下さる有難さを感じて、各々のお寺へ合殿香燭を一包み喜捨し、琉璃燈油を三ヶ月の間供養し、もの嫌みをして身を淸め、自分自身で行つて香を炊いて拜んだ。先づ近くの照慶寺からはじめて、それから靈陰、法相、淨慈、天竺などの寺々を次から私へまはつた。その中でも特に天竺寺は觀音大士を祭つたところで、上天竺、中天竺、下天竺の三ヶ所があつて、お詣りするものが最も盛んである。ここは山路で舟では行けない。朱重は人を從れて、香のいい蠟燭を一荷と澄んだ油を三荷と荷はせて、自分では轎に乘つて行つた。最初に上天竺へ行くと、天の僧達は悅び迎へて寺の中に招いた。老いたる寺男の秦公が蠟燭へ火を點けて、香を燻べた。この朱重は住居は心持ちを變へ、食物は體つきを變へるといふ言葉どほり、やうす振りが自ら上品で豐かで、幼い頃のありさまとは似なかつた。寺男の秦公はどうして、これが我が子であらうと知る筈はない。けれども、油桶の表にはあの大きな秦といふ字があり、また汴梁の二字があるので、心の中で甚だ不思議に思つた。正に上天竺へ行くのにこの二つの油桶を使つたといふのも、これも亦自然のめぐり合せであつた。朱重は香をたいて終ると秦公はお茶盆を差出した。頭の僧がお茶を勸めた時に、秦公は尋ねて言つた。

「失禮ながら施主のお方にお尋ね申上げますが、この油桶にある三つの文字はどういふわけでございませうか。」

朱重は問ふ人の聲を聞くと、汴梁の人の土音がある。氣忙しく朱重は尋ねて言つた。

「寺男の方。どうしてさういふお尋ねをなさるのか。どうやら汴梁の人のやうにお見受けするが」

「さうでございます。」

「それではお名前は何といひますか。出家をなされて、ここへ來て幾年になりますか。」

さう言はれて秦公は、自分の姓名や故郷の事などを細細と言つた。それは或る年のこと、職を避けてここへ來たが、暮し向の方法も立たぬから、十五になつた息子の秦重を朱家へやつてしまつたが、今から八年の昔のことであつた。それからと言ふものは年をとり病氣勝ちで、まだ一遍も山から下りぬから、どうなつた事やらやうすも知らぬ。と聞くなり朱重はいきなりその人に抱きついて聲をあげて激しく泣きながら言ふには

「このわたくしこそは秦重でございます。そのうちは朱家にあつて油の持ち賣りを商賣にしながら、お父さんの行衞を知りたさにこの油桶の上に汴梁、秦の三つの文字を書いて置きましたが、これがお目じるしになつてここでお目にかかれようとは、これこそ卽ち天のお引合せです。」

僧達は皆々、この親子が別れて八年にもなつて、今朝重ねて會ふのを見て、何れも何れも珍らしいと言ふのであつた。朱重はこの一日は上天竺に留まつて、父親とともに夜を明かし、互に心のたけを述べ合つて次の日には中天竺、下天竺をめぐり、佛前で祭文を讀んだことであつた。そのうちに朱重といふのを、秦重と呼び直してもとの姓に歸してあつた。二つの場所で香を炊き、禮拜も既に終つて、再び上天竺へまわつて來て父親に家へ歸つて安樂に後生を送るやうにと賴んだのであるが、秦公は出家してもう久しいことになるので、肉食はせず精進を守り、今更子に從つて家に歸らうといふのを秦重が

「わたしはお父さんにお別れして幾年か充分にお仕へも出來ずに居ります。それにわたしは今度嫁をとりまして、あれとてもお父さんにお目にかかりたいのだから、それにはちやうどよい折ではございませんか。」

秦公はぜひなくこれを許したので、秦重は轎を父に讓つてそこに乘らせると、自分は歩いた。

やがて家に着いたが、秦重はまた一重ねの新しい着物を取出して、父の爲めに着換へをさせ、座敷に席を設けて、妻の莘氏とともどもに來てまみえるのであつた。父に當る舅の莘善も姑の阮氏も皆來て會釋をした。この日にも賑かな祝ひの筵を設けたが、秦公は生ぐさ物を嫌ひ精進酒に精進料理で濟ました。その次の日には隣近所の人人が錢を集めて來て祝ひ事を述べた。一つには新婚の祝ひ二つには花嫁の家の慶び、三つには父と子とのめぐり會ひ、四つには秦の若旦那が生家に歸つて若字の變つたこと、これこそ四つ重なる大よろこび。皆んなしてまたまた幾日も慶び酒を飲んだ。

秦公は家にゐることを願はず、上天竺のもとの場所で淸らかに出家で居たい、といふ考へなのだから、秦重も親の考へに背くわけには行かぬ。そこで銀二百兩を持つて、上天竺へ別に淸らかな室を一ところ造らせて、父をそこに送つて住はせることにした。その日日の費用は、これを用意して毎月仕送つた。十日毎にはきつと一度父さんの機嫌を伺ひに行く。季節季節には妻の莘氏もきつと一度は伺ふ。秦公はかういふ風にして八十を越えて、行儀よく坐つた儘で遷化され、遺言によつて本山へ葬つたが、これは後のはなしである。さて、秦重と妻の莘氏とは仲睦しく夫婦共共に年とつて、二人の子供が出來、二人とも學問をして名を擧げた。今になつても、花柳界の言葉で、總て僧の厚いことを人人が言ふ時には、秦

の若旦那の事を言ひ、また油屋さんとも言ふ。そのしるしにはかういふ詩もある——

春立つと百千の花のさき競へば
蜂と蝶とのわれがちに春を探ることよ、
家柄を誇る若者の數はあれど
笑止や、風流男はただ油賣りのみ。

百花村物語

大宋の仁宗の時代のことであるが、江南縣の首都たる平江の東門外に長樂村といふのがあつた。平江からはほんの二里ばかりのところである。その村に、姓は秋、名を先といふ一人の老翁が住んでゐた。もと農家の出で若干の田畑と一軒の住居とを持つてゐた。妻といふのは早く死んでしまつたので、男の子も女の子もひとりもなかつた。この秋先といふ人は若い頃から花を栽ることと果樹を育てることが大變に好きでしまひには耕作のことは抛つてしまつて、ただもう自分の最も好きな仕事に身を委せてしまつた。この人がもし種の變つた花でも見つけようものなら、それこそ、まるで普通の人が寶でも手に入れたやうな途方もない歡び方で、だから何か大事な急ぎの用があつて道を歩く時だつて、途中で花や樹木に逢ひでもすると他がそれを見せたがらうが見せたがるまいがそんなことには一向おかまひなしで相格を崩して近づきながら花を見せて欲しいとせがむのであつた。それで若しそれがありふれたものであるとか、でなくとも自分の庭にあるもので自分のもそれと同じに今咲き誇つてゐる種類のものであると、それで滿足して立去るのであつたが、さてそれが自分に持つてゐない稀らしいものであるとか、それとも自分の庭にもあるにしても自分のはもう花の散つてしまつてゐるものであると、秋先は大切な用事などはすつかり忘れてしまつてその傍に立つたきりいつまでもいつまでも去り兼ねて、永い日を花のそばに立ち盡すのであつた。人々は彼のことを花痴——花氣違ひ——と呼んでゐた。それほどだから彼が花賣りに逢つて好い花でもあるのを見つけると、手もとに金が有るか無いかそんなことなどは考へるひまもなくどうしても買ひ取らないでは居られなかつた。金のない時には身につけてゐた著物を脱いで花の代にと渡した。花賣は彼のこんな性分を知つてゐるから途方もないことを言ふ。けれども手に入れさへすれば値の高いなどは我慢をして買つて歸るのであつた。又、心がらのよくない輩はこの人がこのやうに花を愛するところにつけ込んで、方々からいい花をさがし出して折つて來ては、折られた花の傷口へ土を卷いて彼を欺したりする。彼はそれをでも買つた。不思議なことにはそんなものでもこの

人が植ゑたといふことになると種を蒔いたもの同然よく根を張るのであつた。それが月日とともにいつしか大きな庭園になつて來たのである。その庭はまはりを竹で編んだ垣根で取巻らしてゐたが、その垣根にはとりどりの蔓草がもつれ合つてからみついてゐたし、それの下にはまた隙間もなくさまざまの草花が蒔かれいろいろの灌木が生ひ茂つて、地上一めんは錦を敷き交へたさまであつた。垣根に纏つてゐるもの、垣根の下にこんもりしてゐるもの、垣根に沿うて立つてゐるもの。それらのものはその名も姿も形も千差萬別で、その無數な種類を一つ一つ數へ上げるといふのはとても出來ないことである——薔薇だとか木槿だとか、棣棠、金雀、蜀葵、鳳仙、鷄頭、秋葵、鶯粟、さては金萱、百合、躑躅、牡丹ぐらゐなものはまづわかるとしても、その外の大半はいづれ私たちの知らないものばかりである。花の季節になると垣根は刺繍した綠の帳になる。名ある花や珍しい花も幾足か歩いたただそれだけで見盡すことも出來た。一つの花が未だ散らうとはしないのにもう別の花が咲き初めて居る。兩開になつた柴の戸のある門が南の方にあつたが、竹の小徑がそこから通うてゐて、その兩側の竹のあるところには別に檜の生垣もあつた。その生垣について曲ると、そこがささやかな草庵で、堂は草屋根だけれどもそれが却つてさはやかなくつろいだ氣持で、窓も明るかつた。堂のなかには誰の筆とも知れぬ一幅の小畫がかかつてゐて、素木で出來た棚や卓や腰掛などは飜々しく淨められて、床の上にも塵一すぢとは落ちてゐなかつた。この堂のうしろには、別にやや大きな精舍があつて臥室のあるのはそこであつた。そのどこから眺めてもやつぱり花のないところとては無く思ふ存分に繁つて、梅、杏、李、桃、山茶花、蓮、水仙、桂樹、茉莉花、柘榴、芍藥、海棠、茶、玫瑰花、杜鵑花、牡丹など、或るものはあでやかに或るものはすつきりとして、或るものは疎らな雨をとほして見ると風情が深いし、或るものは匂のほかは月の光のなかに溶け込んでしまふし、或るものは朝日に照らされて色香を增すし、さういふわけだから、どんな季節のどんな日にでも眺めるに花のないといふ時は決して無かつた。ここはいつまでも立てつづけの春であつた。垣根の門の外はちやうど朝天湖といふ大きな湖をひかへてゐるが、この水の眺めが亦、春にも夏にも秋にも冬にも晴れた日にも雨の日にも人を慰めた。花園の主人である秋先はこの岸沿ひに土手をこしらへて一面に桃と柳とを植ゑたから、毎年春が來ると紅と綠とが入り雜つて照り榮えた。さながら西湖の美しい景色である。この岸邊にはまた木芙蓉が植ゑつけられてあつた。それからこの湖は俗に荷花蕩——蓮の大池——と呼ばれてゐたくらゐで水のなかには五色の蓮があつた。その花が開く日ごろには湖上一帶がきらびやかな雲になつて、かんばしさが人を薫々と包ん

だ。小舟があちらこちらとゆれ漂ひながら菱を採る歌聲がすずしい。折からななめにすべる風が吹いて來たので、帆のある船はわれ勝ちに走り出して互ひに入り亂れた。柳の木かげには漁夫が船の用意をしたり網を干したりしてゐた。子供を相手に戯れてゐるもの。網をつくろつてゐるもの。醉ひつぶれて船の上に臥てしまつたもの。水泡ぎの勝負を始めたもの。花を見る人のみやびた舫は樂を載せて集つて來てゐた。水の上からの樂の音。岸邊の笑ひ聲。この絶え間のないものの音を聞くともなく洩れ聞きながら花痴の秋先もやはりにこにこしてゐるのは、花の咲きつづくこの頃の季節がうれしいからに違ひない。口には歌を呟いてゐた——

朝天湖のほとり水は天につらなる、
聞ゆるものは漁歌ならで採蓮の曲、
ささやかなる草の家ながら花はくさぐさ
主はいつもいつも花に對うて居眠る

たそがれ時になつて舟が歸り始めると、無數の遠い灯かげが螢火や星の影にまじり込んでどれを何とも區別しがたかつた。やうやく秋も深くなつてしまつて霜を呼ぶ風が吹き初める。楓の林か黄ばむで、痛ましいのは岸邊の柳と木芙蓉と！白蘋と紅蓼とにまじつてその衰へた面かげを水に映してゐるではないか。葭と葦とのなかには雁の群が集つて、雲に向つて叫ぶその干高な聲が人の心に悲しく響き入る。冬の險しい氣候には、雲の上にまた雲が重なつて幾重にも隙間もない雲からちらちらと舞ひ落ちるものがあると、天も地も無限の一色に溶け入つてしまふ。——四季折々のこの水邊の趣をこれだけで十分に言ひ現したなどと私は自惚れてゐるわけではない。但もう言ひ現はすのはあきらめる。

さて秋先はといふと毎朝すがすがしいうちに早起をして、花のなかに散り込みなどしてゐる落葉を掃き淨めてから、水を汲んで來て一つのこさず木に水をかけてやる。夕方になると又もう一ぺん水をかけてやる。もし新らしい花が咲きさうになつてゐるともう嬉しくてたまらない。そこで或は壺の酒を煖めたり或は甌の茶を煮立てたりして、花に向つて丁寧にお辭儀をする。さうしてその酒なり茶なりを注ぎ捧げて、「花萬歳」と三聲繰り返して、それからやつとその下へ坐つて、靜かに斟みながら仔細に嘗め味つた。酒がまはつて來て上機嫌になると彼は出まかせの唄をうたひ、疲れてくると石を枕にして木の根もとに横になつてしまふ。咲きかかりの莟のころから開ききつてしまふまで決して傍を離れはしない。日かげの照りつける時には羽箒を清らかな水に浸して花の上にそそぎかけた。月夜になつて來ると毎晩眠らなかつた。雨風の吹き荒ぶときには簑笠をつけて花の間を視てまはつて、たはめられた枝でも見つけると竹で支へをしてやつた。夜なかにでも幾度も起き上つて見まはる。若し凋みさうになつた花が

あると、毎日毎日溜め息をしてしまひにはきつと涙をすら流すほどであつた。そのもう散つてしまつた花びらごときをさへただ捨てては置けなかつた。それを優しく掃き集めて皿の上にのせて眺め入るのであつたが、もう乾からびてしまつたとなると、やつとそれを穢れのない甕のなかへ收めた。さういふ花びらが甕一杯になると再び茶や酒をその上にそそぎ祭つてどうしてもそれを捨て去るに堪へない有樣であつたが、やつと思ひかへしてその甕をうやうやしく自分で捧げて湖の土手の下深く埋めてしまふ。これが花のお葬ひであつた。また花びらが雨に打たれて泥のなかへ埋められるやうなことでもあると幾度も幾度も洗ひ淨めてからそれを湖上へ流すのである。これが花の浴みであつた。彼は人々が花を折り取ることをむかしからひどく憎んでゐた。彼はそれに就て次のやうな意見を持つてゐた——

一たい花といふものは一年に一度だけ咲くものだ。四季のうちたつた一つの季節だけで、その一つの季節のうちでもまたほんの五六日だけのものだ。三つの季節の冷淡な仕打ちを彼女がぢつとこらへて來るのも、このほんの幾日かを世の中へ出て光や風に逢ひたいといふ一念からなので、だから風のまにまに舞ひゆれる花が見る人を迎へて笑顔をむけるさまは、立身出世をした人のやうな氣持なのである。不意にそれが折り取られてしまふ。咲き出すのには長い辛苦で折り抂られるのはただ一瞬の手もない事だ。花はものを言へないけれども花だつてこれが歎かないでゐられようか。まして、咲いてゐる幾日かの間だとて初めは蕾だしあとになれば凋れはじめるし盛りと言へばほんの束の間である。蝶や蜂にだつて氣はゆるせないし、鳥や蟲と來てはてんで近寄らせられないし、日は燒きつける風は吹く霧には包まれる雨には打たれる。花の身になつては手頼に思ふのは人間ばかりだのにその人間の手が花を拗ぢ折る。まるで心のやさしい妻を虐待する夫のやうなものだ。どうしたらまあそんなむごい事が出來るといふのだらう。芽から根になつて根から元木ができて勢のいゝのが大枝になり勢の惡いのは小枝になるのだが、一本の大枝、一本の小枝それが出來るためにはまつたくあだやおろそかの月日ではない。その枝の上に咲いてゐる花だ。やつと咲ける季節が來て人に見てもらはうと咲き出でた花だもの美しく無からう筈はない。まあ假りにあまり美しいから折り採る必要があるとする。花は枝から離れてしまつたなら二度と再びはもとの枝へは歸れはしない。枝は幹から折られてしまつたなら二度と再びはもとの幹へくつ附けられるものではない。死んでしまつた人間がまたと生きては來ないと同じこと、害を與へた人間にどんな刑をして見たところで折られた花にとつては何の償ひにもなるわけのものではない。花は物をこそ言へないが花だつて忍び泣きぐらゐはしもするだらう。一たい

花を折る人といふものはきつと具合のいゝ大枝を見つけ出して花の繁つてゐるところを擇び取るものだが、それを座敷に置いてほんの一時の酒盛の興に供へたり、さては女どもがただ一日の髪の飾りにしたりする。客をもてなすのなら花の下へ來て存分に醉うたがよからう。髪容をつくるなら手細工の器用なのがありもしよう。手のなかに一本折つてしまへば木では一本なくなつたのだ。人の手にある花はみんないとしい者の亡骸だ。今年一つの幹を伐つてしまへば來年はもうこの幹はない——命を延べて置きさへすれば年々の樂しみは盡きまいものを。折られる枝のなかには未だ開かない蕾で花と一緒に折られて行くものもあるのだが、この枝の上で萎びてしまふ蕾などは、人間の子供のうちに死んでしまふ者と何の違ひもない。なかにはもともとちつとも花が好きでもないのにただ氣まぐれにへし折つて、折つてからまた好ささうなのを擇りどりに搾ぎとつて、通りすがりの人にくれてやつたり、道ばたへ擲り出してしまふ人さへある。ちつとも氣の毒などとは思つても見ないと見える。まるで無法な災難に殺されてしまつて無實の申開きも出來ない人のやうなものだ。花はものを言へなくとも何で恨まずにはゐようか。

——と、まづこれがこの人の意見なので、だから彼自身ではむかしから一技をも手折つたこともなければ一片をも傷けたこともない。それ故よその庭園へ行つて心を打ち込んだ花に終日見飽かずにゐる時に、庭の主が來て一枝上げようと言つて折りさうにでもすると、彼は罪惡だ罪惡だと言ひつづけてきつぱり斷つた また誰かが花を折らうとしてゐると 彼の知らない時は仕方がなかつたが、彼の目のとどいたかぎりはそれを思ひ停らせようとしてまづ口で幾度も幾度も理を說いて見る。口で言つただけで聞いてくれない樣だと彼は頭を地びたにすりつけるやうにして情に訴へて花の命乞ひをした。人々は彼のことを花氣違ひとは言つてゐるやうなものの、大抵の人は彼のこの眞心をいぢらしく思うて手を引つこめた。すると彼はまた精一杯にお辭儀をしてお禮を言ふのであつた。また子供などで花を折つて錢儲けをしなければならないものがあると彼は錢をやつて花を折らせないようにした。また彼が留守の間に折り取られてゐることでもあると彼は顏色を變へて歎いた。さうして泥をつまみ取つて木の傷のまはりを塗り固めた。これを花の療治と呼んでゐた。こんなことをされるといふわけで彼は自分の庭へはなかなか容易に人を出入させなかつた。たまに身内のものとか近所馴染などが見たいと言つて來てどうも斷り兼ねるやうな時には、最初に先づ例の花に對する意見を納得させて置いてからやつと庭へ足を踏入れることを澁々で許した。けれども花が穢れに打たれるやうなことがあつてはならぬといふので只遠くからだけ見せることにして、花には人間を近づかせない。それでも言ふこ

とを聞かないものがあつて、つい氣なしに花か蕾かの一つをとつてしまつた事があつたが、すると老翁は顏から首まで眞赤にして喉が破れるやうに叫んだ。吐鳴りながら撲つた。さうしてこの者をその場から庭のそとへ追ひ返してしまつた。この事があつて以來、人々も彼の性質を飲込むことが出來たものと見えて誰一人として、彼の庭で木の葉一枚摘み取るものもなかつた。林の茂つたところや樹の深いところなどには得て小鳥が巢を喰ふものだが、木立が茂くてその上に花や果物があると來たら百も千も群をつくつてやつて來るものだ。果物をつつくだけならまだしも高の知れたことだけれど花や蕾をやられてはたまつたものではない。そこで秋先は穀類を空地へ蒔いてやつて小鳥たちにそれを食べさせるやうにする。さうして仕合せが惠まれるやうに小鳥に向つて賴んだ。小鳥にだつても性根はあるのだ——毎日存分に食べ飽いてゐるものだから花の間でおとなしく身輕るに飛び交うてほがらかにこやかに啼き囀ることはしても、花びら一枚蕾一つだつてそこなふわけではなく木の實一個啄みはしなかつた。かういふわけで自づといろ〳〵の果物もどつさり出來る。大きくもあつたし味もよかつた。それが熟したとなると秋先は第一に天にそれを捧げ供へて花の神を祭つた。それから後では自分でも食べまた近所合壁へものこらず分けて初物を味ひ、それで殘りでもあると賣るのだが、一年のうちにはなにがしかの利得があるやうなわけであつた。老翁は花と一緒に暮す人となりすましたが、若い時からこの年になるまで五十何年かの間、未だに飽きるといふこともなく體はいよいよ丈夫になり、粗末な衣物、手輕るな食事、好き氣儘ではあるが慾も尠く、餘つたものは村の貧しい人たちに治く分けた。かういふわけで村中の人達は自づと彼を敬はない者はなく彼のことを秋公と呼んで尊んだ。けれども彼は自分では次のやうな詩をつくつて自分のことをただ灌園叟——「庭に水をやる爺」と言つてゐた。

夜明て園に水灌ぎ日暮れては水灌ぎ
水灌げばわが園の邊に百花はあざやか
花開いていつも見飽きぬうらみ
園をいとしみ見ては寢ようとも思はず。

話はかはるが、平江の町に張委といふ男があつた。これは宦官の身内の者であつたが、性根のねぢけた口賢い我儘勝手なむごたらしい男で、勢のいいのを笠に着てあたり近邊を欺したり嚇したり、自分の氣に喰はない人間にはきつと爭ひを持ちかけて相手の家が倒れるまでは手をひかない。手下には虎狼のやうな家來を使つて、外にも惡事に加勢をする同じやうな仲間に取卷かれていつも一塊になつては、行くさきざきで人に禍を釀し出して居た。その害をうけたものは今までにもう數知れない程あつた。所が、或る日此男がはからずも一

段上手な男にとつつかまつて手もなく半殺しの目に會はされてしまつた。役人に訴へて出ると相手の惡智慧にひつかかつてここでもまんまと逆ねぢを食はされてしまつた。さすがに面目ないので車の幌を深く下してしまつて人には顏もみせず、ただ四五人の家來をつれ一味の惡仲間と一緒にしばらく田舍の自分の所領へかへつて憂さ晴らしをしてゐたのである。その所領といふのがちやうど長樂村で秋公の家ともさうかけ離れてはゐなかつた。或る日のことである。この張委の仲間が朝つぱらから酒の生醉ひ機嫌で村中を迂路迂路と練り歩いてゐたが、ふと來かかつたのが秋公の門のほとりである。見れば垣根には花ある枝が色香もあざやかに愛らしく、あたりの木々は枝をひろげて生ひ茂つてゐる。「やあこれは風流なところへ來たぞ。一たい何者のうちだ」と皆は口を揃へて言つた。すると家來の一人が答へて「これが秋公の花園です。あの花氣違ひといふ評判の高い男の秋公です」そこで張委が言ふには「この里にはなんでもそんな老爺がゐるやうなことは聞いてゐた。さまざまなものを植集めて喜んでゐるさうぢやないか。ここがその住居といふことならば一つ這入つて見ずばなるまいて。」「ところがです」と家來が答へた「その爺といふのが何さま唐變木で人には一切見せないといふことなのです。」「それやほかの奴らには見せないかも知れない。だが我々にそんなことを言へるものか。おれが一つ門をたたいてやらう」張委が得意さうにさう言つた。

それは牡丹の花ざかりのころであつたものだから、秋公はいそいそ庭に水をやつてしまつてから、酒を一壺とくだものを二皿と用意して花の下へ來てひとりそれを酌みながら樂しんでゐるところであつた。まだ三杯とは傾けないうちに騷々しく門を敲く聲が聞えてきた。盃を投出して出て行つて見ると、そこには酒臭い息を吹きながら五六人の人間が突立つてゐる。秋公はてつきり花を見に來たなと感づいたものだから門に立ちふさがるやうにして尋ねた「これはお揃ひで。一たいどんな御用でございませう。」すると張委が言ふには「こら老爺、お前はこのおれを知らないか。町でも名高い張公子といふのはおれのことだ。この邊一たいは張家の領地だ。おれのものだ。聞けばお前の庭にはなかなかいい花がどつさりあるさうぢやがおれはわざわざ出掛けて見に來たのだ。」「飛んでもない。私どもにいい花などがございますものか。高が桃か杏みたいなものばかりで、それとてももう散つてしまつて、今では花は一つもございません。」さう言はれたので張委は眼を怒らして叫んだ「怪しからん奴だ。おれがこんなに花を見たいといふのに無いと言つて追ひかへすつもりだな。おれが貴樣の花を喰つてしまひでもすると思ふのか。」「いやいや私はうそは申しません。花は本當に無いのでございます」突然張委は秋公を押しのけて駒ぐらを一つ突いた。

よろよろとよろけて後すざりをした間に、皆はどやどやと押入つた。事態が穏やかでないのを見て取つた秋公はただ相手のするに任せて門の戸を閉めて置いてから彼等の後について歩いて、花の下へ來たからさつきの酒と果物とは取りのけて自分は隅の方に立つてゐた。皆はあたり一面のさまざまな花を見てゐたがその中でも牡丹が一段と盛りであつた。この牡丹とても世間にありふれた玉樓春などいふ類のものとは違ふ。黄樓子、絲蝴蝶、西瓜秋、舞青猊、大紅獅頭といふ變つた名前の珍らしいものが五種もあつた。

一たいこの牡丹といふものは花のなかの王とされてゐるものであるが、洛陽に産するものが世に第一である。姚黄とか魏紫などといふものは一本の値が五千銀もする。なぜ洛陽の牡丹が第一かといふに、昔、唐に則天武后といふ女帝が居たがみだらでむごい方で劈臣を二人も持つてゐたほどであるが、十一月の或る日、にはかに庭遊びを思ひ立つた「明日の朝わたしは庭に遊ぶ。大急ぎで春に布令を出す。花たるものは悉く明日の朝風をと言はず今夜のうちに咲いて置け。」則天武后は地上のほんの當座の支配者だのに、そこを考へなかつたすべての花はその命令にそむくことが出來なかつた。一晩のうちに蒼が出て花が咲いた。明くる朝、女帝が飾り立てた帝王の御召もので花園に乘り入つた時にはわれ勝ちにと咲きみだれた花は色とりどりに目くるめくばかりであつた。そのなかにたつた一つ牡丹だけが、女帝や寵臣などの命令は肯かうともしなかつた。花どころか、枝には葉一葉だつてつけてはゐない。これを見た則天武后は大へんに怒つてたうとう牡丹を洛陽へ流罪に申しつけてしまつた。牡丹の一ばんいいものはかういふわけで洛陽のやうな片田舍にあるのである。ところで秋公のこの庭では牡丹はあの草菴に向ひ合つて正面に植ゑつけられてあつた。さうして湖畔の石でまるく圍んで垣をしてそのうへ木の柵でしつかりと守り、上の方には布を張り渡して日除けにしてゐた。花の幹は高さが一丈ばかりもあつて一ばん低いものでも六七尺はあつた。花は大きさが盆ぐらゐもあつて華麗を極めたその五色は目に眩しかつた。人々は口を揃へて花を褒めた。張委はそこで石垣を踏み臺にして花の香を匂うてみた。この無作法が秋公にはもう我慢がならなかつた「どうぞ少し離れたところから御覽なすつて下さい。そこへお上りなさらないようにして頂きたいもので。」「何！」さつき素直に門を入れられなかつたのを根にもつてゐる張委は言ひがかりが欲しい折からである。「老爺、貴樣はおれの領地の近所にゐながらこのおれの名前を知らないと見えるな。おれが花を見たいといふと花は無いと返答をしをつた。匂を嗅がうと思ふとまたつべこべ吐かす。かうして見ちや花が腐るとでも言ふのか。これや面白い。是非ともその說が聞かして貰ひたいものだ。」さういひ乍らたうとう枝を引

きよせて花の上へ自分の顔をわざと突出した。秋老人は傍にゐてそんなことをされたり言はれたりするのをぢつと聞き流した。いづれ皆は花を見さへすれば歸つてしまふものと思つてゐたからである。誰だつてさう思ふぢやないか。ところがこの意地惡るな男はまたこんなことを言ひ出した「こんないい花を見るのに一杯飲まないといふ法はない。」さう命じられた家來は駈け出して行つた。ここで酒盛が始まるのかと思ふと、秋公はいらいらして堪らなくなつたので進み出て言つた「でんでん蟲の殼のやうな私のうちには皆樣のお坐りなさるやうな場所はございません。あなたさまはもう花をごらんなさるのはおやめにしてお酒はお屋敷へお歸りのうへになすつては如何です。」張委は地面を指ざしながら「ここの地びたが結構だ。」「土の上はむさくるしうございます。あなたさまがお坐りになれる筈はございません。」「心配するな、まあ毛氈ぐらゐは敷かずばなるまいがね。」そこで家來が毛氈を取りに走つた。程なく酒肴が來る。毛氈を敷く、みんなはその上へ車座になつてさまざまな聲を上げて呼び叫びながら拳を打つた。このしたりげな有樣を見ながら秋公はたたきひしやがれたやうな氣持で片隅に坐つてゐた。すると、花の生茂つたこの庭を見てゐるうちにむらむらと良からぬ考を出してこれを自分のものにしてやらうと思ひ立つた張委は、酔つぱらつた目差でぢろりと秋公を見やりながら言つた「こら、お前は老いぼれの役に立たずだが出しやばらずに花をつくつてゐたのは氣が利いてゐるな。それに免じて一杯飲ましてやらう。」こんなことを言はれて喜ぶ筈はない。秋公は腹立しげに返事をした「私は酒の飲めない性分です。御自分召上つて下さい。」張委は更に言ふには「時にお前はこの庭を賣る氣はないかね。」その口ぶりで秋公は飛んでもないことが持上つたのに氣がついてびつくりして答へた「この庭は私の命です。どうして命が捨てられませう。」「命か命でないのかそんなことは聞きやしない。賣れと言ふまでさ。それにもしお前が行くところが無いとでもいふのならそつくりそのまま俺のところへ來てしまへばいい。庭の世話をして花さへつくつてゐれば何にもするには及ばぬ。どうだ、いやか。」すると一同の者は聲をそろへて言つた「爺さん。何と結構なことぢやないか。そんな御思召を聞くからには早く御禮を申上げなけや惡からう。」相手がぐるになつて一足一足と自分をおびき落さうとしてゐるのに氣がついた秋公は、かつとなつて手足はしびれがきたやうになつて來た。彼が返事をしないのを見てそこで張委が言つた「怪しからん奴だ。厭とか應とか返事をしろ。」秋公は答へた「厭だと申上げたぢやありませんか。いつまで仰言るのです。」「よくも吐かしたな。もう一ぺん言つて見ろ。訴狀を書いて貴樣を役所へ突出してくれるから。」かつとなつてゐる秋公はこの無法な言ひ草に返答をし返して

やりたかつた。が、考へてみれば先は勢力のある人間だし、それに酔つぱらつてもゐる。こんなものを相手にしてはつまらない。一時のがれに延して置けばまた何とか後の思案もあらう。さう思ひ返した秋公はたけり立つてゐる氣持をぢつとおさへて言つた「あなたが本當にお買ひになりたいのなら一日だけ返事はお待ち下さい。さうさう足もとに鳥が立つたやうなことをおつしやつても始まらない。」「なるほど、これは尤もなことだ。それぢや明日また來ることにしよう。」皆のものは聲を揃へてさう言つたが、この時には皆はもうすつかり酔ひどれになつてゐた。そこで皆は立ち上つて、家來たちは先に立つて空になつた器を拾ひ集めた。秋公は彼等が花を折るかも知れないと思つたから用心をして花のそばに立ちふさがつてゐると、果して張委が歩みよつて來て石のかこひへ上つて花を折りさうにした。秋公は彼にとり縋りながら言つた「どうぞおやめ下さい。花は小さなものに過ぎないけれど花だつて長い辛苦をしたのです。さうしてやつとそれだけに咲いたのです。つい折つてしまつたのでは花が可哀想です。折つてしまへばたかだが一日か二日で散つてしまふだけのことにどうしてそんな罪つくりなことをなさらうといふのです。」「うるさい」と張委は吐鳴りつけた「何が罪つくりだ。貴樣が明日になつて賣つてしまへば後はこの俺のものだ。皆へし折つてしまはうと貴樣の世話にはならぬわ。」張委は秋公を押しのけようとする。秋公は死んでも放すまいと縋りつきながら叫んだ「殺されたつてこの花を折らせはしません。」張委の仲間の者たちは「實に怪しからぬ奴だ。若樣が花を一本折らうと仰言るのが何でそんな一大事だ。こんな大業な眞似をして嚇したらおれたちに花を折れないとでも思つてゐやがるのだな。」皆は一度に進みよつてめちやくちやに花をへし折つた。秋老人は思はず叫びを上げてその切なげな聲は天にまでひびくやうであつた。張委に縋つてゐた手を放した老人は命がけで花の前に立ちはだかつた。けれども一万を庇うてゐるうちに片方は空になる。かうして瞬くうちに花は殆んど搾ぎとられた。秋老人は心も體もふるへながら叫んだ「この惡者ども、人の家へよくも押しかけておれをわなに落したな。もう命も何も入るものか。」言ひさまに彼は張委に飛びかかつた。頭でもつて胸を突いた。勢がはげしかつた上に張委はひどく酔つてゐたのでよたよたとよろめいたかと思ふとさかとんぼに打倒れた。花のなかからどやどやと家來たちが來て袋たたきにしようと秋公を引捉へた。しかしなかにいくらか分別のある人間がゐて、秋公は老人の事でもありそんなことをして間違をしでかしでもしちやつまらないと皆をなだめて、倒れてゐる自分たちの主人を扶け起した。張委は突き倒されたものだから一層むしやくしやして、起き上がるや否や花の方へ進みよると咲いてゐる花をたたきつけた。

花びら一つ枝に殘らなかつた花は地面一帶に撒き散らされたのを、張委はその上から踏みにぢつた。せつかくの美しい花がこんなむごたらしい目に逢つて、綠の葉も愛らしい花びらもめちやに碎けてまるでひどい雨風のあとのやうに泥まみれになつてしまつた。そんなありさまをまのあたりに見た秋公は地の上に伏倒れて天に叫んで悲しみを訴へた。その悲しみの聲があたりに響きわたつて、近所の人々は秋公の庭の騷ぎに氣がついて皆駈けつけて來た。地面に踏み散らされた花が敷き亂れてゐるし、人々は秋公を圍んでいきまいてゐるところであつた。近所の人々は驚いて、わけをたづねた。駈けつけた人々のなかには張委の小作人も二三人群つてゐたので、その男たちが秋公のために詫をした。それから張委を宥めすかしながら門のところへ送り出した。張委はその者たちに言ふには「こら、あのくたばりそこねの畜生にさう言つつけろ。彼奴があの庭をおれによこすならおれも勘辨はしてやる。もし厭といふことを半分でも言つて見ろ。思ひ知らせてくれるから。」くやしさうにそんなことを言ひ捨てて歸つて行つた。近所の人たちは張委がひどく醉つぱらつてゐるのを見て、ただ酒の上の話だと思つてさほどに氣にもとめなかつた。皆は引つかへして、今度は秋公を抱き起して家の階のところへ腰をかけさせた。けれども老人はいつまでも聲を上げて泣き叫ぶのを皆していろいろと慰めた上に庭の門を閉めてやつたりなどして、人々も歸つて行つた。

近所の人たちは道々とりどりの噂をして、中にも秋公が日頃から人に花を見せないのを面白からず思つてゐる者は、「こんな目に逢つたからにはあの變人もこれに懲りたらう」と言つたものもあつた。さうかう思ふと、中には秋公を素直に同情する人もあつて、「そんな可哀想なことをいふものぢやない。昔から、一年花を養つて見るのは十日といふ諺もある程ではないか。誰でも花を見て美しいと思ふだらうけれども美しい花だと褒めながらもそれを育てた人の苦勞には氣がつかないでゐる。そんな苦勞の末にやつと咲かせたのであつて見れば大事に思ふのは無理もないではないか。」

秋公にとつては撒き散らされた花をそのままにして置くことは堪へられなかつた。落ちてゐる花びらを進みよつて一つ一つ手に拾ひ取つて集めた。踏みにぢられてあの五色の色も褪せ傷いたものどもは泥土のために汚されて了つた。秋公の心は寒けがするほど悲しかつた「花よ。私はお前をいつくしみ守つて今日まで花びら一枚葉一枚さへ傷けたこともなかつたのに、どうして今日こんなひどい目をお前たちに見せてしまつたらう。」涙が再び湧いて來て秋公はひとりで泣いてゐた。ふとその時うしろの方で人聲がして「お　さん。どうしてそんなに泣いてゐらつしやるのです」と言つた者があつ

た。ふり返つて見ると、そこには十六ばかりの少女の見目美しいのがすつきりとした裝をして立つてゐるのである。見たこともない少女でどこの娘ともわからなかつた。秋公はやつと泣くのをやめてたづねた「お孃さん。あなたはどこからお出でなすつた！　一たいまた何の御用です。」少女は答へた「私は御近所のもので、お庭の牡丹がちやうど花盛りだと伺つたものですからそれを見せて頂きたいと思つて伺つたのでした。もう散つた後とは存じませんでしたから。」秋公は牡丹と言ひ出されて覺えずもまた涙がこみ上げて來た。すると少女が言ふには「あなたは何がそんなに御心配でお泣きになるのです。」そこで秋公は張委が花を折つてしまつた一部始終を話すと少女は笑ひながら言つた「そんなことならその花をもう一ぺん枝にくつつければいいのぢやありませんか。」「お孃さん冗談ならばおやめなさい。一たん散つてしまつた花がもう一度枝にくつつくくらゐなら誰も泣きはしないのです。」「ところがね、私のうちでは昔から散つた花をもう一度枝に咲かせる術が傳はつてゐるのです。私は幾度もやつて見たこともございますが一度だつてやり損ねたことはありませんわ。」秋公の悲しみは喜びに代つて來た「あなたはほんとうにそんな術を知つてゐるのですか。」「何の嘘なことがあるものですか。」そこで秋公は地面に跪いて頭をすりつけて拜んだ「本當にそんな術があるとおつしやるのなら、どうぞ一つやつて見て下さい。私は何のお禮も出來ないけれどもその代りには、新らしい花が咲く度にいつでもあなたをお招きして見ていたゞきますから。」少女が言ふには「そんなに拜むのはおやめなさい。それよりはお茶碗に一ぱい水を持つておいでなさい。秋公は大急ぎで水を取りに走つた。が、考へ直して見るのに一旦散つた花がもう一ぺんもとの枝に咲くなどとそんな法がある筈はない。これはてつきり自分があまり泣いてゐるので、笑にまぎらせようと思つてこんなことを言つたのかも知れない。さうだ。そんな理に合はぬことを言ひ出されながら何だつておれはまた信用をしたのだらう。と、さう思ひながらも茶碗に水を入れて秋公は歸つて來た。水を渡さうと思つて首を上げて見ると、もうその少女はゐなかつた。で、花は？　と見るとこれは殘らず枝の上に返つてゐる！　地には拾ひ殘された花びら一つなく、枝の花は以前には一本についてに一色であつたものが、今度は赤い花びらのなかへ紫のがまぢつたり、淡いもののなかへ濃いのが入れ混つたりして、一つの花が五色の色で取合されてゐて、前のものよりももつと美しかつた。それにしてもこんな妙術を知つてゐるあの少女はどこへ行つたらうか、多分はまだそこらの庭の樹の間にでもゐるのであらうと、秋公は水はそとへ投げ出したまま捜しに行つた。ぐるぐると庭中を歩きまはつたがどうしても見つからない。そこでもう外へ出て行つたものと思つて、

秋公は庭の小徑をいそぎ足で門のところへ行つて見たが、門はさつき近所の人たちが閉めて行つてくれたとほりに閉まつてゐた。

門をあけて外を覗いて見ると、折からそこには二人の老人がしやがんでゐて、これは何れも近所の人で一人は盧公、一人は單公で漁師が湖畔に網を干すのを見てゐるところであつた。彼等は秋公の出て來たのを見ると思ひ合せたやうに起ち立つて拱いたままの手を擧げて會釋をしながら言ふには、「聞けば張公子がひどい難儀をお掛けしたといふぢやありませんか。私らは野良へ出てゐてついお見舞も出來ませんでしたが。」秋公は答へた「私をあんなひどい目に合せた惡者どものことは言ひ出して下さるな。それよりは不思議な術でわたしの花を助けてくれた娘はお禮の一言も聞いてくれずに歸つてしまつたのです。お前さんたちはその子がどつちの道へ行つたのか氣がつきませんかねえ。」「え？ 散らされた花が元のとほりになる術ですつて。」二人の老人はびつくりしながら問ひ返した「で一たいその娘が歸つたといふのは何時のことです。」「つい今のさつきですよ。」「はて、今のさつき私たちはさつきから此處にかうして居るのだがその女の子どころか誰一人ここを通つた人は無かつたがなあ。」さう言はれて秋公はふといみぢく思ひ當るところがあつた。そうして言つた「これぁひよつとすると仙女が天降つたのぢやなかつたらうか。」「と言つて一たい、どんな事をして花を助けたのです。それが聞かして貰ひたいものだが。」二人の老人がさう問ひただした。秋公はそこで出來事の一とほりを話して聞かせると、二老人は言つた「何と不思議なことだ。不思議なこともあるものだ、私たちにも一つその花を見せてはもらへないでせうか。」秋公が門をあけると彼等は駈け出した。「不思議なことだ、不思議なことだ」と二人は交々言ひつづけながら「これやてつきり仙人に違ひない。でなけや誰がこんな法力を持つてゐるものか。」秋公はそこで香爐を取出して好い香を焚き天を拜んでお禮を申し上げた。「かういふことが起るといふのも」二人の老人が秋公に言つた「これも皆あなたが日頃から、眞心こめて花を愛してゐるといふので神さまが天降つたに違ひない。明日にもなれば例の張公子でも引ぱつて來てこれを見せつけて愧ぢさせてやつたがよい。」秋公は答へた「いやいや飛んでも無いことだ。あんな惡い犬のやうな人たちにはなるべく遠くから用心をしてゐればいいので、もう一ぺん連れ出してかかり合ひにならうなどとは思ひも寄らないことだ」「なるほどそれはそれに違ひない」二人の老人もそれに和した。秋公はもう嬉しくて仕方がない折からだから、早速先刻の未だ飲殘してゐた酒甕をもう一度持ち出して、二人の老人を歸さうともせずに二人の老人を相手に花の下で夕方になるまで酌み交した。二人の老人が歸ると一緒に、彼等

が傳へたものだからこの話は直ぐに村中に傳はつた。この話を知つた人たちは明日になつたら是非自分たちもそれを見たいものだと思つた。だけれども例の秋公の事だからきつと見せてはくれまいとも案ぜられた。ところが秋公はといふと、一たいこの人はもともと然ういふ考があつたが上に一度神仙が天降つたのを目のあたりに見たものだから、どうかしてこの世俗から離れたい考がしきりに起つてその晩は花の下に坐つたきり、たうとう一晩考へ明したほどであつた。さうして張委のことを思ひ合してゐるうちにはたと悟つたことがあつたのである。これといふのも自分は普段からあまり心が狹かつたから、その罰にあんな侮辱を受けるやうなことにもなつのだ。もし、初めから神仙のやうに自由なひろびろとした心を持つて居て人の見たいといふのを拒んだりなどしなければ、あんな事がもち上りもしよう筈がなかつたのだ——とかういふ風に考へた秋公はさう氣がつくと直ぐさまその朝、庭の門をすつかり開け放してしまつた。見たい人には誰にでも見せようと思ひ立つたのである。ちやうどそこへ數人の人たちが樣子を探りに來て見ると、秋公は花に對ひ合つて坐つてゐたが人々を見つけるとそれぞれに言ひかけた さあさあ、勝手に這つて見なさるがいい。ただ花だけは折らないやうにしてね。」人々はかう言はれてはそれぞれ到る處でそのことを傳へた。村中のものはこれを聞いて誰も彼も來て見ない者はなかつた。

張委は次の日の朝になると家來のものどもに言つた「昨日はあの老いぼれ奴に衝き倒されてそのままいい加減にして來たが、どうしてももう一度あいつの庭へ押しかけて行かなけりやならない。皆行かう。あいつが素直に言ふことを聞かないとなつたらあいつの木を殘らずたたきつぶしてくれるのだから。」すると皆の者が言つた「あの庭はお屋敷からは遠くもなし、爺が何と言はうが構ふことがあるものですか。時々押しかけて行つて見物するには、昨日もさんざんにして來たのですから少しは殘して置いた方がよくはありますまいか。」「何を言つてゐるのだ。そんなことをすれや來年また花が咲くのが忌々しいわい。さあ早く行かう。ぐづぐづしてちや彼奴に先手を越されるぢやないか。」張委がさう言ふものだから皆も一度に立ち上て村の方へ出かけた。途中で彼等は、秋公の庭へは仙人が現はれてたたき散らされた花はもとの枝へくつつき直つて、五色の花びらは入り混つてゐるといふ噂を聞いた。しかし張委はそんなことには取合はなかつた「あの老いぼれ奴のどこが氣が利いてるつて仙人が出て來たんだい。ちやうど我々が花をたたき散した折を見計らつてさ。仙人を家に飼つて置くわけぢやあるまいし！ これやてつきり我々を嚇さうと思つてゐやがるのだな。こんな話をふれ歩いて仙人が自

分の味方のやうなことでも吹聽すれやこちらで怖氣がさして手を引くと思つてゐやがるのだ。」「なるほど、これや若樣の仰言るとほりに違ひない」皆のものもさう相鎚を打つた。

しばらくして秋公の家まで來て見ると、門は大きく兩開きにあけてあるし、男女が引きもきらずにどやどやと出たり入つたりしてゐる。何もかも噂のとほりである。「一たい本當にそんな事があつたのか知ら」張委の家來どもはさう言ひ出した。けども張委は言つた「そんな事はどうだつて構ふものか。仙人がついて居るとしたらどうしたと言ふのだい。」人のなかをうねうねと搔き分けてやつとあの草菴の前へ出て見ると、果して噂は嘘ではなかつた。この花は一層怪しむべき事には、見物人が來れば來るほど益々美しさを加へてちやうど人を見て笑ひかけでもするかと思へるやうであつた。張委は心中では大變に驚き怪しんでは居るものの、さればと言つてこの庭を自分のものにしてやらうといふ强慾な心持には少しの變りもなかつた。一とほり見て居ると張委の胸には、忽ち一個の甘い考へが思ひ浮んだ。そこで張委は人々に向つて言つた「さあもう歸らう。」門を出てから人々は尋ねた「若樣どうしてあなたは彼奴に庭をよこせと仰言らなかつたのです。」「俺にはうまい考へがあるのさ、もう彼奴と押問答するにや當らないのだ。この庭は明日から俺のものになるのだよ。」「何だつて又そんなうまい法があるのでせう。」家來の者たちがびつくりしてゐるのを見て張委は言つた「お前たちも知つての通り、今、貝州では王則が謀反をしてゐる。彼奴らは專ら妖術を使ふといふ事だ。それを政府では天下に布令をして嚴しく取締つて、妖術使ひがあれば召取つて居る。又それを密告したものには三千貫の賞金がかかつてゐる。散つた花を元の樣に返したといふのを證據にして、俺は明日にも張覇を役所へやつて訴へさせるのだ。彼奴は妖術で人を惑してゐるのだから、あの老いぼれ奴は釜煎の拷問を受けてどうしたつて牢屋へぶち込まれる。それから庭は役所から公賣にされる。その時になつて誰が買ふことが出來るものか。手に入れるのは言はずと知れたこの俺さ。おまけに三千貫がうまうまと手に入らうといふのだ。」「成る程！　これは見事な計略だ」と家來たちも聲を揃へて言つた。さて何事も急ぐに越すことはないといふのでその足で直ぐさま町へ出て訴狀を作らせた。

その次の日には張覇が平江府の役所へ出頭して秋先を訴へた。張委は家來のうちでも張覇が最も氣の利いた男だと信頼してゐるので特にこの男を使にしたのだ。

役所では妖術使ひを召捕へる役人を用意してある折から、この訴を聽いて、村中の者が皆これを見たといふからには張覇のいふのを信じなければならない。そこで捕吏を差し向けることになつた。張委は前以て捕吏に金をやつて置いたから、幾人かの下役を從へた捕吏が張委を上役に仕立てて秋先

の庭へ這込んで來た。秋老人はやつぱり花を見に來た人たちだと思つて別に氣にも留めなかつた。彼等は突然掛聲を上げると一時に秋先に襲ひかかつて引捉へた。秋公はあまりの唐突にびつくりして暫くは口も利けなかつたが、やつと言つた「私に何の罪があるのです。皆さんそれをお聞かせ下さい。」役人たちは口々に「この妖術使め、謀反人め」と罵るばかりで一向秋公の申開きを聞かうとはしない。ただ秋先を引立てて門から曳出して來た。それを見た近所の人たちもびつくりしない者はない。皆一度に進み出てその罪狀を詰つた。「貴樣たちは未だそんな事を尋ねるのか」役人はさう言つた「彼奴の罪は輕いものではないぞ。――村中の者が加擔してゐるといふ疑さへある。」かう脅しつけられた憐れな人達は、卷添へでも喰つちや大變だといふので、びくびくして逃げ散つてしまつた。只、虞公と單老人とそれに日ごろ親しくしてゐる幾人かの人だけが、曳かれて行く秋公の後を追うてついて來た。

張委は、秋公が連去られて行くとすぐそのあとから、家來を幾人かつれて秋公の庭へ來て自分のもののやうに庭の門を閉めたが、庭のなかに未だ人が殘つてゐてはいけないと思つたものだから、もう一度一とほり庭のなかを改めて見てから門を閉め直した。かうして置いて大急ぎで役所へ出て見た。

法官の前には秋公が曳き出されて臺の上へ這ひつくばつて居る。秋公は自分の傍にもう一人自分と同じやうに平伏してゐる人間があるのを見たけれども、この自分を訴へ出た者は誰だか見わけがつかなかつた。張委から賄賂を貰つてゐる獄卒はさまざまの責道具を持ち出して法官の側に控へてゐる。法官はやがて大きな聲で言つた。「その方は一たいどこの妖術使ひだ。何故に敢てこの地方へ來て妖術を以て民を惑はすやうなことをするか。その方の共謀者は幾人か。素直に申し上げるがよからう。」かう言はれた秋公は暗闇で鐵砲を聞いたよりも驚いた――一たい何事が起らうといふのだらう。秋公はそこで申し述べた「私は家代々長樂村に住んでゐる者で、又決して妖術使ひなどでは御座いません。妖術とはどんなものであるかも存じないのです。」法官は言つた「その方は昨日妖術で以て散つた花を再びもとの枝に返したではないか。これでも妖術を知らぬと言張るか。」法官からかう言はれたのでやつと張委に謀られたのだと思ひ當つた秋公は、張委が自分の庭を慾しいと言つたことや花をたたき散らした事や、それから仙女が天降つた事などを、事細かに一とほり法官に訴へた。しかし法官は、そんなことには一向耳を假さうとはしなかつた。ただ笑つて聞き流して言つた「澤山の若い時分から神仙の道を慕うて年老いるまで修行をして、それでさへもなかなか仙人に遇つたなどといふ例は尠ない。お前がただ花の爲めに哭いたぐらゐのことでどうして仙女が現れる筈があるか。若しまた本當に仙女が現れたといふからにはその名前ぐらゐは明して行つたであらう。それさへも言はずに

立去るなどとそんな迂散な言ひ分があるか。これこそまさに妖術使ひだ。」さう言つて獄卒どもを呼んだから、待構へてゐた獄卒たちは直ぐさま進み出て虎狼のやうにむごたらしく秋公をひつ捕へて、あとすざりをする秋公を無利やりに拷問の臺の上へ曳擦り上げた。獄卒たちが秋公を締め木にかけようとした時、法官は急にぐらぐらと激しい眩暈を覺えて危く卓の下へくづ折れてしまひさうになつた。頭のなかと目のさきとがくらんでしまつた法官はもうそのまま我慢をして坐つてはをられなくなつた。そこで法官は獄卒に命じて秋公を締め枷に掛けさせて一先づ牢へ入れて置いて、改めて取調べをすることにした。

獄卒は泣いてゐる秋公を引つ立てて外へ出た。秋公はひよつくりと張委を見つけたので呼びかけた「張公子。いつどんな怨を受ける覺えがあつて、私をこんな殘酷な手にかけて命まで取らずに措かないといふのだ。さあ、さあそのわけを聞かう。」しかし張委は無論答へなかつた。張覇やその外の一味の惡者どもと一緒にそ知らぬ顔をして立去つてしまつた。處公と單老とこの二老人だけは秋公のそばへ近づいて來て、事の次第を聞いてから言つた「そんな不法なことがあつてたまるものか。私たちは明日にもなれば村中の者一同でお役人へ手紙で申立てをする相談をしよう。心配をしないやうになさい。」秋公は泣きながら「どうぞよろしく賴みます。」と言ひかけると、獄卒は吐鳴りつけた「この死刑囚め！　さつさと歩かないか。いつまでめそめそ泣いてゐやがるのだ」秋公は目に涙をためたまゝで牢屋のなかへ這入つてしまつた。

近所の人々は彼に食物と飲物とを贈つてよこしたけれども、獄卒たちが皆それを横取りしてしまつたから秋公は何も食べられなかつた。夜になつたから彼は囚人の床の上へ身を横へて見たが、これは全く活きてゐる死人と同じことで手足一つ思ひどほりに動かすことも出來ない。ただ苦しいこころだけが自由に動いた。さうして考へるには――「あの花をお助け下さつたのはどんな仙人であつたかそれが解らない。そこに自分はつけ込まれてこんな目に逢ふことになつた。ああ仙人さま。どうぞ、もしこの私を秋先を可哀相だと思召すなら、私のこの命をどうぞお助け下さい。私こそ今、無殘な手に折り取られて路ばたへ投げすてられた花のやうなものです。どうぞ私の命をお助け下さい。さうすれば私はもう家などは見棄ててしまつてほんとうに「道」の敎に身を捧げませう。」秋先がこのやうに思ひつめてゐるその時であつた。ふと見ると、昨日の仙女がしづしづと自分の方へ歩み寄つて來るではないか。秋公は慌てて大聲で叫んだ「おお、仙人さま、どうぞこの可哀相な者を、秋先をお救ひ上げて下さい。」すると仙女はにつこりとして言つた。

「あなたはさぞこの苦しさから逃れたい事でせう。」さう言つて進み寄りながら指を一本擧げると秋先の手錠はばらばら

になつてひとりでに解け落ちてしまつた。秋先はそこでその仙人の方へと這ひずりながら進み出て額を地につけて言つた「仙人さま、どうぞお名前をお明し下さいませ」仙女は答へた「私こそ瑤池の西王母に仕へてゐた花を司る娘です。あなたの花を惜しむ眞心に動かされて一たん散つた花を私が再び咲かせて上げたものを、それが思ひがけなくも心の拗ぢけた者どもに無實の言ひがかりの種にならうとは！　あなたは不仕合せに出遭つたのです。けれども明日になれば逃れられることでせう。張委は花を傷めた上に人を害した。花の神はもうそのことを天帝に申し上げてあります。あの人の命數はもう縮められたし、惡事に加勢をした者どもにも今に天罰が下ることでせう。ただあなたは一生懸命に今の志を固くして修行をなさるがよい。幾年かの後にはわたしもあなたのためにいいやうに取計らつて上げたい。」秋先は再び地に額をすりつけて、どうしたら仙人になれるだらうかといふことを尋ねた。仙女が言ふには「仙人になる道筋はそれこそ澤山ある。然しそれぞれの人の性質に從ふのが一番いい。あなたはもともと花が好きだといふのが取柄だから、その花の道で仙人に成る方法がいい。ただ花びらばかり食べるやうになさい。そのうちには體が輕くなつてひとりでに地上から離れられるやうになるでせうから。」かう言つて仙女は花びらの食べ方を敎へた。秋先は平伏してお禮を申し上げた。それから再び頭を擡げて見ると、もう少女の姿はもとのところには見えなかつた。あたりを見廻すと仙女は獄屋の塀の上に立つてゐて彼を手招きして呼んでゐた「あなたも私と一緒に上つていらつしやい」秋先は直ぐさま塀を攀ぢ始めた。しかしどんなに焦つてもなかなかその半分も上ることは出來なかつた。もう力が盡きさうになつた。それでももう一息で上までとどきさうになつた。その時、突然に銅鑼の音が鳴り響いて人が叫んだ「妖術使ひが逃げ出した。早く起きてつかまへろ。」秋公はもう氣が氣ではない。手はしびれ足は萎えてしまふ。彼は塀から地面へどしんと落ちてしまつた。と思ふと、はつと目が覺めた。秋公は自分の身はやつぱり囚人の寢牀のなかにゐるのに氣がついた。しかし、夢のなかのことを思ひ出して見ると一つ一つの言葉まではつきりと覺えてゐる。何となくすべての事が彼に都合よく行くやうな氣がして、自分に疚しい事さへなければ天に何もかも知つてゐてくれるやうに思へて心がいくらか落ち着いた。

張委は裁判官が秋先を妖術使ひとして認めたものだから、自分の計畫が圖に當つたと思ふともう喜んでも喜びきれない程であつた。「あの老爺め實に頑固な唐變木だつたが、今晩は定めし牢屋の寢床の上でさぞいい夢を見ることだらうて！　さすがの花守もかうなつちやもう我々の酒盛の邪魔は出來まい」張委がそんなことを言ふと仲間の者たちも言つた「こ

の前の時は庭が彼奴のものだつたから存分な愉快を盡すことも出來なかつた。今日こそは一つ大がかりに庭拔け騷ぎをやつてやらうぢやありませんか。」「よからう！よからう！」と張委も言つた。そこで一同は町を出て、家來たちに酒と肴との用意をさせ秋公の庭へ來ると門を開けてそのなかへ這入つて行つた。近所の人たちは張委の姿を見て怪しからぬことには思つても、皆その威勢に惧れて誰一人とて口を利かうといふ者もなかつた。仲間の者たちを引きつれた張委はすたすたと草菴の前まで這入り込んで行つた。來て見ると牡丹の枝には、これはまた！どうした事であらう、花は一つもない。さうして花は昨日たたき散らされた時のままめちやくちやに地上へ散り敷いてゐる。一同は怪しみ驚いたが張委は言つた「それ見ろ、あの老爺めやつぱり妖術使ひだつたのだ。でなけや、僅かの半日のうちにさうたびたび散つたり咲いたりしちや花だつて忙しすぎらあ。それともまた仙人とやらが天降つて花を散したとでもいふのかな？」すると手下の一人が言つた「これや若しかすると彼の老爺めあなたが花を見にお出でなさる事に氣がついて例の妖術で意地惡く花を散して置きやがつたのかも知れませんぜ。」「よし。それならそれで一つ。散つた花を肴に飲んでやるわい」張委はさう言つて直ぐに地面へ毛氈を敷かせた。それから思ふ存分に飲み暴れた。張委はこの事件に特別骨を折つた氣に入りの張覇には酒を二瓶も餘計に飲ませた。太陽が西に傾いたころには仲間の誰一人として醉つてゐないものはなかつた。この酒盛の最中に、突然大風が吹いて來た。庭の草木はまるで水の面の浮草のやうに搖れるし、松の森林のやうに鳴りひびく木々の聲は虎の群が嘯くやうに物悽じい。地上に散つてゐる花びらを風が吹き上げた。と、吹き上げられた花びらはぬつくりと起ち上つた。と思ふと、それは丈一尺ぐらゐの小さな女になつたゐた。「やあ！これは？」と皆は一度に叫ぶか叫ばないうちに、この小さな女たちは風に煽られてむくむくと恰も風に吹きふくらまされたやうに、ぬうと丈が伸び上つて、顏容は美しく目の眩しいやうなあでな衣物に包まれて、かがやくばかりに圓く輪になつて突つ立つた。惡者どもはこの少女たちの美しさに目を射られてぼんやりと立ち竦んでしまつた。すると少女たちのなかの燃えるやうな色の著物を著たのがほかの少女たちに對つて言ひ出した「姉妹たちよ、わたしたちはここにもう何十年もゐて秋先からどんなに手篤く愛せられて來たことでせう。こんな賤しい者どもに恥を蒙つて、むざむざ折りくだかれやうなどとは夢にも思はない事でした。秋先はこの者どもの惡だくみに陷つてここはこの者どもに横取りされるのです。仇はいま目の前にゐるではありませんか。さあ皆さん、力の限りこの者どもを討ち懲らしませう。秋先への恩返しです。私たちの恥を雪ぐのです。」他の少女たちも一度に叫んだ「さうです。姉よ、よく言つた。さあ早く、逃がしてはなりません。」言ひも終らないうちに少女たちは風に吹飛ばされる袂を長旗のやうに飜して迫り寄つた。骨まで凍るやうな寒けがして「お化けだ！お化けだ！」と叫びながら人々は逃げ惑うた。座にあつたものなどは蹴飛ばして友達などには目もくれて居られない。或る者は石に躓躓いて打倒れる。或る者は樹の枝に顏を引裂かれる。倒れては起き上り、起き上つては打倒れ騷ぎは容易にやまなかつた。やつとの事に收つたので、さて人の頭數を數へて見ると張委と張覇とだけが足りない。大風はもうやんでしまつたが日は全く暮れきつてゐた。惡者たちはともかくも命からがらで一先づ家へといふので頭を抱へたきりすごすごと立去つた。

彼等がやつとのことで回復したので、家來を幾人か呼び集めて灯をともして、見えなくなつた人たちを搜すことになつた。急いで秋先の園へ行つて見ると、梅の大木の下で人の呻つてゐる聲がする。灯を差し出して見ると、それは張覇が梅の根つこに躓いて打倒れて頭に怪我をして居るのである。彼ひとりでは立ち上ることも出來ないので家來二人に張覇を擔いで歸らせた。さうして皆はもう一人張委を見つけようと庭のなかを一まはり搜し歩いて見た。しかし庭の中はただひつそりと靜まり返つて、牡丹の棚の下には花は元のとほりに咲き誇つて灯の光にもあざやかに輝いてゐる。さうして散つてゐる花びらなどは一つだつてない。草菴の前には皿や杯がごたごたに飛び亂れて、こぼれた酒がぽたぽたと滴つてゐる。皆口をあんぐりさせて不思議なことだと言はない者はなかつた。さて彼等の一部は器具のかけらなどを搔き集めるし別の一部はまた灯をともして見てまはつた。庭と言つてももとも大して廣いわけではなし、三度も五度も見てまはつたのに、張委は影も形も見えないのであつた。皆は訝しがつて言つた「これや大風に持つて行かれてしまつたのぢやあるまいか」「それともあの女のお化けが食つてしまつたのぢやあるまいか。」何にしても一向どことい ふ見當もつかないから、一先づこのまま引取つて、夜が明けてからまた何とか考へるより外はあるまいといふ事になつた。さう決めて門を出ようとすると、折から別に提灯をもつた一組がこの庭へやつて來るのに出逢つた。これは例の虞公や單老たちの連中であつた。二人の老人は人々がお化けに出逢つたことや張委の姿が見えないといふことや皆が搜し廻つてゐるといふ事を聞いて本當かどうか試さうと思つて、近所合壁の人たちを誘ひ合つてここへ來合せたのであつた。張委の家來たちに聞きただして本當だと解つたので、二人の老人は今更ひどく驚いた。さうして歸らうとする家來たちを引きとめて「ともかくも私たちも皆さんと御一緒に念の爲めもう一度搜して上げませう」といふので、更に皆揃うて隅々まで一とほり、殘らずたづね

て見た。皆はもううんざりして途方に暮れ、それぞれに溜息をつきながら門から出ようとする時であつた。二人の老人は言つた「ところで皆さん。皆さんがもう今晩ここに御用がないなら私たちは門を閉めようと思ふのです。何しろこの通り家は無人なのですから、私たちにも隣近所の務があります。」かう言はれても張委の家來たちは、今はもう頭を碎かれた蛇同然で、今までのやうな無法なことをいふ勢もない「勝手にしろ。勝手にしろ。お前たちに任すよ。」と答へるだけであつた。彼等は二組に右左へ分れたが、家來の一人が東の方の角まで來かゝつた時に不意に叫んだ「や！　旦那だ！　旦那だ。」そこで人々は皆そこへ集つて來た。するとその家來が槐の樹の枝にひつ懸つてゐるものを指さして「あの薄絹は旦那のものぢやないか」「なるほどあれや旦那の手巾だ。あれがここにあるからには旦那もこのあたりだらう」人々はさう云つた。そこで垣根に沿うて灯を照して行つたが、幾足も歩かないうちに皆は思はず叫び聲を上げた。一たい、この東の角の引込んだところには糞窖(そだめ)があつたのだが、その穴の中に一人の人間の二本の脚が空ざまに突立つてゐた。それはゆがみもせず倒れもせずそれこそ眞直ぐに、糞窖のなかへしつかりと根を生してゐるやうに見える。家來には靴下や着物の端でこれが張委だと云ふ事が判つた。そこで穢臭を我慢しながらひつぱり上げた。處と單と二人の老人はただ口のなかで念佛を申してゐた。あたりの人たちも自然と集まつて來たが、張委の家來たちは湖の岸の方へ行つて主人を洗つてゐた。使ひを出して屋敷の方へ知らせてやつたものだから、屋敷中は皆泣き立てながら死骸の始末をしたが、そんな事はとにかくとしてあの張覇の頭の傷が其晩のうちにだんだん惡くなつて夜明け近けにはたうとう死んでしまつた。

氣分の直つた法官は、次の日役所へ出て秋先の事をよく調べようと思つてゐると、書記が、その事件の原告たる張覇もその家長の張委も昨晩二人とも死んでしまつた事、その事情を一つ一つ詳しく告げた。法官は大へん驚いたがそんな奇妙な事があるなどゝといふ事は信じなかつた。ところへまた誓くすると長樂村の年寄り役が村の者百十人の名前を書き連れて、同しことを詳しく書き記した書狀を差したのを見た。それは秋公が日ごろから花をひどく愛してゐた樣子やら、又決して妖術使ひではないといふこと、張委たちの惡企みにひつかかつたこと、神仙が報いを現はしたこと、それらのいきさつが事細かに說き記してあつた。法官も昨日のあの解(げ)しがたい眩暈のことを思ひ出すと、秋公の罪を疑ふ氣になつた。するとどうやら心のなかも氣が輕くなるのを覺えて今更に早まつて人に刑罰を與へてしまはなかつた事を喜ぶのであつた。そこで直ぐに秋公を牢屋のなかから呼び出して彼を放免する

ことにした。同時に法官は自分の印を捺して與へて、獨りに秋公の庭に這入つて花を折つてはならない旨をその庭の門に掲げさせることにした。村の人々は厚く禮を言つて役所から出て行つた。秋公はまた村の人たちに禮を述べた。さうして皆ともども村に歸つた。處公と單老とが門を開けると秋公は門のなかへ這入つて行つた。秋公は牡丹が初めのとほり何の變りもなく咲き誇つてゐるのを見て涙も流さんばかりに喜んだ。村の人たちは酒の用意をして秋公に祝ひを言つたので、秋公も亦同樣に酒盛をして村の人たちに答禮をした。皆して幾日も幾日も酒盛が打つづいた。

それはさて、この後、秋公は毎日花びらばかりを食べてゐたが、それがいつか習慣になつてしまつてしまひには人間の手で料理をしたものはもう食べなくなつた。さうして庭の果實は金に代へてもすつかり施しに費してしまつた。かうして幾年も經たないうちに白かつた秋公の髮の毛はだんだん黑くなつて來るし、顏色までが少年のやうに變つて來た。或る日、それはちやうど八月の十五日であつたが、この日はうらからかな天には微かな雲の瑕一つさへないやうな空であつた。秋公がいつものやうに花のかげに膝を組んでゐると、不意にさわやかな風がそよそよと吹き出し虹のやうな雲が湯氣のやうに立ち昇り中空からはほがらかな樂の音がひびき渡つて、得も言へぬ香がすると思ふと靑い鸞と白い鶴とがくるつと空に一まはりして、舞ひ下りて秋公の爪さきへ來て立つた。さて虹のやうな雲の眞中にはいつの間にかあの花を司る少女が、その兩側から憧幡と寶蓋とでかざし守られながらそばには幾人かの仙女が音樂を響かせてゐるのであつた。秋公はそれに氣がつくと頭をぴつたりと垂れてひれ伏した。その時あの花を司る少女が秋先に對つて言ふには「秋先よ、おん身の行は今こそもう申し分もない。私はもう上帝にお願申して置いた。上帝からの命令があつておん身は天の花守になつた。下界のすべての花はおん身に任された。おん身の家屋敷はもう天のものだ。花をまことに愛すればこそおん身は今幸を享けた。徒らに花を弄ぶものには禍あれ。」秋公は天に向つてお辭儀をしてお禮を申し上げた。それから諸の仙女たちに隨つて雲に乘つた。秋公のあの草菴もさまざまの草木も一度に少しづつ浮き上つて來てだんだんと南の方へ動き出した。村人はみな地に手を突いて拜んだ。見上げると不思議な形の大きな雲のなかから秋公は手を擧げて村の人々に會釋をしてゐるのであつた——しばらくは見えてゐたが、たうとう見えなくなつてしまつた。

その後この湖畔の平和な村は、この里から仙人が昇つたといふので昇仙里と名を呼び改めることになつた。またここは不思議とさまざまな花がよく榮えるので別に百花村といふ名もある。

揚州十日記

王　秀楚記
佐藤春夫譯

乙酉（弘光元年、卽ち明の福王の卽位二年、西曆一七〇五年である）夏の四月十四日に、督鎭史可法は白洋河から、守を失つてよろめきながら揚州へ逃げ込み城を閉ぢて敵を禦ぎ、二十四日になつた。

（十四日から二十四日までの間のことを記者は何事も錄してゐない。譯者はこれを補ふが、この間、淸兵は揚州城を重圍の中に置いたまま、敢て近づいて攻めることをしなかつたのである。それはこの城を攻擊してゐる淸の豫王が部下の諸軍を戒めてゐたからである。豫王は敵國の督鎭たる史可法の忠節と武勇とを惜んで、どうにかして彼を殺さずに降伏させ、さうして自分の國のために重用したいといふ考へがあつた。それだから史可法が城中へ逃げ込むと城を嚴重に圍んだ上で、かつては泗州の守將であつた明の降將の李遇春といふ者に檄を持たして城に近づかせた。李遇春が可法を呼び出すと、可法は城壁の陴（ひめがき）に登つて遇春を罵つた。遇春が利得を說き節を淸朝に屈して名を成すに如かずといふと、可法は怒つて矢を射かけたが、遇春は走り去つて矢は當らなかつた。すると今度はまた、豫王は土民に書狀を持たして來た。使者は城の濠のなかから守兵を呼んで城中に入つて可法に見（まみ）えたいといふと、可法は强い兵卒に言ひつけて城壁を繩梯子でおりさせて、その書狀と一緖に使者をも水の中へ投げ込ませてしまつた。豫王は可法の志の固いのを見るにつけて益々この人を得たいといふ念が昂じて、三度目の使者を出したが、その書狀は啓いても見ずに焚かれた。そこで豫王は、どうしても可法の志の屈することが出來ないのを知つたので、旣に滿を持してゐた士卒を勵まして、急に城を攻めさせた。揚州は由來繁華な都市で、また美人の產地として二十四橋の風月は天下に響いてゐた。滿洲の士卒は血に渴いてゐる）

城がまだ破れない以前、禁門のなかにはそれぞれ兵がゐて守備してゐた。予の住宅である新城の東の方面は揚氏を姓とする將校が守つてゐた。吏員や兵卒が要所々々にまくばられてゐたが、予の家にも二人の兵卒がゐた。左右の隣家も同じ

くであつた。この兵卒たちは家のなかをさんざんに踐み荒して物品を徵發するので、それを緩和するためには每日、千錢以上も費さなければならない。これでは到底やり切れないといふので、近所同志が相談をして隊長にふるまい酒をすることにした。予はその上にもまだ心にもない恭敬の有樣を示してやつと隊長と交際を取結ぶことが出來た。隊長はそこで兵卒どもを誡めてくれたあげくに兵卒たちもいくらか遠慮するやうになつた。この隊長は音樂が好きで自分でも琵琶をやる。さうして名妓を得て軍暇を娛まうといふ意があつた。この夜、予に相談をして存分に飲んで歡を盡さうとしてゐたところが、不意に督鎭から紙片が到來した。彼はこれを覽るなり顏の色をかへて遽に城に登つたので、予も外の會衆たちも散會した。

次の日の早朝、督鎭からの諭告揭示があつた。その中「一人當之不累百性」といふ語があつた。督鎭一人の身でこの責に當る、決して庶民には心配をかけないといふ意味である。（日ごろから督鎭の德を景慕してゐる市民の）これに對して感泣しないものはなかつた。また巡撫の軍が小捷を得たといふ噂が傳はつたりして、人々は天に謝し祝した。午餘（ひるすぎ）に姻戚の某が興平伯の部下の逃兵を逃げて瓜州から來た。私の妻は久しく別れてゐたものだから相見てすすり泣きした。そのうちに大軍が城に入り込んだといふ噂を一二の者が私に知らせたので、私は急いで外に出て人々にこれを詢ひ正した。或人は靖南侯黃得功の援兵が來たのだと言つてゐた。城の上を見まはすと守備の兵たちはまだ規律立つてゐた。再び市へ出てみると、人々は怯え切つてゐるし、髮もおどろに跣足の群集が砂埃をあげながらやつて來る。尋ねようと言葉をかけても、氣もそぞろに息せき切つてゐて返事も碌に出來るものは無い。忽ち、數十の騎者が北から南へ、あはてふためき犇き押し合ひながら、さながら波の湧き立つ勢で、そのなかに一人を守立ててゐたが、これこそ督鎭その人であつた。多分、東へ逃げようとして敵兵が城に逼つてゐて出ることが出來ないので、南關からのがれようといふのでこの道に來たものと思へる。この時、敵兵が城に入つたことはも早疑ひ無いのを悟つた。突如として一人の騎者がこれは南から北の方へ馬の手綱を放したまま緩步しつつ面を仰いで歎き哀しみ、その馬前には二人の卒が名殘惜しげに馬の轡や首に取縋つたのが今もまだ目に見えるやうな氣がするのだが、殘念ながらこの人の名前は知れない。騎士たちが稍遠ざかつたころには、城を守備してゐた兵丁が入りみだれて城壁から竄れ下り、冑を棄て戈を投出し、さうかと思へば首を碎いたり脛を折つたりする者もあり、城の櫓を見渡すとそこには早くも影一つなかつた。

（この記者がさまざまな取沙汰を心配してゐる間に、城の西北隅が破られたのであつた。城が陷つたことを知つて、督鎮史可法は自分で頸を刎ねて、介錯することを副將の莊子固――一說には史德威――に命じた。しかし命じられたものはこれを爲すに忍びなかつた。子固は參謀の許謹等とともに、死に切れずに着衣一面に血の滴つてゐる督鎮を抱いて馬に乘せた。最初に小東門から逃げようとしたけれども、そこにはもう大軍が逼つてゐた。子固も許謹も皆其所で戰死してしまつた。この記錄の記者が波のやうに亂れどよめきながら南關に向ふ數十騎のなかに守り立てられてゐる督鎮を見たといふのは、小東門から更に逃れようとしてゐた彼等の血まみれの一隊であつたに相違ない。）

これより以前の事に督鎮は城が狹くて大砲を列べることが出來ないといふので、城の垜に板をとりつけて、前は城の徑にその後は民家の屋根に接するやうにその板を橋渡しにして餘地をつくつて大砲を安置するに便ならしめようとしたのであつた。ところがその工事のまだ畢らないうちに、敵兵の弧を操つて先登した者が白刃を滅多打にふりかざして來たので、城を守備する兵卒や人民は互に押合ひをして、前方には進めないものだから皆逃げて、置かれてあつた板の上へ四つ這ひになり手を板き合ひ援け合つてやつと民家の屋根に逃げ延びることが出來た。ところが新に置かれた板はまだ固めてなかつたものだから、足をかけるとそれは傾いて、そのためにまるで人間が落葉か何かの如く、十の八九までは死んだ。うまく屋根に行くことの出來た者でも足は瓦を踏み破つて裂けた。それらが皆、劍戟の相擊つ如き聲を立て又は雨や雹や挾彈などのやうにもあり、物凄まじい音響が鐘聲の如く鼓聲のごとく四方に轟渡つてやまなかつた。家のなかにゐた人々は惶れ駭きの限りをつくして爲すところも知らなかつた。さうして家といふ家はどこもかしこも寢室のやうな奧の方まで、守備の兵卒や人民どもの屋根づたひに下りて來た者どもが慌しく隙を覗めてもぐり匿れて、家の主人などが叱つたぐらゐでどうして、止まるものではなかつた。表通りの軒並は戸を閉ぢてしまつて全く人氣は絕えてしまつた。私の屋根はうしろが城墻に面してゐたものだから、窓の隙間から城壁の上にある兵が南の方を循つて西に行くのを覗いてみたが、その步調は規律立つたものでふりそそぐ雨にさへも少しも紊れなかつたので、節制のある軍隊か知らと考へたりして心は幾分か落着いた。忽ち門を叩く聲が慌しかつたが、これは隣人たちが相談をして、一緒に王師を迎へるがために案を用意して香を焚き、敢て反抗すまいといふのであつた。私は今更そんなことをしても仕方がないとは思つたけれども、衆の意見だからただ續けざまに、はいはいと言つた。そこで衣物を着

換へ樣子を整へてやや暫く待つてゐたが、誰も來なかつた。私はそこでもう一度窓のところへ行つて城壁の方を覗いてみた。すると隊伍が稍疎になつて步いてゐるものもあつたし、止つてゐる者もあつた。ふと見ると、婦女がその間に雜つてつれて行かれてゐるのであつた。服裝はみな揚州の風俗であつた。私は初めて非常に駭き、座にかへつて私は妻に言つた。兵が城に入つて來て萬一思ひがけないやうなことがあつたならば、お前は自害をしなければいけない。妻は言つた。承知してゐます。いくらかの金がここに有るのをお前に持たせて置く。我らはもう生きることなどは考へまい。私は趨り出て眺めると、北方から來た數騎が皆々轡をひかへて徐ろに近づくのを、帥を迎へる者たちはみな首を垂れて何か話してゐる樣子である。この時人々がそれぞれ身の用心をしてゐるものだから誰も步く者もなく、咫尺を距てたぐらゐのところでも息も聞きとれないほどであつた。稍々近づいてきてやつとこの數騎は家毎に金を索めてゐるのだと判つた。しかし彼等はあまり法外な考へも無く、少しでも得さへすれば別に兎や角は言はなかつた。もし應じない者がある時には刀に手をかけてもそれが人の身に及ぶやうなことはなかつた。後に知つたところではこの時、損金を萬兩も獻じて不意に殺された者があつたのは揚州人がそそのかしたのだといふ。やがて彼等は私の門のところへ來て一人の騎者は特に私だけを指ざして後の騎者に言ふには、我が爲めにその藍色の衣物の男を詮議してくれ。後の騎者は馬から下りようとしたので、私は飛んで遁げた。後方の騎者はたうとう私をあきらめて馬に乘つて行つてしまつた。私は自分ながらに考へたのには、自分の粗服は隣人たちと似たやうなものだのに、どうして自分ばかりに目をつけたのだらうか。そのうちに私の弟が來た。私の兄も來た。そこで皆で一緒に相談をしたことには、この住居は右も左も皆、富有な商人であるから人は私をも亦富有な商人と見做すらしい。どうしたものだらうか。最後に人知れね徑を通つて兄のところへ手賴つて行かうといふことになつた。弟が女たちを扶けて雨を冒してやつと仲兄のところへ行つた。この兄の宅は何家墳（無緣墓地）の後にあるので附近は皆貧民窟であつた。私はひとり自分の家に殘つて樣子を注意してゐると、不意に長兄が來て言ふには、中通は血が湧いてゐるではないか、こんなとこに殘つてゐて一たい何を待つてゐるのだ。生きるにも死ぬるにも兄たちと一つ處であつたならば心殘りもない、といふので私は先人の位牌を奉じて長兄とともに仲兄の宅に行つた。當時は兩人の兄、一人の嫂、一人の弟、一人の姪、又一人の妻、一人の子、妻の里方の二人の姨、妻の弟が一人、皆同じく仲兄の家に避難したのである。

日は漸く暮れて、多勢の兵卒が人を殺す聲が門外にぶつ徹

しであつた。そこで屋根に上つて暫くかくれた。雨が實にひどかつたのに十數人が一枚の毛氈を擁してゐるのだから髪の毛がみんな濕れ透つてしまつた。門の外には哀痛の聲が耳を悚たせ魂を慄れさせたがやつと夜になつて靜まつた。そこで軒につかまつてどうやら屋根をおりて、火を敲きながら飯を炊いた。城の四方には火事が起つてゐて、近いところでは十數軒、遠いところは數へきれない。赤い光は映じ合つて稲妻の如く火に彈ぜる物音は耳に轟いて身を切る思は絶えない。又、人を鞭打つ聲が哀しい風になつて物凄まじく、悲痛は言ひ現はすことも出來ない。飯は出來たけれど一家中互に顔を見合して驚いたり心配したり、涙が流れて箸をつけることもなし得ず、さればとて一向よい考も思ひつかない。私の妻は先刻の金を取出してこれを四つに碎いて、兄弟がそれぞれにその一つをとつて髻や履や衣や帶の內などに隱し藏めるのであつた。妻はまた破衣と古履とを搜出して私のために着換へさせた。目を見開いたままでたうとう夜明になつた。この夜、鳥があつて空中で笙の笛のやうな又子供の啼叫ぶやうな聲をさせた。それは人の頭の上から遠くないところであつた。この事を人に詢ねてみると外の人も皆これを聞いたといふ。

しばらくして火勢も稍息み天も亦だん〳〵明くなつた。再び高いところに乘つて屋根にのぼり、そこに眺れた。十數人の人がもう天溝のなかに身を伏せてゐた。突然、東廂へひとりの男が墻を乘り越えて上つて來たと思つたら、その後から一人の兵卒が刀をさげて飛ぶが如く追ひかけたが、その兵卒は私たちの仲間を見ると、追つかけて來たものを見放して私たちの方へ突進んで來た。私は驚き慌てて竄げ下りた。兄が私につゞいた。弟も走つて來た。百歩あまりで立ち止つたが、この時から妻や子供を見失つてしまつて、その生死は知れなくなつた。

惡智惠のある兵卒どもは、逃げ匿れしてゐる者が多いらしいと氣がつくと、誅められないやうに身元保證の符を渡してやると、衆人をだまかした。匿れてゐた者どもが我勝ちに現れ出て、兵卒どもに從うた。それが五六十人にも達し、その半分ぐらゐは女が雜つてゐた。兄が私にいふのは、力んで見たところでわれら四人もしも荒狂つた兵卒にでも出會したら、所詮は免れられるわけもない。一そあの群集のなかへ加はつたらどうだらう。大勢に雜つたら逃げられる機もあるしたとひ不幸に萬一の場合があつても皆聚つてゐれば心殘りもない。兄のこの言葉に、分別も晦んで生免れる手だても思ひつけない私たちは一緒に、さうだ、さうだと言つて、兄のいふとほりにした。この群集を操つてゐるものは滿洲兵であつた。私の兄弟の金はすつかり搜出されてしまひ、ただ私だけが未だ搜されずにゐた。と、その場に來た婦人たちのうちに

私を眺めて涙がある。見ると、それは私の友人李鹿山の妻である。私はあはてて呼び止めた。このふたりはいづれも髪ふり亂れ肌も露はれ、足は深く泥のなかへまみれて脛まで埋まつてゐる。ひとりの方はこの時まで女の子を抱いてゐたが、兵卒が鞭でそれを泥のなかへたたき落すと、引かへして驅け去つた。一人の兵卒は刀を提げて先立し、一人の兵卒は槍を横へて後から追ひ、また一人の兵卒は中に居て右へ行つたり左へ行つたりして逃げ出すものを見張りながら、凡そ數十人がまるで牛か羊かのごとく追立てられた。少しでも立留つたりすれば撻つか、それでなければ殺した。これらの婦女たちは長い綱で脛をつなぎぎつしりと珠數を貫したやうな有樣で一足歩けば一足跌く。體中は泥だらけ、地面一たいは皆嬰兒で、それが或は馬の蹄にかかつたり人の足に踏まれたりして、その臟腑は泥にまみれ、その泣き聲は野を覆うた。或る溝と池とを通り過ぎたが、堆く重ねられた屍は入亂れて互の手や足を枕し合ひ、血は碧い水に入つてあたりは赭く化して五色にただれ、水面に埋まつて塘まで平になつてゐた。

或る屋敷へ來た。それは延尉（刑獄を司る役人）永言姚公の住居であつた。裏門から眞直ぐに入つて行つた。建物は奥深かつたが、そのところどころには皆、屍が積まれてゐた。心のなかで自問した、これが自分の死場所であらうと。そのうちに曲りくねつて表に出、左へ折れて街へ出た。そこでもう一度、或る屋敷へ來た。そこは洋品商の喬承望の家で、つまりこの三人の兵卒の巢なのだ。門を入ると前に一人の兵卒が居て、數人の美しい婦を拘へてゐたが、擇取りして來た箱や籠の綵絹や緞子が山ほどある。三人の兵卒の來たのを見ると高笑ひして、彼は私たち數十人を追ひ立てて裏の建物へつれ込んだ。婦たちは別に傍の室に置いた。この室の中には二個の几に三個の裁縫臺が列べられてあつて、一人の年增の婦が衣類を仕立ててゐた。この婦は土地の者である。こつてりとめかし立てけば〳〵しく着飾つて、差圖をしたり笑ひ興じたり、笑顏には得意の色を見せてゐる。好いものが見つかる度に兵卒に賴んで貰ひ受けては、媚の限りを盡しながら恥とも思はぬ。以前、或る兵卒が或る人に話したといふ言葉に、自分たちは高麗を征めて婦女を數萬人擄にしたが、一人として貞操を失つたものはなかつた、と曰ふ。それだのに我が堂堂たる中國でありながら、かうまで無恥になるものであるか。まことに中國の亂るゝわけではある。三人の兵卒たちは婦女たちの濡れた着物を外側から內側までまた頭の頂から足の踵まで、すつかりぬがせた。それから衣類を仕立てる婦に、背丈を見させたり身福を量らせたりして、眞新なものと取かへさせた。婦女たちは兵卒どもの見幕をおそれて裸體になり身を覆ひつつむ事が出來なかつた。衣類を着換かへさせるとそれらの婦女たちを擁して、兵卒どもは酒を飲み肉を食

ひしたい放題を振舞つて見えも恥も構はない。突然、一人の兵卒が刀を横たへていきり立つて叫んだ。野郎ども出ろ、出ろ。目の前には數人の人たちがもう縛られてゐるのであつた。中に私の長兄もあつた。仲兄がいふのには、もうかうなつては詮方もない。かう言つて私の手をとつてこの群のなかへ進み出た。弟も私たちについて來た。捕へられた男が五十人あまり、兵卒が刀を振つて叫び立てると皆生きた心を失せて一人として身動さへ出來る者はなかつた。私は兄たちについて建物から出た。外には人殺しが行はれ、皆は順々に運命を待つてゐた。私も最初には縛り上げられることをもう覺悟してゐたが、ふと心が動いて神の助があるやうな氣がしたので、身を忍ばせて遁げ出すと、もう一度裏の建物へ行つたのを、外の五十人あまりは氣づかなかつた。

裏の建物の西の部屋にはまだ老年の婦人たちが居合せて、身を隱すこともならなかつたので、通りぬけてその部居の裏側へ來てみると、あたり一面には荷馬に青草を食はしてゐてそこを拔け出ることもならない。けれども氣が氣ではないから思ひ切つて身をこゞめて馬の腹の下へ入り、そのなかをあちこちくぐり拔けて這ひ出した。もし馬をびつくりさせて馬がちよつとでも足など擧げようものなら、自分の身はそれこそそこらの泥になつてしまつたであらう。また部屋を幾重かくぐり拔けたけれどどこにも逃げ出る路はなかつた。たゞ片わきに路次があつて、それがこの家の裏門につゞく。(この國の大きな古い邸宅はその一族の人たちがそれ〴〵に奴僕妻妾をつれてみんな一門の内に住んでゐるのだから、一つの屋敷に幾つかの家があつて、言はゞ屋敷のなかに家竝がある形である。この主人公は豪商のそんな廣大な屋敷のなかをうろついてゐたであらう。)ところがその路次の門には長い鐵の釘が打ちつけられてあつた。私はまた引かへして裏の路次から表の方へまはつてみた。表の母屋のなかからは人殺しの聲が聞えてゐた。益々恐れうろたへてあたりを見まはすと、左側に料理部屋がある。部屋にゐる四人の人間は、これも亦捉へられて來て料理番をさせられてゐるらしい。私をその仲間へ入れて火を焚いたり水を汲んだりさせてもらひたいと賴んだが、四人は手きびしく拒んだ。言ふには、我々四人は人數をしらべられて使はれてゐる者だ。もう一度しらべられて人數がふえてゐたら、詐が露はれずにはゐないので、さうなれば禍はわが身にふりかゝつてくる。さういふのを私がくどくしみじみと賴み入ると、彼等は大へん怒つて私を引立てゝ外へつれて行かうとした。それで私は其處を出たが、益々氣が氣ではない。あたりをよく視ると前に架があつて、その架の上には甕がある。屋根から遠いところではない。そこで架につかまり上つた。それから甕の口にどうやら手がとゞいたかと思ふと、私の體は横ざまに傾き倒れてしまつて、

どうにもしやうがない。そこで私は急いでまた路次の門へ走つて行き門に身をよせて錠前の金具を兩手でつかんで百度もこぜ搖がしてみたが動かない。石で打ちたたいたところが大きな音が外庭にまで聞えさうで、人に氣づかれるのが心配である。仕方がないから又してもこぜ搖がしてゐると指が破ぶれて血が出て來た。錠前の栓は思ひがけなく動いた。力一ぱいに引拔くとそれが外れて掌に握りとれた。門の居を引外さうとあせつた。しかし居の木質は楷かつた。雨に濡れて木が膨えてしまつてぎつしりとはまり込んで錠前の栓の倍も堅い。私は精一杯にやつた。すると居はどうやら取れさうになつて、それでも拔けないと思つたら、樞の方が突然折れてしまつた。さうして門扉の倒れる音垣のくづれる聲、まるで雷のやうに響き渡つた。私は急に身を飜へすと乘越えて飛出したが、そんな力が一たいどこから湧いたやら自分にも判らない。いそぎ裏門を驅けぬけて出てみるとそこは城壁であつた。折から兵卒や騎士が一めんに見えてゐて私は進むことが出來なかつた。そこで喬の屋敷の左隣の裏門を體で押開けて入つた。かくれられる限りのところにはどこにも人が居て、きつと外の人間を容れることを承知しない。その家から裏までおよそ五へんは捜し歩いたが皆そのとほりであつた。直ぐに正面の入口の方に行つてみるとそこはもう大通りになつてゐて、軍役に使はれる男どもの往來は織るが如くに絶えない。人々はここを危險な場所だといふので見棄ててゐた。私は急いで入つたがそこに榻が一つあつた。それはひつくりかへつてゐて、底が上向になつてゐた。それ故私は榻の柱につかまつてその底に上つて身をこゞめて匿れた。息ぜわしさがやつと落着いたと思ふと、不意に牆をへだてた隣から私の弟の泣きわめく聲がして、又刀で打ち斬る音も聞えた。それから次には仲兄が泣いて賴んでゐる。仲兄は言ふ、私は金を持つてゐてうちの穴藏に藏つてあるので、私を放してくださるなら持つて來て差上げます。一擊したと思つたらひつそりとしてもう聲は聞えなかつた。私はこの時にはもう自分の精神はどこへやら飛んで行つてしまつて、心臟は燃える膏のごとく、眼は枯れて涙も出ず、腸は固まつてちぎれさうになり、もう自分を統べる力もない心地であつた。やがて一人の兵卒が一人の婦人を小脇に挾んでわき見もせずに歩み來て、この榻(私がその上に匿れてゐる榻)に横はらうとした。婦は肯かなかつたけれども、强ひられて後に可した。さうして婦は、ここは市に近いのだからわたしはもうここには居られない、と言つてゐた。私はもう免れられないところであつた。然し、暫くするとかの兵卒はやはり婦人を小脇に挾んで立去つた。この室には天井に幕が張つてあつた。(天井に板を張らないこの國の建築法では、屋根裏からの塵を防ぐためによくかういふ事がしてあるが、その幕は席のやうなものでこし

らへてあつたので人の重みには勝えなかつたが、それでもこれを手頼にして梁に行くことは出來た。私は天井の幕の條をたぐつて上り、兩手で梁に這ひ上り足を駝梁に寄せかけた。ここは天井幕の蓆があるものだから漆のやうに眞黑であつた。そのうち一兵卒が來て、矛をもつて上を突き搜つたが、ひつそりとしてゐるのを見て誰も上に居るとは想像しなかつた。私はかうしてやつとこの日中兵卒に出會さずにすんだ。然し私の下の方では刃を被つたものが一たい何人あるか知れなかつた。表通に數人の騎者が行きすぎる度ごとに、きつと數十人の男女が泣き叫びながら引かれて行つた。この日雨はふらなかつたが日の光は見えず、夜明けも夕暮も分らなかつた。時がたつうちに兵馬もやや疎らになつたらしく、あちこちからは人聲の悲しみ泣くのを聞くばかりであつた。思へば、自分の兄弟はもう半分まで傷けられ、長兄とても長らへてゐるものやら亡きものやら推察することも出來ない。わが妻わが子は何處にゐるものやらも判らない。行方を求めたならばもしや一目見ることも出來ようかと、そこで梁にすがつてぽつぽつと下りた。

足を蹯がせて表通に來てみると通には人の首が相互に重り合つてゐる。どれが誰やら見分けもつかない。死骸に顏をよせてかはるがはる呼んで見ても返答する者も無い。遙か南の方を見ると數つかの炬火のぐるりに人が群らがつて進んで來る。私は慌ててこれをよけようと域郭に沿うて走つた。市中に積み重つた屍に足はつまづいて幾たびか膝をついてはまた立ち上つた。ものに驚く度にはすぐに地に仆れてのたれ死の眞似をした。しばらくかうしてゐるうちに小路に行きつくことが出來た。路行く人たちは闇のなかにぶつつかり合つて互に膽をつぶすのであつた。大通で火事が起りそれが照りかゞやいて眞晝のやうであつた。

酉の刻から亥の刻までかゝつてやつと兄の家まで來た。しかし家の門は閉ぢてあつたから敢て直ぐにはたゝきもせず、折しも婦の聲のするのを聞くと嫂であるので、やつと靜かに扉をたゝくと內から答へるのは私の妻であつた。長兄はもう先に歸つてゐて、私の妻や子供と一緒に居た。私と兄とは聲をあげて哭きさうして仲兄や末弟などの殺されたことは互に口に出すのを憚つた。私は妻にどうして助かつたかと尋ねると、妻が話した。兵卒があとを追つかけて來た時、あなたが眞先きに奔げ、皆もそれにつゞいて、わたしだけが遺されてしまひました。わたしは彭兒（子の名）を抱いて屋根から身を投げたのに死ねませんでした。妹もつまづいて足を怪我して打倒れてゐました。兵卒たちがわたしどもふたりをつかまへて或る家につれて行きましたが、そこには男や女が何十人もまるで目刺の魚のやうに繫がつてゐました。そこで兵卒たちは私を外の女の人たちのなかへ殘して、これの番をして遁

してはならぬぞ、と皆に言ひ置いたまま刀を用意して出て行つたのでした。するとまた外の兵卒がひとり入つて來て、妹を劫かして立ち去りました。しばらくしてゐたが誰も來ないものですから、私はたうとう外の女の人たちをだまして拔けて來たのですが、出てみると偶然にも洪のお嫗さんに出會ひ、ふたり連れ立つてここへ來たので、仕合と助かつたのです。洪嫗といふのは中兄の家內の身寄である。妻はまた私が助かつた理由を問ふから、私はそのわけを告げしばらくの間は互に泣いた。洪嫗は炊き置きの飯を持つて來て勸めてくれたが涙に咽んで嚥み下すことさへ出來なかつた。又しても方方に火事が起つて昨晩の倍もひどい。戶外に出て遠く無緣墓地を見渡すと樹立はさびしく物凄く哭く聲は籟となつてかすかに鳴りひびいた。或は父の子を呼び或は夫の妻をさがす聲だ。乳飲兒の呱呱の聲は草原にも谷間にも溢れて、いたましさは聞くに忍びない。かへつて洪の宅に行くと、私の妻は死なうと覺悟をしてゐた。私は夜をこめて話相手をしてそんなことをする間を與へなかつた。東の方が白むで來た。

妻の匿れ場へ行つて見ると、妻はうねりくねつたところを道案內して私を或る墓地へつれて來た。荒れて古瓦が散亂し久しく人の通ひもしなかつた所だ。私は茂るがままの雜草のなかに蹲り、子供は柩のなかへ入れ、その上からは蘆蓆をかぶせた。妻はその前に傴んだ。私は子の覆ひものの片わきにくるまつたが、首を上げれば頂が現れるし、足をのばせば踵が出てしまふので、息を忍ばせ手足をちぢこめて一裏になつた。性根もいくらか落着いたかと思ふと、殺伐な聲がもう身近かに逼つて、刀の金ものの鳴りひびくところに槍のかけ聲がつづけざまに起り、聲を合して命乞ひする者が幾十人かそれとも幾百人か。兵卒のひとりに出遇ひでもすれば、我々南方の人間は仲間の人數の多い少いによらず誰もみな頭を垂れて匍ひ伏し、頭をちぢこめて刀を受け、ひとりとして逃出すことすら出來るものはない。紛々たる女子供に至つては、皆口々に泣きわめいて地鳴りするばかりであるのは言ふまでも無い。晝すぎになると積み上げた死體は山の如く、殺掠に一しほひどくなつた。幸にも夜になつたものだから私たちはためらひながらもその場を走り出た。彭兒は柩の上にぐつすりと眠入つて、朝から夕方まで泣きもしなければ、口も利かず、また食べたがりさへしなかつた。渴いた時には瓦の片に溝の水を掬つて來て飲ませて、口をしめてやるとそのまま睡りつづけるのであつた。それを呼び醒し、抱きかかへてその場を立退いた。洪嫗も來合せた。私の嫂は引立てられて行つたし、姪は襁褓にくるまつてゐたがたうとう在處は知れぬ。悲しやゝやつと二日の間に、兄も嫂も弟も姪も死んだものがもう四人だ。

皆して臼のなかにこぼし殘してゐた米を掬し集めてみたが

無駄だつた。長兄とお互の腿を枕にし合つて飢を忍んで夜明けになつた。この夜、私の妻は死を企てて殆んど斃れてゐたのを、洪嫗のおかげで助かつた。私は長兄に曰ふのであつた。今日は誰の死ぬ日であらうやらも知れません。もしや私が死んでも、長兄よ、あなたはどうぞ無事でゐられて、どうぞ彭兒と一諸に生き長らへて下さい。兄も涙ながらに私を慰め力づけた。たうとう別れて別々の場所へかくれた。

洪嫗が私の妻に曰ふ。自分は昨日は櫃のなかへかくれて一日安心であつた。あなたと代つて上げるから、あなたはあそこへ逃げてゐるがいい。妻はしかし無理に斷つて、やはり昨日の柩の後に私とともにかくれて居なくてはならないと言つた。程なく數人の兵卒が入り來つて櫃を破つてこの老婆を引立て、彼等はあらゆる方法で挫ち懲したけれども、老婆は他人の在處は一つもあかさなかつた。私は深くこの德に感じた。

しばらくすると兵卒の來ることが益々多くなつた。私のかくれ場のあたりに來るものは引きつづいた。そのうちの或る一人は家のうしろへ來て墓所を眺めてから立去ると、にはかに十數人の兵卒が罵り喝しながらやつて來た。その勢はすこぶる猛々しかつた。不意にひとりが來たと思つたら、長い竿をもつて來て私の足を突いた。私は驚いて飛出してみると、揚州人でその兵卒の手引をしてゐる者は、顏はよく見覺えてゐてその姓は忘れてゐた。私はその男に向つて憐れみを求めると、彼は金を要求した。私がそれを差出すと、やつと私を釋しはしたが、それぢやお前の妻を出せと言ひ出した。するとその頭だつた者が出て來て、兵卒どもに向つて、まあやめて置けと言つた。そこで兵卒どもは散じ去つた。驚きの動悸がまだ鎭まりもしないうちに、忽ち一人の紅衣の若者が長刃を操つてつかつかと私のところへ來るなり、刃をとり直して私に立向ひ、金を差出させその上に私の妻を要求した。妻はこの時孕つて九ヶ月であつた。死ものぐるひで地につかまつて起たない。私は結いた。妻は身ごもつて月が重つてゐるのに、きのふ屋根から跌き落ちました。これが因で流產をしてどうしても坐ることが出來ません。立つて歩くなどは思ひもよりません。かう言つたが紅衣の若者は信じない。そこで腹をあけて見せ、その上又先から塗つてあつた血に染みた袴をも驗めさせた。そこで遂に見向かなくなつて或る少い婦人を擄にした。一幼女と一小兒とが母を呼んで空腹を訴へるのを見てその男は怒つて一擊すると、腦が碎けて子供は死んだ。婦と女とを小脇にかかへて彼は立去つた。見知らぬ人が（彼少婦の夫であらう）私にどうかしてくれと乞ひ求めるのであるが、彼を同情してゐたのでは我身のほどが覺束ない。それよりこの場を別れて立退くのが分別である。しかし妻は寧ろ自殺の決心が固い。私も亦うろたへ切つてもう自分で自分が

殺らぬ。ふたりはたうとうそこを立出でて、傍にふたり一緒に縊れたのであつたが、忽ち頂下の二本の繩は一度に兩方斷れてしまつて、私たちは竝んで地面へ膝をつき、まだ起きあがる間さへないうちに兵がまたしても門にむらがり、直ぐさま堂の上に走つて來た。まだ兩側の廊下には氣をつけてゐないから私も妻も急ぎ走つて門外へ逃げ出した。或る藁小屋にかけ込んだところが、小屋の中は殘らず田舍の婦女たちで、私の妻だけはそこへかくまつたが私には拒んだ。私は急いで南の方の藁小屋へ奔つた。そこには中に枯草が堆く積み上げて屋根裏までとどいてゐた。私はそれのてつぺんへ登り首を突込んで伏し匿れその上へやたらに枯草をかぶせて、これなら大丈夫と考へたのである。間もなく兵卒がひとり一氣に跳ね昇つて、長い矛で突刺したので、私は草のなかから出て來て命乞ひをし、又もや金を差出した。彼はこの草の中を搜して更に數人を見つけたが、皆金を出して免してもらへた。この兵卒が出て行つてしまふと數人は再び枯草のなかへもぐり込んだ。私は草の中を覗いてみると、四角な卓が數臺あつてその外側はみな草に埋つてゐるが中はきつかりがらんどうで二三十人も這入れるらしい。私は無理にもぐつて入つた。自分ながらうまい思案だと考へた。ところが思ひきや、小屋のぼろ壁は腰から急に崩れてしまつた。ぽかりと穴が開いてなかも外も筒抜けになつた。早くも兵卒は覗いてゐた。そこで穴の外から槍をぐつすり突き込んだ。前の方にゐたものは大創を負はない者は無かつた。私も腿のうしろに傷をした。前方にゐた者はみな兵卒のために捉へられた。後にゐた者は倒れながら草を分けて這ひ出た。私はもう一度妻のゐるところへ行つてみた。妻と一緒にゐる婦女たちは皆草を積んだ上に臥て、體には血を塗り糞で髮の毛を固め煤や灰を顏になすりつけ形相は鬼か蜮のやうである。その聲でやつと氣がつくのであつた。折入つて賴みこんで、積草の底へ入れて貰へたが多くの婦女が重り合つて私の上に倒れてゐた。私は息がつまつて身うごきもならず危く悶え死しかけた。妻は竹筒を私に渡してくれたので、私はそれの片端を口にくはへ別の片端を上に出して空氣がやつと通ひ、それで死なないですんだ。戸外には或る兵卒が一時に二人を手で殺した。その出來事は實に怪怪で筆には上されない。草に埋まつてゐた婦女たちが身をわななかせない者は無く思はず哀しみの叫びを一霽に擧げた。するともう小屋のなかへ入つて來てゐた兵卒は、大股に歩み出てしまつた。空は漸く暗くなつたので婦女たちも起きたし、私もやつと草の下から出たが汗は雨に打たれたやうであつた。さて妻とともに洪の宅に歸つたが、洪家の老爺も老婆も皆居た。長兄も來てその訃したところでは、是日は引捉へられて擔去られたが千錢の償ひをしたので保護命令の旗をつけて放されたが、途中は死骸が入りみだれて山

と積重なり血は流れて渠になつてゐたといふ。又聞くところによると王族の將軍（蓋し豫王）が昭陽の本營にゐて、數萬錢を日々遭難民にくばつて、その黨の人々は屢々殺人者を戒めとどめて命を完ふさせる事も多いといふ。この夜は悲しみに咽んだ果に、人心地もなく睡りに落ちてしまつた。

二十五日から始つて今日で五日になるが、血腥いこともせめて幾らかはうすらぐかと心頼みにしたものを、又しても人の口とりどりに洗城の噂が立つた。（洗城といふのは水を浚へて魚を得る如く、市中を隅なく狩り立てるといふ意である）これを聞いた城中の生き殘りの人々で、死を冒して城壁に縋つて逃げ出すものがその半分にも及んだ。舊の官溝は堰きとめられて水を通ずることが出來なかつたので、逃げたものはそこに群れ集り溝は人に埋まつて平になつた。その結果がまた、逃げたがために反つて鋒に罹るやうな憂目を見るものもあつた。夜になると仲間を組んで官溝のなかにうづくまり死骸から金銀を捜し盗るのを、誰も見咎める者もなかつた。私たちはも早危險を冒して逃げるだけの力もなかつた。長兄は私を案じて自分だけひとり立退くには忍びない。とかくしてゐるうちに夜明けになつたので、城外へ落延びるといふ考も遂に思止まつた。以前の匿れ場はしかしよくない。妻は孕つてゐるといふので度々無事ですんだ。私だけが池のほとりの茂みのなかに身をかくし妻と彭兒とはそのうへに臥しかぶさつた。數人の兵卒が來てそのために劫かされて引出されたことが二度もあつたが、皆少しばかり賄を差出すと立去つた。繼いて一人の猛惡な兵卒が來た。鼠のやうな頭、鷹のやうな眼つき、見るから實に憎さげなのが私の妻を劫かさうとした。妻は伏し曲んだままでいつもの言ひわけを告げたが聽入れない。無理に立たせると妻はまた地面に倒れてしまつた。死んでも起たうとはしない。兵卒は刀の背をふり上げてめつた打ちにした。血は着物の裏表にとつぷりと浸渡つた。妻はこれより先、私を戒めて、もしも不幸に出遇つて私がきつと殺されるやうな時でも夫婦だといふので命乞ひなどをして、あなたまで卷ぞへを食ふやうな目は見ないで下さい、と言つた事があつた。そこで私は遠く草のなかへ躲れて知らないふりをしてゐた。私ははらはらして、妻は今に死ぬだらうと思つてゐるのに、兵卒はそれでも思ひ切つてくれない。妻の髪を彼の臂に幾卷か卷きつけて横倒しに曳ずり去りながら呶鳴りつけ打ちのめし、田甫から裏路地までの間五六十歩の地面を通つてから、ぐるりと曲つて大通へ出て行つた。幾足か歩めばきつと幾度か打ち懲した。不意に彼は大勢の騎者に行き合つた。そのうちの一人がこの兵卒と滿洲語を五六句話し合つたが、遂に私の妻を捨置いて立去つた。妻はやつとの事で這ひながら還つて來ると、一度に大聲で泣きくづれた。體中で傷のつかぬところとて無かつた。

忽ち烈しい火の手が四方に起つた。何家憤の近所には藁小屋が多い。燃えうつれば直ぐさま燼になつてしまふ。一寸の隙間さへあればそこに洗城の網をのがれ出て躲れてゐた人たちは火のために追拂はれて飛び出さぬ者はなく、飛び出せば出たでまた殺害されて、一人の免れる者もなかつた。さうかと思へば戸に閉ぢこもつたままで燒け死んだ人も、一家に數人或は百人に上るものもあり、その家には堆い骨が一たい幾つあるかも判らない。すべてこの場合、避れる場所もなく、避れる方法もなく、たとひ避がれ得たにしたところで一度敵が犯して來たならば金がなければ殺され、金があつても殺されるのである。惟だ一その事、路傍に身をさらけ出して屍戸と雜つて居たならば、反つてその方がまだしもきつと殺されるものともきまらない。私は妻及び子と一緒に塚の後に行つて倒れてゐたが、首と言はず足といはず泥や土を塗りつけて、まるで人間らしい形も無かつた。火の手はいやが上にも燃え盛り、墓地のなかの高い樹に燒えうつり、その光は稻妻の如く、灼ける聲は山の崩れるかと思ふばかり、風は怒り叫び赤い太陽はものすさまじく光を消されてしまつた。目の前には無數の鬼どもが千百の地獄の人たちを追ひ殺してゐる。驚きのあまり時には氣が遠くなつてしまふ。恐らく自分の身はもう人間世界にはゐないであらう。急な人の足音と又いたましい叫びに心を震はせながら首をまはして見ると、これは長兄が獲へられて今や一兵卒と互に手むかひ合つてゐたのであつた。兄は精一ぱいの事でやつと振はらつて脱去ることが出來た。兵卒もあとを追つて趕せ去つた。この兵卒といふのは前日、私の妻を劫してしかし後に捨てて行つたあの者であつた。半晌ほどまはつて來ないものだから私は不安でびくびくしてゐた。長兄は忽然、走つて來た。裸で髪をふりかぶつてゐる。兵卒のために逼られて仕方がなしに私のところへ、金をもとめて救けてもらひに來たのである。私はやつと一かたまりだけ殘つてあつたのを出して兵卒に獻じた。ところが兵卒は非常に怒つて刀をふり上げて兄を擊つた。兄は地面に轉び狂ひ流れる血は體一面であつた。私の子の彭兒は兵卒にとり縋つて涙をすすつて免を乞ひ賴んだ。年は五つになつてゐた。兵卒はこの兒の着物で刀の血を拭いてから、又しても擊つて兄は死ぬばかりになつた。ひきつづいて私の髪を引つかみ金を出せと迫つた、刀の背で私を滅多打した。私は金の盡きて了つたことを訴へて曰つた。どうしても金でなけりやいけなければ仕方がないから殺してください。金でなく外のものなら上げられます。すると兵卒は私の髪を牽いて洪の家に來た。私は妻の衣類が二つの甕の中に入れてあつたのを階の下へひつくり返してひろげさらけて、取り放題にさせた。凡そ金や珠のたぐひは取上げないものはなく、衣類のつやの好いものも取つた。彭兒の頭に銀鎖があつたのを見つけて刀

で引きちぎつて行つた。行きがけに私を振返つて曰つた。俺は貴様を殺さないがそのうちには誰かが來て殺してくれるぞ。私は洗城の噂が確實で、きつと死なねばならぬものと覺悟した。

兒は家に殘して置いて、妻と一緒に急ぎ外に出て兄を看ると、頭は前も後も八寸ばかりも傷を負ひ、胸の邊はもつとひどかつた。私たちふたりは之を扶けて洪の宅に着き、兄を介抱すると、兄は身に傷手のあることも氣づかないで、目がくらんでゐるかと思つたらまた息を吹きかへした。そつと殘して置いて私たち夫婦は再び墓場に來て身を匿してゐた。隣人も亦一緒に入り亂れた死骸のなかに臥てゐたが、不意に人間の聲を出して曰ふには、明日市を狩り立てたなら城内殘らず薙ぎ殺されるにきまつてゐますよ、奥さんはそのままにして置いてあなた私と一緒に逃げませんか。これを聞いて妻も私に逃げることを勸めた。私は長兄の死にかかつてゐるのを考へれば、どうしてこれを見捨てて行けようものか。又、以前に希望をつないだのはいくらか餘金もあつたからである。今はもう無一文だ。生きてゐられようなどとは思ひもよらぬ。さう思ふと悲しさに氣も絶えてしまつたが程なくまた息が返つた。火もどうやら消えて來た。遠方には大砲の音が三度聞えた。往來する兵卒や軍丁もだんだん少くなつた。私と妻とは子を抱いて糞窖の中に坐つた。洪嫗もそこへ來て互に身をよせかけた。數人の兵卒どもが四五人の婦人を擄にして來た。そのうち老いたる二人は泣き悲しむが、年若の二人は笑ひ戯れてびくともしてゐなかつた。後から別に二人の兵卒が追つかけて來て婦人を奪ひとらうと互に激しく爭つた。そのうちの一人は仲直りをすすめて、滿洲語を話した。直ぐさま二人の兵卒が年若の婦をかついで樹のかげへ行つて野合した。他の二人の婦も辱を被つた。老いた婦は哭きわめいて免を求めるのに、年若な婦たちは恬として恥ともしない。十數人が互に奸淫をして、やがて後から追つて來た二人の兵卒にわたしたが、その中の一人の若い婦はもはや起つことも出來なかつた。私はそれが焦氏の媳であることに氣がつき、その家の日頃の振舞がこんなところで應報されてゐるのかと、驚愕のなかにも歎息に得勝えなかつた。

突如として、出て來たのは、一人の紅い軍裝に劍を帶びて、滿洲風の帽子に皂靴をつけ、年のころ三十にもならぬ樣子ぶりの俊爽な人物である。その後に隨へた一人は黄色い服に甲をつけた顔つきもまた氣が利いて凛々しい。またその後には揚州人が五六人跟き從うてゐた。その紅衣の人が私をつくづくと眺めてから曰つた。お前を見るとそこらに居合す者どもとは違つてゐる、何者であるか正直に申述べよ。私は考へたが、讀書生であつたために免された者もあるが、また同じく讀書生であつた爲めに直ぐさま殺された者もある。それ

で私は本當は言はないで、言葉を飾つて返事をした。すると相手は私の妻と子とを指して、あれは誰かと問ふから、これは本當を話した。紅衣の人が曰ふ。明日王爺が命令を下して刀を用ゐるのを禁ずる筈だ。お前たちも生きてゐられよう。かう言つて供の者に言ひつけて衣類を幾品かとそれに金一錠とを私にわたさせ、その上に問うて曰つた。お前たちは幾日ものを食はないか。私は五日だと答へた。すると、吾輩のあとに跟いて來いと命じた。私と妻とは信じてみたり疑つてみたりしながらともかく行かないわけにはならない。或る家に行つてみるとその蓄えたものは頗る豐富で米や魚が一面にある。紅衣の人は一人の婦人に向つて曰つた。係好好（滿洲語で）この四人の者をよくもてなしてやりなさい。かう言ひ置いて私と別れた。その時にはもう日は暮れてゐた。私の妻の弟は兵卒のためにさらはれて行つて生死がわからなくなつた。妻はこれを悲しむことが特別に甚しかつた。が、しばらくして魚や飯を持ち出して私に食べさせた。私の家は洪の住家とは遠くない。私はその魚や飯を持つて行つて兄に食べさせたが、兄の喉はそれをのみ込むことも出來ない。私は兄の髪を拭つたり血を洗つたりしたが、私の心臓は刀でたち割られるやうな氣がした。是日は刀を用ゐさせなくなるといふ噂を聞いたので、皆々いくらか心を安んじた。

明る日は五月朔日で、勢はそれほどひどくなかつたけれども、それでもまた殺掠をしなくなるなどといふ事はない。又同時に富豪や大家は一軒殘らず屋さがしをし、子女の十餘歳以上は奪ひ掠められて逃れたものは殆どない。この日興平伯も揚州城に入つて來られたが、布の絲端、米の碎屑も暴虐なもののために奪はれ盡して、見るかげもないこの無殘さは伯を奉迎することも出來ないのであつた。

二日には、聞傳へによれば、府、道、州、縣には早くも官吏を置き人民保護の札を隅なく與へて庶民をよく諭して驚く必要をなからしめ、又、寺寺の僧侶たちに諭して積上げた屍を火葬させたが、寺院のなかへ、この騒ぎに乘じて匿し込んであつた婦女も亦少くなかつた。火葬した死體を數へ査べて記錄に載せた數は八十餘萬であつた。井に落ちたり、川に身を投げたり、家に閉籠つてゐて焚けたり、又自ら縊れたりした死者はこの數のなかには加はつてゐないのである。擄へられた者も亦この以外である。

三日は揚示をかかげて施米をした。私は洪嫗と一緒に缺口關に行つて米を買ひ受けた。この米といふのは督鎮の用意してゐた軍用の糧食であつたが、邱陵のごとく積重ねた數千俵の米が、見る間に洗ふがごとく消えてしまつた。往き歸りの人々と言へば負傷者で、みな頭が焦げたり、額が爛れたり、臂や脛が折れ傷ついたり、刀の痕が顔中一面だつたり、さながら蠟淚のたれた蠟燭のやうであつた。米を受取る時には親

友とても遠慮はし合はない。強い者は貰つて歸つてはまたやつてくる。老弱や重傷の者は一日中待つても一升の米が手に入らないのだ。

四日、天氣が晴れ烈しい日が蒸せ燻して死體の臭が人の鼻を襲うた。前後左右到るところに燒き焚かれて、その煙はこもつて霧の如く腥さは數十里にまで感じ渡つた。是の日私は棉と人骨とを燒いて灰にし、それで兄の瘡の療治をしようとした。兄は涙をこぼしてうなづいたばかりで、聲は出せなかつた。

五日、邊鄙な土地へ落延びてゐた市民が幾らか歸つて、互に逢うてはそれぞれただ涙が出て、一言も口を利くものはなかつた。私たち五人は幾分か蘇生の思はしたが、まだ家のなかに落つける氣にもなれないので、夜明けに起きて早い食事をすると野邊に出て居ることにし、その身裝はもつぱら未だ今までのとほりに心掛けてゐた。といふのは往來の追剝は一日に數十人を下らない。刃物こそ持たないが、それぞれ杖や棒で嚇しては人の財物を奪ふのだから、毎日杖の下で命をおとす者もあり、それが一たび婦女に出會すと、今までのごとく肆に捉へ劫し、殆んど滿洲の清兵であるか、守備兵であるか、反謀民であるか判らないのであつた。この日わが長兄は傷が重く刀瘡が裂けつぶれてそのために死んだ。悲しい、口には言ひ現せない。憶へば私が初めこの難に遭うた時には、兄弟嫂姪姉子などの親しい者は八人であつたが、今はたつた三人が生き殘つた。それも妻の弟や妻の姨などは數へてはゐないのだ。

四月の二十五日に起つて五月五日に止まつたのであるが、その間にわが身が自ら歷て來たこと、わが目が直接に睹たところであるから之を漫然と記した。遠方の風聞は少しも之に載せない。後の人が運よくも太平の世に生れて無事の福を享け、その身に些の憂き目をも悟り覺えない人々が之を見たならば警め惕るべきを思つてくれるだらうかとの積なのである。

老青年

一

御手紙ありがたう拜見致しました。漢口の方は如何で御座りましたか。私達五人は元氣で居ります。美子、三馬二、麗子は毎日學校に行つてゐます。御安心下され。

お父さまからのお金はまだつきません。そのお金を一日も早くまつて居ります。今まではお小使が一つもありませんでしたから、よその毛絲を編んでお小使にして居りました。又前の山本さんのをばさんに色々お世話になつて居ります。一日も早く上海に歸れることをお願ひ致します。

お父さんが上海へお歸りになつてからは、中野のをばさんも、田島のをぢさんも、少しもお賴みを聞いて下さりませんし、買物はみな現金でなければ賣つてくれません。まことにこまります。お米を言ひに行きましたら中野の方から止めてあるので持つて來ませんでした。その日、夜の御飯をみなたべませんでした。私は泣いて居りました。前のをばさんが親切にして下さりますのでお米を一升いただきました。小さな子供が可愛さうでなりません。今はたゞお金を待つばかりで御座ります。毎日苦しい日を暮して居ります。

それに中野の人達や田島のをぢさんも私にはかたきであります。手紙に書くことの出來ないほど色々の事を言はれて居ります。

三馬二の靴は小さくてはいりません。大鳥の靴も御座りません。

私もこの頃少し顏がはれて夜ねむることが出來ません。お父さんどうぞ私をおゆるし下さりませ。母が來て居ります。お父さんのお心の内はぢゆうぶんおさつし致しますが、私としてはどうすることも出來ません。私の心も御さつし下されて私を御ゆるし下さりませ。

早く上海へ歸れますやうお願ひ致します。

お正月が近づきます。お身お大切に祈り上げます。

來年は十七になる滿子からのこの手紙をポケットに入れて、山野は勿論、心當りは一軒のこらず歩いた。直情徑行で

議論などでは一歩も後へ引かぬ山野は、しかし、金を借りる段になると實に内氣だつた。師走の風に吹きつあらされ水ばなをすゝり上げながら山野は、娘の手紙を悲しいと思つた。けれどもその手紙が實によく書けてゐるのには滿足であつた。しかしまた、小娘にそんな哀切な手紙を書かせるといふのも身に餘る苦勞の果ての早熟がさせるのだと思ふと、滿足は再び苦痛に逆戻りした。よその毛絲を編んでゐるといふ滿子のかじかんだ手が、あぢきなく暮れやすい夕暗のなかで彼の目に浮んだ。

「畜生！」

山野は舌鼓をうつて心のなかで罵つた。それは彼が歸つてからはなに一つ面倒を見てはくれぬといふ身内に對する憤りであるやうに思へた。「中野の人達や田島のをぢさんも私にはかたきであります」彼は滿子の文句を思ひ出してゐたのであつた。けれどもこの憤りもだんだん掘り下げて行くと結局自分のところへ歸つて來るやうに思へた。

どうしてもどうしても金の要ることだ金が出來ずば子供ら飢ゆる
子等置きて歸れば子供米なくて食はで居たりと手紙來りぬ
金借りる望は駄目とあきらめて突きさした煙草に火をつけて立つ
ただそれと打ち明け難き戀のごと金を借りるに惱むものかな
九分までのあきらめに居て悲しくも一分の望み白きベル押す
惡人であれば金の出來ること過去に幾らもありたるものを
惡人になれぬことが誇りにや悲しみにやと高く唱はん
クリスマスの花屋の花は美ししもの貧しくも眺めて行かん
一番に尊かりける我がものがありやなしやと疑ふ此頃
消えにける炭團の如く姿のみ殘して去せしわが心かも

「ざま見ろ」と鏡の中の我を見て罵りたくもなりし我かな

金はなかなか出來なかつたが、その幾日かのうちに歌はいくつか出來た。巧いかまづいかを問題にして詠む歌ではないのだ。やれ文法が違ふの、言葉が粗雜のと、氣取つたネタイをつけた若い奴等が、「たらちねの」だとか「けるかも」だとかいひさへすれば言葉が洗練されたいい歌ででもありさうな顔をしてゐるのを山野はいつも腹立たしく思つてゐた。山上憶良が今生きてゐれば俺と同じ歌を作るのだ、さう言ひ返しては、ただ出まかせに吐き出して人の意嚮は知らず、山野

自らは年久しく慰められて來た。

山野は最後に石田を訪れた。年來の友人で、それに年配も稍々外の連中より近い上に、相手が妻も子もないボヘミアンだけに山野も石田には話しやすかつた。それだけに今までにも度々さういふ相談を持ちかけたこともあつたし、またさういふ相手だから石田とても餘裕がたつぷりある身分でもない。けれども、山野はもう石田にでも話さずにはゐられなくなつたのである。山野がどもりながらの手短な説明と一緒に取り出してさしつけた滿子の手紙を、石田は讀み終ると、十弗貸さうといつた。

「この手紙には、なけなしの金を十弗出す値うちはあるからね。あんまり子供にも苦勞させん方がいいぜ」

「そ、そ、そ、そんなくだらん事をこの場合きかさなくとも、分つてゐるぢやないか」

「細君、やつぱり、大阪まで子供の後を慕うて行つたと見えるね」

「畜生奴、いつまでも餘計な眞似をするんだ」

氣の弱い山野はそれを隱さうとしていつも荒々しい言葉をいふが、さういふ時にこそ彼は一番やさしい心を動かしてゐた。殊に山野の子供達に對する愛情は最も深いものであつた。その山野が、しかし、細君にばかりどうしてあんなに氣が強いのだか石田には分らなかつた。いつか一度聞いて見ようとも思つてゐたが、人の言出しもしない事をわざわざ改まつて訊く程の石田でもなかつた。それに自尊心の高い山野ではあるが、しかし直情の人である彼のことだから、深い事情でもあるのなら自然と分らずにはゐないのだから、彼が細君を嫌ふのは要するにやつぱり彼の生活を理解しない妻に對する憤りなのであらうが、もう五十にもなつて、子供の五人まである古女房に理解をもへちまをも要求する山野が、石田には面白かつた。さうして誰が何んといつても妥協しようとしないところに山野の面目はあるが氣の毒なのは子供達であるこの機會にそれを言ひ出さうと思つたのだが、金を借せる序に意見をするなどといふことは石田の氣質にはなかつた。

「君、西鶴は偉い。俺は感心した」

突然山野はさう言ひ出した。山野が時折りひどく誰かに感心するのは今に始まらないが、それが西鶴であつたのは石田には思ひがけなかつた。

「何んだつてそんな古くさいものに感心したんだね、今更」

「漢江へ行く船のなかで讀んだのだ。ポケットに這入るやうな手ごろなのがあつたので、本屋に頼んで借りたのだ。面白いので讀んでゐるうちに汚くして了つた。もう返したつて賣り物にはなるまい。さうだ。あれも金を拂はなけや……」山野はちよつとさう獨り言の一句を挿んで、それから再び石田に呼びかけた。「君は、一體、讀んだことがあるか」

「少しは讀んだよ。何んだい君のいふのは」

「萬の文反古といふ奴のなかの京にも思ふやうなる事なしといふのだがね」

「萬の文反古は西鶴ぢやないといふ說があるよ」

「そんな詮索はどうでもよろしい。面白ければいいではないか」

そこで山野は訥々と、手紙の形を取つたこの短篇の筋を話し出すのであつた。十八年前故郷の仙臺から、悋氣深い妻を置き去りに逃げ出した男が、昔の友達に寄せたその手紙には、十七年の間は二十三人の女房を持替へて、少しは持合せてゐた金銀も一切、祝言事に遣ひ込み今では手と身とばかりになつて了つて、も早や女房を持つ力もなく、落ぶれて都ながら櫻も見ず夕涼みにも行かず、松茸も食はず、雪のうちの鰒汁も知らず、ただ鳥羽に歸る車の音を聞いて、ここも都の片ほとりであつたかと氣づくばかりの身の上であつた。その男が、どこか知らに不滿足無しには存在しない女といふものを、今迄の女達で充分承知をしながら、それでも十八年の年月を故郷で待つてゐる筈の女房のもとへも、歸つて見ようといふ氣にもならぬから、彼女には一生歸らぬものと諦めてくれるやうにと、友達を通じて申しやつてゐるのである。

「つまりは」石田は山野のまだ續きさうな話を引き取つて言つた。「女ずきの女嫌ひとでもいふ所が、君の同感をそそつた譯けだね。何から何まで氣に入る女がありさうだなんて、そんな夢を見るのがそもそもの間違ひさ。取り柄が一つあればいいんだよ」

「ところが取り柄は何處に一つも無いのだ。みんな鍍金だからすぐに地金が剝げて了ふんだ」

「その鍍金は、君のやうな男が勝手に鍍金してやるんだからね。自分が着せた着物を自分で引き剝すんだよ。女こそいゝ迷惑さ。女の惡口をいふのは女好きに限るよ。俺は女の惡口は一ことも云つた覺えはない。その代り女房なんてものは持つたことはないんだからね。女を欲しければ買ひに行くに限る。賣り物だからいつも痼は隱してあるといふ譯けさ」

「その代りそんなことをしてゐて、とても女の眞實の姿を見るなんてことは出來ないぢやないか」

「眞實が好きなら味の苦い所を賞美するさ。そんなくだらん話はもう止めてそれぢや十弗持つて行くかね」

石田は立つて行つて押入れに放り込んであつた洋服の上着のポケットから中南銀行の札を一枚取り出して渡すと、山野は受け取りながら唯一こと「や」と云つた。言葉とも聲ともつかんこの曖昧な音のなかに山野は充分の感謝を籠めてゐたのである。感謝の辭を述べることなどには山野の唇は不手際に出來てゐた。山野は十弗の紙幣をポケットへ藏めようとしながらいつた。

「君、これは君が滿子に貸してくれた筈だつたが、此のうち

で花彫半斤分だけ僕に遣はしてくれよ。酒ぐらゐは飲まずにや居られんからね。」

「君の手に持てば君の金だもの好きなやうにするがいいが、老酒半斤位なら僕だつておごるぜ。さうだ、着替へる間ちよつと待ち給へ僕も出かけるから」

石田の家の中は晝でも電燈をともす程暗かつたし、それに山野の心持はいつも夜のやうに悲しかつたが、外へ出て見るとまだ日が暮れたばかりであつた。彼等はパブリックガーデンを過ぎた。プラタナスの葉はすつかり落ちて了つてゐた。暮色の迫つた中空に對岸の浦東のドックから煙が立つて遠い鐵槌の音が寒さうに微かに響いてゐたのが止んだ。ジャンクの帆が黑い影を水の上に落して行く。大馬路の方の門から這入つて來た三人連の女達が彼等の前を斜に通り過ぎたが、この女達の重いあくどい化粧の臭ひが彼等の鼻に殘つた。默つてこの妖しい風俗の女達を見送つてゐた石田がこの時突然口を開いた。

「君、子供といふものは可愛いかね」

山野はこの突然な分りきつた質問を發した相手の顏を暗の中で驗すやうに一目見て、力を込めて云つた。

「可愛いさ、それや可愛いさ。なぜ、そんなことをきくんだ」

「僕にも子供があるからさ」

「ホホー」山野は口を尖がらして一種特有の感嘆詞を發した。「これは初耳だな。どうしてまた……」

「ハハハ、まだあんまり誰にも話したことはないがね。ここへ來てから五六年もたたんうちだつたからもうかれこれ十五年にはなる。僕は誰も相手にしないやうな支那の女と妙なことで關係をして了つてね。そいつが君、子供を生んで了つたんだよ。さうなると僕はもう一そう我慢がならんので、たうとうその女に寄りつかなくなつたのだが、僕の女は金には困るし、子供は持ち扱ふといふので、女の子だつたが何んでも十五弗かそこらで賣つて了つたさうだよ。呑氣なもので、女からは子供はもう賣つて了つて心配することは無くなつたからまた元通りになつてくれ、なんて云つてよこしたりしたものだ。……時々僕はへんな空想をしてね、そいつが今ではもう十五六にもなつて、ああいふ連中の中へでも這入つてゐやしないか、などと馬鹿馬鹿しい。」

石田は木立の路のなかへ消えて行く例の三人連の女の黑い後影を顎でしやくつて見せた。

「ホホ——」山野は再び特有の感嘆詞を投げたが別にそれ以上何んとも問ひはしなかつた。

四馬路の店店は、クリスマスデコレーションで輝いてゐた。玄茂源といふ酒家の樓上には酒客が一杯であつた。さうして彼等を坐らせる餘地もなかつた。やつと立ち上つた客の後の、食ひ荒した蟹の殼を積み上げたテーブルに彼等は對

座した。爆魚、蚶子、菜茶蚤の小皿ものの外に蟹の雌ばかり二つ煮させた。酒を汲み交しながら石田は山野に云つた。

「もう二週間も前のことだが、猪股の所へ寄つた序でにちよつと覗いて見たら隣の例の女は、いまだに單衣と浴衣とを重ね着してゐたつけが、君あれも何んとかしてやつたらいいぢやないか」

「實にだらしのない奴だ。あんなぐうたら女の話はよせ。切角の生一本の紹興酒がまづくなるよ」

「だらしがないつて、君がちやんとしてやらないからぢやないか」

「ちやんとも何もない。あんな女には何もしてやらないでもよろしい。また俺には出來もしない」

それがまるで石田のせゐででもあるかのやうな口振りなので、石田は思はず笑つた。

半斤入りの酒器を四本並べてその大部分は山野が平げたのであつた。八時を過ぎるとお祭のやうに賑であつたここの客たちもいつの間にか少くなつた。陶然とした山野と別に醉つた風はないが顔だけは眞赤になつた石田とはそこの階段を下りると今度は青蓮閣に登つた。この茶館も玄茂源に劣らぬ馬鹿馬鹿しい賑ひであつた。

「全く、亡國の賑ひだ」山野は云つた。その雜鬧のなかをケバケバしい娼婦たちが重い香を發散させながらゆるやかな目つかひで右往左往しては遊子を漁つてゐるのである。ここはかういふ娼婦たちの市場として有名な場所なのである。

「一つよく氣をつけて君の娘らしいのを索がすのだね」

山野がそんな冗談をいふと、石田はただハハハと空虚な然し愉快げな聲を上げた。彼等は茶を飲んでぢきにこの家から出た。

「猪股の所へ一つ行つて見ようか」

街を出ると山野がさう云ひ出した。醉拂つた山野が女の所へ行き度くなつたのだなと石田は思ひながら兎も角も賛成した。彼等は醉つた頰を風に吹かせながらよろめいて歩いた。

「助平で、剛情で、變屈で、……」

山野は不意に大きな聲で調子をつけて云ひ出した。行人がこの東洋人（トンヤンレン）の叫び聲に振り返つた程であつた。山野はそれに氣がついたのか急に聲をひそめて云ひ足した。

「理窟には敗けぬ、頭を下げぬ、ねえ、石田君、これではどうも出世をせん筈ぢや」

「そこへ持つて來て詩人と來てゐる」

石田は答へた。

「京にも思ふやうなることなしぢや。」

「上海にも思ふやうなることなしか」

「日の下には思ふやうなることなしぢや」

石田は生れながらの小聲であり、そこへ山野は聲をひそめたものだから、彼等はまるで何か重大な相談事のひそひそ話でもあるかの如くそんなことを云ひ合ひながら歩いてゐた。

二

山野も亦、人生を戰さだと思つて生きてゐる人人の一人であつた。彼は貧乏とも戰はなければならんし、また異性とも戰はなければならなかつた。この絶え間のない戰の最中で、彼は歌を作り句を詠みまた文章を書いた。それで名を成さうなどと云ふ子供らしい野心はいつの間にか磨滅して了つた今日でも、彼は依然として歌ふこと——といふよりも怒鳴ることを止めない。さうして彼の歌も彼の句も五十を越した今日でも、青年のやうに若若しい。歌ふことは彼に取つて必要であり本能であつた。さうしてそれに依つて彼は慰められた。かういふ惠みを與へられてゐる彼は同時に普通の人人からは理解されない異人種としての烙印を捺されてゐた。さうしてこの烙印は女達に取つては最も分りにくい印であつた。彼は決して幸福ではなかつた。然しその幸福でもない人生を彼は何人よりも愛してゐた。彼の誰も認める人のない作品集はその理由に依つて、特別な魅力を持つてゐた。それがどうして人人に知られないかといふのは、人人は藝術といふものを花屋がこしらへた細工のいい花束でなければならんと考へてゐたからである。けれども山野の作品は子供がむしり取つてくつつけ合した雜草の花のでこぼこな束だつた。さういふものは藝術の領域へは入れられないといふのが、教養のある物の分つた人の考へといふものであるらしい。山野は自分で教養のないことや細工の手際の惡いことは充分に承知し切つて偉い人人は敬し、名も無い自分を卑下して、それでも自分の感じたことは感じた通りに言はなければいけないし、また誰しも自分の出來ることより外には出來ないのだと決めてゐるから、彼は心配することなしに歌つたり書いたりした。長い年月の間かういふことをして、人の認めもしないことを續けてゐるのを人人は嘲つてゐる。また自分一人で樂しむことならば別にそれを人に見せる爲めに、全くのなけなしの金を搔き集めてそんなものを本なぞにする必要はない と人人は思つてゐる。けれども言葉といふものはその本質の中に人にきいて貰ひたいといふ性質を持つてゐるやうに、文學もまたその通りなのである。彼は理窟は分らなかつたけれども兎も角も機會ある毎に彼の作品を人にも見せ度かつた。見えや外聞をいふやうな彼ならそんなものを書いてそれを求めるよりも、藥賣りを止めた方がよかつたのだ。

運河から運河へ船を雇うて、上海近郷の所所の田舍町へ、寶丹だの千金丹だの賣藥の行商を考へついたのも、もとより口すぎの必要にかられたのではあるが、それが若し彼の詩情に適したものでなかつたとしたら、決して幾年も續く筈のも

のではなかつた。

それは嘉興に近い新塍鎭、王店鎭、敭城鎭、海鹽縣、鳳家橋、硤石鎭、屠甸寺店、桐鄕縣、雙林鎭、新倉鎭、沈蕩鎭、新篁里、平湖縣などといふ地方であつた。六月七月頃といふ不健康な季節を當てこんで、鄕下（シヤンシヤー）――片田舍の人人を相手に商ひをするのであつた。炎天に照りつけられて歩き廻つて、時にはやつと四十錢や七十錢位にしかならないやうな日もあつたが、成功すれば十圓位にもなることがある。さうして彼は一錢の大蒜、三錢の茄子、四錢の干海老、五錢の燒酎、それから三錢で三の卵などといふ質素な生活をして普段は寧ろづぼらな彼がかういふ旅の間には自分でも不思議に思ふ程けち臭くなつ了つて、子供の爲に買はうと思つた椅子と竹葫蘆（ひさご）との値段がほんの僅ばかり折合はぬのを、思ひ切つて土産に買つてやることさへ諦める。瞼がもう開かなくなつた程ひどく眼を病んでそれでも十錢の眼藥代を出し惜しむ憐な男に、それを與れてやらうといふ氣にさへならない程なのである。さうして八厘で十個の楊梅や一つ八厘の水蜜桃を食つたことを贅澤な間食と考へなければならぬ。さうして蠶の季節で懷加減のいい百姓たちが皆質受けの爲めにその店先で、中には二十元三十元と支拂ふものさへあるのをぼんやりとみとれてゐて、ふと物欲しげだつた自分に苦笑されたりする。四間ほどの筏を百十八もつないで流して來て、その筏の間には船が二三艘も雜り五六人の女に鷄や犬までゐる。この呑氣なものの爲めに、水上の交通は一時絶たれて、午前の商賣の汐時を外すのを怨めしがつて、氣がいら立つたりする。情けないのはかういふ旅路の雨である。濡れしをれたシミツタレた姿で東西に南北に客を漁りに行く風態を、これが一等國民の誇るべき風態かとしみじみ自から惘んでゐる折りから、同じ日本の賣藥を持つた支那人の同業者にあちらでもこちらでも、出會すと、彼等は旅慣れてゐる上に暮し方も上手だし、かけ引きが上手なだけに相手を見ては安くも高くも、濫賣をする。かういふ强敵に出會しては經驗のある商賣ではあるが、先の見込も危いやうな氣がする。さういへば以前には譯けなく十圓ばかりも賣れたやうな土地で一日中駈けずり廻つてやつとそれの半分にも及ばないことなぞ思ひ合されるのであつた。然し厭がる船頭を無理に促して銀河の光の中に帆を上げたり、船がかりした岸の楊（やなぎ）のかげにふと新月を見つけたり、欝欝と繁つた森を浸すばかりに湛（たゝ）へた水や、そこに山鳩の鳴くのを聽きながら彩色を施した塔の五輪に殘月の懸るのを眺めたり、或ひはまた陸に上つて忍草の生ひ繁つた石橋を渡つて荒れ果てた空地や崩壞した土塀の上に自から徑をなした所をまるで中世の支那がその儘にあると思ひながら蟬時雨を聞いたりする時には、彼は、彼の生活が何か幸福なものであるやうな氣持がした。それに毎年同じ場所を數年も歩いてゐるう

ちには、いつもそこで休みなれた田舍茶屋の子供、東洋人（ジヤンヤン）を珍らしがつてぼんやり自分の顏を見つめてゐたその女の子が、いつの間にか少女になつて今は物影からそつと覗いて見ては輕い會釋をするまでに大人になつたのや、或ひはまた少し賑かな田舍町の娼家とも思へる樓上に目につく女がゐて、それが頭痛膏を買つてくれたと覺えてゐるのが、もう色香に衰へを見せて年增になりながらやつぱりそこに居殘つてゐるのや、さういふものを見るにつけても自然の、――分けても夏の自然のいつも新しく生生と盛んなのに對して人間の「時」の過ぎ易いのを感じては、禿げて行く自分の頭の事を考へるのであつた。彼はそれらの折折の日記を樂しんで書き誌してゐるが。

支那の田舍にはまた、そこでなければ決して見られないやうなものが澤山あつた。夜廻りが餘所から來た船をたゝき起して一厘の油錢を請求する習慣。大きな眼を心地よげにつぶつて水に浸つてゐる水牛のそこだけ水から出てゐる顏に、虻のやうな大きな蠅がたかるのをうるさがつて、水牛は顏をすつぽり水の中につけると蠅はその間だけは水面から出た水牛の角に止つて待つてゐて水牛が再び顏を上げると蠅はすぐさまたちまち顏に止る。水牛はそれを何度も繰り返すが蠅もいつでも同じことをする。かういふ人事や自然の些細な事柄。さては又人だかりがしてゐるので見に行くと、廣場に生えた木に大男が五六人も太い鎖で縛りつけられて、巡査の駐在所になつてゐる廟の二階では喇叭を無暗と吹いてゐるといふ强盜を仕置にする有樣。情夫の爲めに本夫に毒を飲ました女。しかしその夫は佛の助で藥を吐いたのを、女は今度は刄物を持つて首を突いた。夫は治療を受けに醫者に連れられて來たし、女は縛られてあつた。かう云ふ場合夫は女を殺して了はうと賣つて了はうと勝手だと云ふので、群集の半分は殺して了へといふし、半分は賣つて了へといふ。「わたし思ひます殺して了ふ仕方ない。賣つて金にする、相方（あいかた）も宜しい」といふのが才林の判斷であつた。果して賣つてしまつたか。殺したか……。

才林といふのは山野に取つては、此の上もない得難い從僕であつた。從僕といふよりも共同に働いてくれる友達と云はなければなるまい。才林の方でも彼を主人といふよりも一個の老朋友（ロウパンユウ）と思つてゐる。彼が最初に才林を知つたのは十年ばかり前嘉興で偶然雇入れたのであるが、この文字を知らぬボーイは支那人には珍らしい正直な人物なのを見込んで、彼はそれ上海に連れて歸り、日本人仲間にボーイ働きの周旋口をさがしてやつた。その勤め口が駄目になると才林は山野の所へまた歸つて來る。山野はまたそのうちに新らしい仕事の口を索してやるといふ風であつたが、才林は貧乏人でなければ決して示せないやうな、美しい人情を山野に見せたことがあ

た。それは六七年前であつたが、山野が困窮の極にゐるのを見兼ねて、この支那人は活動寫眞――一錢銅貨を投げると自働する覗きカラクリを持つて一ヶ月餘りも田舍廻りをして、その結果九弗の金を儲け殘し、彼自身は決して一文も懷にせず、山野の前にその金を積んで渡したことがあつた。活動寫眞こそ持つては行かぬが賣藥で、田舍廻りがどれ程困難かといふことを知つてゐる山野に取つては、この九弗は金額以外にどれだけ嬉しかつたか分らない。才林は姑蘇の娘々と纔仲になつて子供までである家庭を作つてゐるが、季節毎にきつと山野を思ひ出して、今でも送り物を絶やさない。この間の月見にも月見の饅頭をくれたが、正月になつたらまた支那餅をくれるだらう。あれこそ惠まれた男である。

賣藥行商の商賣も年毎に以前程賣れなくなつた所へ、國內の動亂がたうとう彼の馴染の地方にまで及んで來て、彼は夏になつても、もう商ひにも出かけることが出來なくなつた。あれはいゝ商賣だつたんだがと、山野は今でもさう回想する。賣藥に較べると正月に賑かな蘇州へ、上海ではあり振れた日本の玩具を持つて行つたのは、全くの失敗で、巧く行けば年中行事にしやうと考へてゐた當てもはづれて了つた。持つて行つた玩具の飛行機がまるで飛ばなかつたのは、をかしくもあつたし悲慘でもあつた。しかしその悲慘は笑ひながら文章に書くことも出來た。悲慘といへばもつと悲慘なことはいくらもあつた。初めて內地から支那へ飛び出して來て、漢口の屠牛所で血のしたたつてゐる牛の生皮を擔いだ頃のことを山野ははつきりと思ひ出す。しかしその當時の彼が持ち運んでゐるその荷物が、なまなかの代物でなかつた所に却つて何か面白味をさへ――詩的なやうな氣持ちをさへ感じたものであつた。それはその後雇はれた鷄卵の會社の卵計算係りよりは、ずつと面白味のある職業であつたやうにさへ思へないではない。その卵會社では仲間とも上役とも激しい口喧嘩をして、三月とは經たぬうちに飛び出して了つた。

若しあの時大阪で巡査の試驗に合格してゐたならば、彼の生活はどうであつたらう。一人の紳士風な年配の男が、受驗者の溜りで彼の顏を見るといきなり近づいておじぎをしながら、試驗場で何卒自分に敎へてくれと懇願したものだ。少しも自信がないと山野が云つても、その男はきき入れなかつた。さうして山野の側に坐つて山野の答案を盜み見しながらその男は、試驗にはパスしたのだ。山野を訪ねて年配の男が祝酒をおごらうと云ひ出した時には、山野は呆然としたものだ。なぜかといふに、彼自身は落第していたからである。敎へた男が不合格で敎はつた男が合格だといふところを見ると合格と不合格との差はほんの一線であつたと見える。さうすれば山野だつて、必ずしも巡査になれないのではなかつたかも知れない。先の見込のない文學雜誌の校正係りになつたのが彼の一生の踏み出しであつたが。十七の時に飛び出した故鄕の島では、二人しかない兄弟の兄はもう死んで了つて、生き殘つた嫂はささやかな荒物屋を營んで、自分自身の家に家賃を支拂つてゐるといふ奇妙な有樣だ。その嫂のこと。大阪に預けて來た子供達のこと。

山野はほろ醉ひの頭の中で雜然と自分の過去の生活を逆上つて考へたのであつたが、子供達のことに思ひ及ぶと酒がさめるやうな氣がした。いつも新しい世界を開拓して、そこで生生とした道を見出し、どんな苦しい中ででも生ることは樂しくないことはないと、結局考へる山野であつたが、さういふ放浪者魂はいつの間にか山野のなかで亡びて了つたやうな氣がする。ぢぢむさい生活を。口喧しい古女房をたたき出して了つて、子供等は身內に預けて、一人になればまた生活の道も拓けるものと考へたのに、遠くにやつた子供のことが近くにゐるよりもひしひしと身に迫る。金を儲けることだけを人生と心得て、夫の人生の伴侶となるどころか、家の中にゐて內部の敵であつた女房が、こちらにゐる間もうるさく自分の留守をつけねらつては子供等の側に寄りつくのを罵つたり毆つたり、最後には貴樣が出て行かなければ俺が出るとまで言ひ、言ふばかりかそれを實行してたうとう追つ拂つたと思つたものが、いつの間にか海を越えて大阪くんだりまで、子供等に影のやうに隨いて行つてゐる。それを考へると、變に胸が苦しいやうな氣持がする。かういふ感情をこれ程、强く味ふのも年を取つたからであるかも知れぬ。凡ての健全なと稱する人人のなかに、放浪者魂が眠つてゐるやうに放浪者であることを喜んで認めてゐるこの自分のなかにも家畜のやうな普通人の魂が眠つてゐて、年取つて衰へたのにつけ込んでそいつがぬつくり浮き上らうとしてゐるらしい。人生の人並みの幸福なんていふものは古女房と一緒にとつくに吐出して了つた自分ではなかつたか。

山野はこんなことを自問自答しながら彼と一緒に歩いてゐる石田に氣がついた。石田もまた放浪者だつた。高等學校時代に失戀をしたといふので、長崎から家鄕には手紙一本、ただ海外へ行く積りだとのみ言ひやつたまま、この土地へ來て了つて石田。聽けばそれにも賣つて了つた子供があるといふ。そんなことをひよつくり口に出して話す時には、石田も人並の魂に脅かされるものと見える。猪股はどうだらう。相當の商家の養子を飛び出して、廣東で石炭の荷上げ人足をした男だ。おとなしい彼は、人足でかせぎ貯めたその金でこゝへ漂つて來たと思つたら、支那の女を妻にして南京の桃の林の中で羨ましい事をやらかしてゐると思つたが、やつぱり放浪者だつた――一年とは續かなかつた。それにしてもその彼等にも、こんな慚愧とも後悔ともつかない感情がこみ上げるだらうか。

「ねえ、石田君。われわれのやうな人種はいつでも何處でも、生活の道を見出すものなのだ。さうして愚痴を言ひながらも、數奇な生活を自慢するものなんだ。ねえ、さうだらう。」

石田には山野がつけ景氣でそんなことを言出したとは氣づかなかつた。今に何か山野らしい奇矯な意見が出るものと思つてゐたのが、不意に自分の名を呼びかけられてちよつと立止まつて相手の顔を見上げた石田は、つまらなさうな生返事をし、彼等は再び默りつゝ路次に曲つた。きたならしい支那人長屋の一つの前に二人は同時に立止ると窓を見上げた。窓は暗かつた。石田は書生のやうに聲を上げて叫んだ。

「猪股君！居るか」

顔が一つ窓から現れた。それは彼等が立ち止つてゐた家の隣の窓だつた。

石田と山野とは默つて二三間歩くと隣の家に這入つた。石田は上手な支那語で影も見えないそこの家主に聲をかけながら、彼等はものなれた調子で暗の中に急に突つ立つた階段を手さぐりに二階へ上つて行つた。彼等の足音をききつけて階上の男は豆ランプを持つて彼等の足下を照らす爲めに出て來た。

この純然たる支那家屋の二階は、無論天井などはなく、土足で歩く床のある八疊程の部屋に、たつた三疊だけ日本風の疊が敷いてあつた。その上にちよこんとひとり坐つてゐた女は、石田や山野の來たのを見ても別に歡迎するらしい表情も言葉も出さなかつた。部屋の唯一の家具である支那風の卓子は薪に適當なものであつたが、それには蒲團がたたんだとも丸めたともつかぬ形で積み上げられ、卓子の側にはこれも名ばかりの腰掛がたつた一つだけ備はつてゐた。猪股は手に持つてゐた豆ランプを窓の椽に置いた序に、その腰掛を占領して了つたものだから石田と山野とは女のゐる疊の端へ、靴は脱がぬ足を床へ投げ出して腰を下した。

「何んだ。馬小舍みたやうな」と女が云つたといふのは、甚だ剴切だと石田はいつもそれを思ひ出して可笑しくなるのであつた。——この家は實に山野の妾宅である。

三

泣かすなと言へば守でも雇うてと最ともつともな
妻の言葉かな
我の病む枕邊に來て反物の金吳れと言ふよき妻持
てり
我が幸はよき妻持てる事である幸極まりて男の涙
病み居ても頭の髮をひつ掴み心慰ゆまで擲ぐりつ
けたし
たくましき割木の如きもの持つて擲り伏せたき妻
にあるかな

良妻の展覽會がありとせば一等賞は我れが戴く

蓋破れし行平の粥を食ふ男妻の指輪の光れる前に

かういふ歌を作りながら山野は、彼の女房を呪咀してゐたが、もともと異性崇拜者である彼には、よく知らない女は天使である代りに、接近した女はいつの間にかただの雌に見えて了ふのであつた。彼は友達も誰も知らない中にたうとう妻を追出して了つた。細君は知人の間を訴へて歩き、知人達は山野を說得したけれども山野は頭から取り合はなかつた。細君は近所に間借をして一人でどうやら口すぎをしながら、山野の留守を見計つては子供達に逢ひに行くのであつた。それを山野が見つけて罵り追ひ返すのを、知人達は見兼ねてそれぞれに山野を再び說いて見ても山野は一層頑として受け付けなかつた。さうして山野は外へ出ては、年の若いカフエーの女などをつかまへては醉つて手を握つたり、俺の女房になれ大事にしてやるぞ、などと相手構はず云ふのを、冗談と思つて笑つてゐると案外本氣なのに氣の弱い女などは寧ろ恐をなし、すれつからしたのは、その禿げ頭を御覽なさいよなどときめつけるので山野もやつと我に返つては苦笑せざるを得ないのであつた。しかし、山野の禿げ頭をいひ出す女たちにしたところが山野がもう五十を越した人とは氣付かなかつた。この若々しい感情を持つた中老人は實際、頭の毛こそ薄かつたが四十位にしか見えず、若その氣魄からいふと青年に相違なかつた。かういふ山野の所へ青島の友達から、手紙で一人の女を紹介して來たのであつた。年は三十で殖民地を巡業する劇團に女優をしてゐたのだが、上海で何か口すぎの道はあるまいかといふ話をきくと、山野には三十位だの女優をしてゐただのといふ言葉だけでもう見ぬ戀をするに充分だつた。山野は考へがあると云つてなけなしの財布を傾けて、早速その女に旅費まで送つて呼び寄せたのであつた。山野はその女の爲めに部屋を一つ索した。猪股の住んでゐる長屋續きの隣が山野には適當なものと思はれた。さすがに山野も、子供たちの手前その女を自分の家へ置く事は憚られたのであつた。食ひ詰めてゐる女には何の贅澤をいふ資格もなかつた。それに山野は實際彼に珍しい間は心から親切を盡すのであつた。しかし女の極端なふしだらは間もなく詩人山野を顰蹙せしめずにはゐなかつた。寢床はいつも敷きつ放しだし寢間著も浴衣も區別はなかつたし持つてゐた筈の帶などはどうしたのか無くなつて了つて、何時も細帶一本で暮してゐた。學校なども女學校の三年位は通ひ、近代戲曲のテーマ位は了解するやうな顏をしてゐたのを、眞に受けたのが山野らしい所だと、石田や猪股は最初から笑つてゐた。ぼつぼつ彼自身の夢が醒めかかると、山野には女の荒れすさんだ膚も生活も我慢の出來ぬものになつて來た。その山野の感情を倍加させるものは地金を現し始めた女だつた。山野は一こと

「何んといふざまだ、その身だしなみは」

といふと、女の答はかうであつた――

「へん、身だしなみが聞いてあきれるよ、人を馬小舎のやうな所へぶち込んで置きやがつて、ここで厚化粧でもしてゐれやさぞ似合ふことでせうよ。考へて見るがいいや、人を自由にして置き乍ら小使の五圓と投げ出したことがあるか。一人前の口をきいてゐるよ、この助平親爺がさ」

その憎憎しげな口振りが、然し實感的なといふよりも、寧ろ場末の下手クソな新派の芝居を思はせるのであつた。それが山野には一層我慢がならなかつた。がその位の言ひ草ならまだしも何んでもなかつたけれども、山野が續いて言はうものなら、日本語の中にもかうも品の惡い言葉がそんなにどつさりあり、それをまたよくもかうまで蒐集したものだと思はれる言葉が、この全く馬小舎のやうな部屋中に充滿した。その一語一語の中にその女の魂や生活があるのかと思ふと山野は恐しくなつて部屋から逃げ出すのであつた。彼は猪股の所へ避難をしてから猪股が山野の抽象的な言ひ方には滿足せずに、もつと具體的にその言葉を言はせようとしても山野は言ふことが出來なかつた程であつた。

「女といふものは恐しいもんだ。深酷なものだ。男はどんなに我を忘れても、あんなことを、平氣な面をして、やすやすとはいへん」

山野はどもり乍ら嘆息した。

初めは
女は「只もう感謝します」と言つた
「惠まれて居ます」とも言つた。
私は善人であつた

花の色も咲きながらうつらふ如く
女の感謝も日に日に失せて去つた
今は淡い色さへない白紙となつた
而して本質が鋭く醜く露はれて來た
無智　虚榮　欲求　反抗　罵詈　涙

アア厭だ厭だ
私は兩腕で頭を抱へて家を逃げだした
外に流があつて水が淸い
私の心は踊つた
すぐ樣衣を脫いで流の眞中へ飛び込んだ
冷やかい水晶の溶ろけた如な水が
醜穢に包まれて居た私の體を
淸く頭髮まで淨めてくれた
私は苦悶憤怒愛愁悲嘆から逃れた世界を見た
そして我ながらも尊さを覺ゆる爽快さを感じた
岸に上つた時
脫ぎ捨てて置いた衣が
見るも汚らはしく土の上にべつたりとしてゐるのが眼に入つた
今この爽快な心持に輝いて居る私が
再び此舊衣にさへ觸るることを厭うた
私は裸で振魔羅で新しい衣を求めに歩いた

山野は淺ましくなつて、子供たちは內地の親類にあづけ、身一つになつて生活をやりなほさうと決心をしたのであつたが、それでもそんなことを言乍ら然し山野は酒に醉つた揚句などは、やつぱりその女の所へ訪ねて行つて見たりもする。

女もなかなか酒を飲んだ。さうして足も遠くなり金廻りも惡い山野よりも、これも山野に劣らぬ酒豪の猪股をせびつては、この隣人たちは「馬小舎」の中で酒盛をよくやるのであつた。

或日猪股が石田を訪問した。さうして山野の女がこの頃病氣になつて呻つてゐるのでそれを山野に通知して何とかしてやらなければなるまいと言つたが、山野はそれは君が無暗と酒なぞを喰はせるから病氣になつたんだ。俺の知つたことではないとばかり取り合ふ樣子もない。女が賴むから救民病院へ往診を賴んだが病院ではそんな場所柄をきいてか往診は出來ないから患者を連れて來いと云ふが一體どうしたものだらうといふ。女はかうしてゐては死んで了ふから醫者を呼んでくれとあばれ狂ふ。どうしたもんだらう。猪股は石田に謀るのであつた。病院まで行くことも出來ない程の重態かと石田がいふと、決してさうではないが、寢間着と蒲團とより外には一物もないんだから、外へ出ることはならない。さればと云つてその儘捨てて置く譯にも行かぬが、餘り立ち入つた世話をしては山野の感情を害しはしないかなあ、といふのが猪股のいふ所である。仕方があるまいといふので彼等は相談の上で、女には古着屋で寄せ集めて來た着物を卷きつけさして病院へ連れ込んだ。もとより女が云ふ程の大した病氣ではなかつたのだ。

女の病氣が癒つたのを見計つて、石田は山野を促して女と別れさした。山野が女の爲めに內地へ歸る旅費を與へることになつた。山野はくだらない女の爲に馬鹿な金を使はされたと云つて愚痴たらたらであつたし、女はまた助平爺の爲めにさんざん好きなことをされたと最後の毒舌を殘して立ち去つた。山野はその女が立ち去ると間もなく、滿子や美子や三馬二や麗子や大鳥を自分の膝下へ呼び戻したのである。山野の憎んでゐる細君、さうして子供等は父には憚かつて愛してゐる母が、また影のやうに子供等に隨いて來たことは考へるま

でもなかつた。山野の氣質を呑み込んでゐると自から信じてゐる石田は、以前山野の細君が彼に頼んだ時には到低無益と知つて試みなかつたものを、今度は誰にも頼まれないのに、山野に細君を家へ入れることを奬めた。これが絶好の機會で、若しかすると山野自身もそれを望んでゐるかのやうに石田は考へたのであつた。石田が言ひ出した時には、しかし、山野はただ默つて強く首を振つた。

＊　＊　＊　＊

日本から上海へ遊ぶ美術家や文學者などがあると、彼地にも若い藝術愛好家の一群があつてきつと親切に、この種の旅客を歡待し案内してくれる。それ等の青年たちの間にたゞ一人外の人人程ハイカラではなく、年も先づ四十から五十までの間に見える位のしかし頭の禿げた丈の高い人物が雜つてゐて、世界の港であるこの都市を歌ひ切れぬ程よき街だと云つて讃美するのを見るであらう。その人に向つて試に「貴方は何年此の土地にゐますか」と聞くと「三十年程になります」と答へるであらう。朴訥で親切で然し何處かに調子はづれの所がある。彼を評する爲めには好漢といふ言葉が一番適してゐる。さうしてもう三年もしたら六十になると聞いても彼は決して好々爺とは思はぬであらう。それは彼一癖ありげな言説と、それから不思議に輝いてゐる若さとに因る。さうしてこの好漢に對してその外の青年たちは、別に氣を兼ぬることもなく相手をやはり一個の青年として遇してゐるのを見ても不自然を感じない。この人物が卽ち山野である。

石田は青年たちとは別にその土地に在住する同業者といふので、內地からの藝術家を歡待するのであらう。さうした石田は山野とも連れ立つてゐる。旅客が山野といふ人物に好意ある奇異を感じて、若し石田に山野のことを尋ねると石田は答へる。

「あれは不思議な人物です。生れ乍らの詩人です。放浪者の中の放浪者です。彼の書いた土くれといふ本はなかなか立派ですよ」

「あの人は獨身ですか」

「いやいや、もう二十にもなる娘を頭に五人の子供のお父さんですがね。……その細君が嫌で七年の間も別れてゐたものです。さうして誰が何んと云つてもきかなかつたのだが、近頃またその細君、うちへ歸つてゐます。山野も自分の年にでも感ずる所があつたのですかね、何しろいい事には相違ない。何んにしても隨分變つた人物で。

「それで、貴方は奥さんは？」

「僕ですか、いや、妻もなく子もなしですよ」

なかなか俗ばなれのした石田ではあるが、流石に面識の淺い人にまでは、むかし支那少女の情婦が赤ん坊の時に賣つて了つた自分の子供がある話まではしないのである。

作者申す。この作品には所謂モデルがあります。しかしこの作品は無論、事實そのものではないのだから、作者の空想的創造がモデルに累を及ぼすやうな事のないのを希望すると同時に、作中に引用した個性鮮やかな詩歌は、私の作ではなく、別に嚴として作者があることをも一言して置きます。

「風流」論

この文中に、御迷惑にもその名前の出て來る機會を持つすべての今人と古人とにこの談理小品を呈したい。

一、序　說

むづかしい題をつけてゐる。しかし私は斷るまでもなく學者ではない。なまなか、學者のやうな口を利かうとすることは、私にあつては不自然極る。それぢや私は何者で、どんな者のやうに口を利けばいいか。私は知らない。但、私の思想は今度は饒舌的に生れたのだから、私はやはりこれを饒舌で表白することが最も樂である。私は倒くまでも自然に從つて樂であることを愛する——文體に於てすらも。

それにしても、風流といふものは決して饒舌なものぢやない。むしろその反對のものであるらしい。それはまた、風流人にとつては、ただ感ずべきものでこそあれ、考へるべきものぢやないらしい。捕捉しようとすればあとのない香爐の煙であるらしい。さればこそ古來、風流人は風流に就ての片言隻句を述べたことはあつたにしても、仰々しくその本體などを說かなかつたのであらう。然るに、私はといふと、「風流」なるものに就て考へるばかりではなく、更に饒舌をもつてそれが果してどんなものであるかを解かうと企てるのである。風流人は定めし私の無風流を笑ひ或は咎めるであらう。さうして私を無風流漢と呼ぶに相違ない。だから、若し私にして風流人をもつて自任するとしたら、私にも多分、この小論は無いに相違ない。私は風流といふものをそれほどにも消極的なものと思ひ傲してゐる。

だから、もしこの小論に於て私がたとひ風流なるものの正體を見究め得たと假定してみたところで、私が饒舌な風流論を發表するといふこの事實が、やがて、私が風流の徒を以て自認するものでも無ければ、同時に風流なるものを今更に提唱するのでは無いといふことの、雄辯なる證明となりさうである。

——まゝよ、私は風流の徒などでなくつたつてもいい！

言ふまでもなく、私とても現代人である。——唯物史觀といふ言葉も知つてゐる。現實的理想主義といふ言葉も知つてゐる。プラグマチイズムとか、エラン、ヴヰタルとかいふ舶來の言葉さへ聞きかぢつて知つてゐる。いや言葉だけではなく、その言葉の意味をさへかすかではあるかも知れないが感ずることも出來る。現代人であるところの私は、風流などゝいふものを、實際、一言の下に馬鹿にしたやうな氣持ちさへ持つてゐるのである。現代人としての私、コスモポリタンとしての私、それらの私はたしかに風流などを馬鹿げ切つたものと信じてゐる。

しかも私は同時に、風流なるものを無視し去ることが出來ないところの傳統人としての私、日本人としての私を實に屢屢見るのである。時には私は、風流を無視し去らないどころではない。月の夕に花の晨に、寧ろそれが私を蠱惑することをさへ感ずる。——さうだ感ずることがあまりに切であるがために、私は一度もそれを考へたことがなかつた程であつた。

私は、往年、世人が惡魔主義者とか享樂主義者とか彼を呼んでゐるところの現代の文士谷崎潤一郎とまだ親交を結んでゐたころ、居は互に近かつたし、私は彼と日夕相往來したものであつたが、その頃、私は彼と實に頻りにこの風流といふものに就て語り合つたものであつた。我々は互に相手がそれを理解してゐるものと見做し合つたやうな氣持でゐたから、互にそれの本質をどのやうに判斷してゐるかといふやうな點に就ては格別の論議はなかつた。たゞ、我々の身邊に古人の所謂風流といふものが今もなほあることを、さうしてそれは決して西洋の藝術からは感得されない何ものかであるが、それが我々の身に或は胸に或る力を持つて打つといふ事實に就て、谷崎はそれを菜食主義の美食と呼んでしかしそれが人々から青春を奪ひ、人々を消極的なものにするといふので、彼は彼の所謂菜食主義的の藝術の蠱惑に對してひどく怖れを抱いてゐるかのやうであつたのを私は今思ひ出す。私はといふと、私は、別段彼のやうにそれを怖れもしなかつた。彼がそれのことを菜食藝術的美食といふに對して私は假りに月光的恍惚と言つたことをも思ひ出す。やはりその頃、芥川龍之介は谷崎のその菜食藝術に對する怖れを知つて——何れは谷崎からその論を聞いたのであつたらうが——私に言つた。「谷崎のやうに何もあゝ戰慄するにも及ぶまい」と。蓋し、やはり、一言に言へば風流とも呼ぶべきことに就て言つてゐるのである。かく突然私が何故に彼等の名前をこゝに引いたかといふのに、現代人でありながら、一言に風流と言つてしまつても大して間違ひないらしい一つの或るものに魅力を感ずる人々が私より外にも例があるといふことを言ひたかつたのである。若し、それでまだ例に乏しいといふならば、私はいくらでも知つてゐる。「雨瀟瀟」の作者永井荷風が私に思ひ浮ぶ。かの作者の現今の境地を大ざつぱに風流と言つてみて

も大過がなささうではないか。十五年前にこの作者を人々は享樂主義者と呼んだ。またその藝術的生涯の當初にその藝術は少くともその外皮に於ては、最も東洋的でないものであつたことを人々は知つてゐる筈である。更にまた私に思ひ出せるのは、十年前にフューザン會といふ名のもとに集つた一團の美術家たちのうちの或る人々である。それらの人々は當初には西洋の美術のうちでも最も激越な奇矯にまで見えるほどの新運動に應呼する者であつた。然るにその人たちは今日では反つて、我々傳來の風流的所產の一つである南畫なるものの境地を愛し始めてゐるかのやうに見えるではないか。——岸田劉生のごときがその重な人である。

私は澤山の人々の名前を數へた。風流三昧に或る蠱惑を感ずるのは、その理由が何であるかは今しばらく考へないことにして、ともかくもその事實は、現代の藝術家のなかでも決して私ひとりではないことに私は氣づく。もうこれ以上に例を外側に求めることの代りには、私は寧ろ讀者諸子が目を各自の內側に向けてみて、君自身のなかにそんな蠱惑に應ずるやうな何ものかが果してなかつたかどうかを、先づ驗べてみてもらひたいと思ふ。

諸君子に尋ねよう。君は、時あつて折ふし、ふと世情が淡くなつて己に執する心が去つたかのやうに見えたその瞬間に、或る名狀しがたい情調——少くとも私には情調として現はれるが——それを「あゝ、それが古人の所謂さびしをりの氣持であつたらう。ものゝあはれであつたらう」とさう言へばさうかとたとひおぼろげにでも思へるやうな、それを悲しいと言はうには喜ばしく、喜ばしいと呼ばうには悲しみであるやうな、一種かすかな縷々とした奇異な、それによつてしばらくは身も心も潔められるかのやうな恍惚、陶醉、或る場合には靜かながらの情念にさへ似通うた感じを、天地間非情の何物からでも感得した覺えが、君にかつて無かつたか。

——私が今もどかしがつてゐることを君は知つてゐるであらう。全く私の言ひ方はもどかしい。けれども私の言ひ方が惡くつても、そんなことなどにはこだはらないで、若し判りさへするなら、私は君に、「あ！そんな氣持はあつた」と言つて貰ひたい。でないと、私は筆を運びつづけるわけには行かない。——仕方がない。どうしてもそんな氣持は知らないといふ人に向つては、私はもうこれ以上に私のこの一文を讀みつづけないことを乞ふことにしよう。實際、私は、さういふ人に向つては少し惱るのだ。人間のなかには誰しも、たとひそれが常にではないまでも、さうして程度に强弱の差はあつたにしても、私が今言はうとした心持を感じたことがないといふ人は無い筈だと私は思つてゐる。蛙にだつて鳥にだつて、犬にだつてある筈だと私は言つてみたいくらゐだ——だがそれではお伽噺になつてしまふだらう。しかし、人間にならば誰にでもあると言ひきつても大丈夫お伽噺にはならない。私はその心持をそれほど普遍的なものだと思つてゐる。但、その心持は、人々の產れた國の風土や習慣によつて必ず多少は變つた現れをするかも知れない。譬へば同一種類の草花でも、その產地によつていくらかは、或は大に、その色香を異にしてゐるやうなものである。さうして我々日本民族であるものに現はれるあの心持は、きつと似通うたものに相違ないと私は信じてゐる。だから、私は私の信念の上から、私が言はうとした心持は日本人のうちには誰でもが持ち合せてゐて、しかもたとひ堂々めぐりのもどかしさでゞもそれを言はうとすれば、手もなくそれが判つてくれてもいいくらゐなありふれたものゝやうに私は思做してゐる。それだのに「そんなことは知らない」と言つた人があると假定すると、私はその人を、私の下手な表現をわざと許してくれなかつたゞの意地惡だと思はないではゐられない。——それほど、私はそれを人類に普遍的で民族に共通的なものと信じてゐるのである。

そこで、私の筆の無力を恕して私の言ひたい氣持を察して、さて讀み續けようとしてくれる諸子よ。私が「風流」といふものがどんなものだかを說かうとしてまづ言ひたいのは、「あれ」の事だ。折ふしに我々のなか——心のなかでもない體のなかでもない、單に「我々のなか」といふ方が一層適切であると私は思ふが、その我々のなか——をあのやうに微妙に通り過ぎる「あれ」だ。別れた人の美しい影のやうに微妙に……。妙にはかなくしかしそれは喜びに似てゐるまことに奇異な影である——假りに影と呼ばうなら。その影を我我は我々の祖先から傳へたのだ。我々の祖先も亦彼等の祖先から傳へたのであらう。その祖先はそのまた祖先から……それではそれを最初につたへた人は誰だつたか。さうしてなぜまたあんな氣持をだけ傳へたのか。——そんなことを誰が知つてゐるものか。そんなことを知つてゐる人があるくらゐなら、秋の夜の蟲は何故啼くのか、そのうちで草雲雀だけあんな啼き聲を何時から何故に撰んだか。そいつを私はその人に教へてもらひ度いものだ！

たゞ我々にも氣のつくことは今日といふ平面を見渡してそこにほんのかすかに、それと言はなければ氣づかないほどに現れてその存在をさへ疑ひ度いやうな一つの點は、よく見るとそれは截斷面に現れた糸であつて、それは古今といふ立體のなかを通つてゐるところの永い一本の糸であるといふ事實である。かういふ判り切つた事に就ては今更說くまでもなかつたであらう。私はもう一度同じ事を言ひ度いのである。我我の日常生活といふ平面のなかへかすかに一つの點か何かのやうに捉へがたく現れる「あれ」が、人生といふ立體のなかでも亦永い一本の糸であるやうに思へるではないか。ことの

序に私はもう一つ、もう一層比喩的なことを言ひたい、一つの糸が一つの點に見えることがあるやうに一枚の紙が他のものによつて或る狀態で匿された場合には一本の線としてだけ見えることがありはしないだらうか。一つの點が一つの線の或る現れではないとは限らないと私はいふのだ。物にかくされて點としか見えないものが、長さのある何物かであり、長さだけ現れたものが更にそれを覆うてゐるものを取去ると、廣ささへ持つてゐるものであるかも知れない。さうしてこの我々の現實的人生——卽ち或る立體の單なる一截面の上に、點として現れてゐるさま〴〵のものはすべて、單なる點以上の何物かであるのに、それが各地のものと相剋し合つて點としてだけしか現れ得ないのかも知れない。宇宙と名づける立體を人生といふ特定の截り方で截斷し、乃至人生といふ立體を今日といふ特定の截り方で截斷し、それ故に、われ〳〵の今日の人生といふものは無限的宇宙といふものを假想して見る場合、ほんの哀れな斷片であるかも知れない。しかも我々に與へられたものとてはどうやら生憎とこの斷片だけらしい！この纔に與へられた斷片によつてより大きな或物を解かうとして、人間の各自は、各自の生活を最も力强く支配する點を捉へて、その一點を中心として各自の生を其處に開展させる——或は無意識に、或は强烈な意識の下に。さうしてそこにさまざまな思想やさま〴〵な哲學やさま〴〵な宗教や、卽ち時には全く相容れないやうなそれほど種々雜多の生き方が、同じ人間同志のなかに然も時を同じくし所を同じくして發生してゐるのであらう。この意味ではたつた一個の今日のこの世界でさへ實は互に交錯し重複した無數の世界なのである。……そんなことは、しかし今は深入りしてゐるわけにはいかぬ。たゞ、讀者諸子が、あの折ふし我々のなかを通り過ぎる「あれ」を知つてゐて、又、昔の人も「あれ」を感じたらうとだけ認めてもらへればいい。

「あれ」！私がいま子供のやうにしか口を利けないのを讀者諸子は笑つてはいけない。言葉の王と名告る人があつても、その人が眞に賢い人である限りは、我々の民族の詩魂に觸れるあの一種の感情を描くためにならば、多分はきつと口を閉ぢるだらう。事實、我々の祖先のうちの幾多の天才も亦、結局は實に私が今こゝで言語に絕してゐるところの當の「あれ」を、如何にして的確に捕捉し如何にして端的に表現しようかといふその一念のために彼等の生涯を捧げたものである。「あれ」の眞の表現を求めて我々の祖先は端なくも、そこに三十一文字といひ更に十七文字といふ他の民俗のものに比べて最も沈默に近い文學の樣式を見つけ出した。また實體を的確な存在にするための陰影を無視することによつて實體そのものをさへ陰影界のものに化してしまふやうな最も虛無に近い美術の手法を見つけ出した。その詩情がそのやうな表現を要求したからである。沈默と虛無とに近い。これこそ我々の古人の風流的藝術であつた。我々の古人は「あれ」を沈默と虛無とに近いものと解釋したからである。それにしても亦、その風流的藝術に喜んで彼等の命を盡した風流の徒とは、實に「あれ」を感じて「あれ」の喜びの眞實なことをしみ〴〵と感得した人々が、自己の快適な生をそこに見出すと同時に、ほんの瞬間的に通り過ぎるあの、悲愁と一體になつてゐるほどにまで深い喜悅、兩極を一ときに具備してゐる感激、その一瞬こそ宇宙と永久とに繫がつてゐるかと感ずるまでのその眞實の閃光をどうかして永續的なものにしたいといふ切願から、彼等は我々の世俗的生活のなかではほんの物かげに匿され片隅に忘れられてゐるあのおぼつかない一點の「あれ」を、人間生活の中心にまで持出し乃至は「あれ」のあるところへ人間生活の中心點を推移して行つて、さて世俗界に於ては決して日常生活的ではあり得ないところのものを日常生活化しようとしたのである。——とてつもない價値の轉換だ！世俗ではそんなものを生活の數の中へも加へないかも知れないやうな一點を凝視してそれに長さを見出し廣さをまで賦與してその面の上へ、一個の國土を、世界を、建てようとしたのだ。然も、その奇異な安樂境土のなかに、唯その精神を胡蝶のごとく遊ばせるだけでは滿足せずその肉體をさへそこへ住み込ませようと企てたのである。——汚れのない一少女の導きによつて肉體のまゝで天國を經巡つて來たといふフロオレンスの大詩人もものゝ數ではないと言ひたいほどである。言はゞ極端な詩的耽美の日常生活の創始である。彼等はその全生活を擧げてその藝術の花床にしたのである。生活と藝術との一元を疑はなかつた彼等のこのやうな極端な生活創造を見る時、私はそゞろに彼等の徹底的な飛躍を壯んなりと言はざるを得ない。さうしてこの一群の見なれない浪漫主義者たちを愛するのあまり、私は私自身が彼等に伍するかどうかは別としても、彼等が己たちの世界とは別な世界に住んでゐる他の多くの人々のことを「俗」と考へたことの驕慢をさへ好しと言はうと思ふ。全く、そのやうな無茶な詩的耽美の生活創造をした彼等は、その事實そのものによつて世俗に對して無言の挑戰を企てたとも言へる。

それにしても、但、彼等の詩的耽美の日常生活なるものは乞食のそれに隣合つてゐる！彼等の美術なるものは醜怪に隣合つてゐる！彼等の文學なるものは答のない謎語に隣合つてゐる！

然も！更に驚くべきことには、それらのものが、その基調を味解する者にとつては、時には何ものにも變へがたい蠱惑的の力を帶びて迫るではないか。——私自身にとつて言ふならば私の理性と私の意志とはどうやらそれを拒否しなけれ

ばならないと考へる時にも、私の感情は、やゝともすればあの奇異な靜寂的陶醉の世界を私に憧憬させるではないか。

さても、「風流」はどこまで手の込んだ代物だらう！私が風流といふものゝ正體を見たいとあせるのはこの爲めに外ならない。

甚だしく逆說的な恍惚であるこの風流といひ風流的藝術といふものゝ本源を、私は子供のやうな片言（かたこと）で「あれ」だと斷じたことは諸君子も既に御承知である。その「あれ」といふ代りに、學者達はその同じものゝことを「無常感」と呼んでゐる。もし强ひてさういふ言葉で「あれ」を呼ばなければならないならば、私はそれを無常感とだけは呼ばずに「無常美感」といふ造語を許して貰はうと思ふ。然しそれにしてみたところがやつぱり唯「あれ」と呼ぶことゝさう大した差違はないではないか。さうして問題がもうこゝまで來るやうになつては只「あれ」とか「無常美感」とかそんな言葉だけでは濟まされさうにもない。我々は今や、彼等風流の徒がその一點に命をかけて彼等の生を目覺（めざま）しいほど徹底的に開展させたその原動力たる「あれ」を、もう一度はつきりと突き留めて見無ければならない。その無類に畸形な美の第一の祕密はきつとその原動力「あれ」のなかに萠芽を示してゐるに違ひない。その萠芽を彼等はきつと十分に畸形に生長させたのだ。萠芽である時には、さほど畸形とも思はなかつたものを、その生長とゝもにその畸形の角度が自然と、十分注目をうながす程に擴大されたのではないだらうか。

私は「あれ」のことを一度仔細に本質的に考へよう。それから風流の徒がそれに與へたさまゞゝな解釋、その解釋から出たさまゞゝな樣式——つまり風流と風流的藝術とを本質的に考へよう。それの蠱惑に對して我々——いや私自身が、果して身を投じていゝかどうかを考へるのは無論のこと。

二、挿話

唐突であるが、私はこの間、雜誌「新潮」主催の雜談會へ出席した。——この會合は文壇人以外の諸君子は或は御存知ではないかと思ふから說明をするが、これは當代の小說作者たちが毎月、その月々に發表された文藝的制作に對して月竝的雜談を試みる一夕の會合なのである。——もう一度說明をするが小說作者たちが文藝を談ずる一夕の會合などといふと、或は風流らしく聞えるかも知れないが、もしさう思つたならば大へんな間違ひであらう。また事實、別段にさして風流な會合でもない。一たい現代なるものが決して風流でもなければ、小說作者なるものも風流でない。更に會合なるものがまた風流でないと來てゐる。「現代」「小說作者」「會合」この三つのものはそれ自體が各風流ではないところへ、そいつが三つ重つて見れば、別して風流でないことになりさうでは

ないか。與々も誤解して貰つてはならないが私の言ふのは、現代の小說作者何某と何某との會合が無風流だといふのでは決してないことである。飽くまでも「現代」「小說作者」「會合」そのものが風流でないといふのである。そのことも何れは自然とそれを論ずる機會が、この後に出て來ると思ふから、今は詳しくは言はないが、假りに、「現代」——「むかし」、「小說作者」——「詩人」、「會合」——「ひとり」を單に言葉の上で感じてみても何となくそんな氣がしはしないだらうか。——私は今、諸君子と私とが「風流」といふこの一語の語感の上にどれくらゐの共通な感じを持ち合ふことが出來るものかを驗してみたいと思つてこんなことを言つて見たまでゞある。全く共通な、或は共通に近いとして使用してゐる我々の言葉も、時々氣がついてみると互にかなりの違ひを持つて使つてゐることが折々私に氣がつくからである。

それはさて、さつきの「新潮」主催の雜談會であるが、その席上でのこと、話題が室生犀星の作品の品隲から作風の批判とでもいふやうなことになつて、何かの機會で誰かの口からひよつくり「風流」といふ言葉が出たのが事の初まりで、犀星の覘つてゐるところはむかしながらの「さびしをり」だらうと久保田万太郎が言つた時、久米正雄は一說を立てゝ、むかしの風流とは違つてゐるだらう——感覺的なところがあるぢやないかと言つた。それがどうも、むかしの風流には感覺的なところが無かつたかのやうに久米が考へてゐるらしいので私は渺なからず驚いた。何故かといふのに私は風流といふものは古來感覺的なものだと思ひ込んでゐたからである。私は思はず自分と他との見地の違ひにその驚きを洩した時、久米は更に說明をして「古來の正しい風流は意志的なものであつた」といふ說を聞くに及んで、私の驚きは實に大したものであつた。さういふわけでこの格別に風流でもない席上に三十分ばかりは風流論が榮えた。さうしてもと〳〵風流でない席は一そうと無風流になつて來た——換言すれば、私たちは各の意見を主張するのに忙しかつたのである。諸君子の語感をもう一度驗（さ）してみるが、無言のうちに互にうなづき合ふことゝ、言葉澤に自說を申し立てることゝ一體どちらが「風流だらう？「無風流」だらう？——こんなことを言つて、私はこの席上の人々の無風流を咎めようなどゝは夢更思つてゐるのではない。それどころか、この席上、就中最も沒風流だつたのはかく言ふ私自身であつたのだから。事實、私が一番おしやべりだつた。といふのは、この機會に端なくも覘ひ知ることを得た席上の諸家の意見は、この題目に關して口を開いた限りの諸家の意見は、不思議なことに——私にとつて不思議なことに、皆一樣に私のものとはあまりにかけ離れてゐたからである。諸家は、私の管見を——それもごく斷片的にしか言はなかつたが——淺はかな奇を好む說と感じたかも知

れない――いや、事實どうもさうらしいのである。老大家德田秋聲のごときは「達見ではない」と言つて私を最後にたしなめた程である。それにも拘はらず主觀的な私はまた私で、私があたりまへと思ひ込んでゐることが諸家によつてそれほど異說視され、然も私にとつては諸家の說こそなかなか珍らしいかつたのだから一種の奇妙な氣持は今だに――これを書いてゐる今だに殘つてゐる。然も、諸家の說は大體に於て一致點があり、唯私ひとりが別なのだから、これはどうしてもこの場では私の方が異說といふことになる。諸家は私のことを、敢て異を樹てて人を驚かしたと思つたかも知れない。曷んぞ知らん、私はただ普段から思つてゐるだけのことをつい言つただけなのだ。それだけに私にとつては、諸家とかう感じ方が違ふといふことに一種の不幸福を覺えるのを禁じ得ないとともに、私の言つたことは唯いつもの感じだけにすぎなくつて一とほりの考察の後での說でもないだけに、私は、「俗論といふものはいつも多數の人が贊成するものだよ」と言つて濟してゐるわけには行かないやうな氣持があつた。――澤山の人がそれほど奇妙がる私の感じ方、見方を、もう一度自分でも事細かに考へ直してみたいといふ熱情を、この談論の半で私は抱き始めたものだから、それにつけても、しかし、その夜の席上はその同じ題目にいつまでも低迷してゐるわけにも行かなかつたし、またそれほど不意に現はれた諸家の說が私には十分徹し難い如く、私の說とてもさう手輕には諸家に徹しないだらう事にも氣がついたので、私は私の感じ方が諸家に十分解せられないのみか淺薄化されたことを甚だ憾みながらも、私はその場ではより以上には私の「風流」觀を披瀝し盡さなかつた。

私はその席上の諸家とは、風流觀に於ては全く違つた世界に住んでゐたのである。それでは諸家の意見といふのはどういふのか。（新潮三月號「新潮合評會第十回」記事參照）

久米正雄は言ふ――「風流といふ心境はどちらかと言へば意志的なものだ。それを感覺で行けば近代的のデカダンになつて了ふ」「それまでの感覺に到達し得る前に、意志的な鍛錬が必要だ。さうして達成されたものが古來の正しい風流だ」かう久米は「古來の正しい風流」といふものを說いたあとで「人生觀の凝立ではなくつて感覺の自己陶醉である」ものを「新時代の風流」と呼んでゐる「卽ち、それを近代的デカダンと一味相通ずるものとするのであらう。もし近代的デカダンといふ用語に對して久米と私との見解にして同一なるものであり得るなら、私は事實風流の徒といふものと近代的デカダンといふものとを甚だ微妙に相似てゐる一面のあるものと考へてゐるのである――これは後に說く。久米はまた風流といふものに就て「天才流の風流」と「達人的に解釋した風流」といふものを區別して、私たちの見解の相違を

そこに置き、ただ好きに終始して、――自己の一種の感覺に訴へるものにすぎないといふ私の考へ方を久米は假りに「天才流の風流」と呼んだ。さうして私のやうな言ひ方は「風流の極致を、成つた後の形を言つてゐる」ものとした。久米はこの一語によつて、一切のものとは言はないまでも、尠くとも風流に就ては「究極といふものと道程といふものとを區別し、しかもその間に相違のあるものと考へたかのやうに見える。私はこの點に於て久米の說とは甚だ一致しがたいものである。その道程に於て究極を既に含むことが出來なかつたなら、そんな道程を經て何時どうして極致に行くことが出來るだらうか？ 極致などといふものは決して無い。それは一つの理想だからである。――しかしそのどんな刻々の道程をとつてみても、たとひそれが渥味のないものであつたらうとも極致と通ずるものを感ずることがあればこそ、不斷に何ものかの道程にある我々も亦その理想を理想することも出來るのではないか。それ故、風流がもしその道程に於て意志的なものであるならばその究極境、極致も亦、意志的なものであるといふ方が正當ではないだらうか。道程と極致とを肉體と精神とを、生活と藝術とを、表現と內容とを、或は亦平常の談話と改まつた時の文章とを、そんなものをきつかりと區別しようとするのはたしかに一つの迷妄だと私は思つてゐる。しかし、久米は彼の見地によつて極致と道程とを區別したかのやうに見える。それならば先づそれもいい。それから久米は彼一流の溫柔な微笑と一緒に「佐藤君ならばほつておいても風流になる。しかし、みんなさうではないから」とも言つてゐる。私は考へてゐる、風流といふものは本來それを好かないやうな人にとつて、そんなに意志的の努力にしてまで勉めるやうなそんな立派なものだらうか。古人は「世を遁れて風流に遊ぶ」とさへ言つてゐるのである。久米は、彼の豐かな愛嬌から、この際私の名を言つてくれたのだから、私がそれを眞にうけるわけには行かないのだが、私に思ひ出されるのはあの風流の蠱惑をあのやうに恐怖してそれを　けるために寧ろ意志的であらうとした谷崎潤一郎の在る事實である。（一言斷つて置くが、私は谷崎をたとひ畏敬するとしても、彼が決して天才的だと思つた事は今までに曾てない。たゞ詩人的ではあり、浪漫的ではあり、感覺的ではあり、それでゐてなか〳〵世俗的に意志的な人物とは思ふ。それ故、久米の「天才流の風流」によつて私は谷崎を思ひ出すのではない）そこで久米も人によつては意志によらざる風流をも認めていくらゐの考へはあるかも知れない。それでも結論的に彼は述べてゐる――「僕はどうしても風流の心境のなかに意志の力を感ずる」と。さうして久米は、これはどんな論據或は見方があるか是非に說明を得たいのだが「芭蕉の文學は意志の文學だと思ふ」と斷じてゐる。

徳田秋聲は言ふ――「昔の風流は感覚的といふよりも、もつと心的なものだと思ふ。禪修業のやうな努力的な修業であつたと思ふ。今の金持のお茶などとは少し違ふ。」又昔のえらい人の風流は、道樂藝ではなかつた。寧ろ東洋流の宗教的なものだつた。」秋聲は私が感覚的と言つた言葉を解して、私がさも富豪のお道樂と風流とを混同してゐるかの如くに思ひ做して、かういふ啓蒙的な説をもつて教を垂れられたのは、失禮ながら私は些か心外に近い氣持だと申し上げたい、私とても若輩ではあるけれども、それくらゐのことがまんざら解らなくて、風流を論じてゐるのではないつもりだつた。私に言はせれば、その意味を強めるために、その點を敢てかうも説きたい――風流の徒の生涯はお金持のお茶と全く同じことだ。ただその唯一の相異の點は、俗人がその單に道樂と心得てゐるところの、さうして又實際、言葉本來の深い意味に於ての道樂であるところの心持に、その心身を賭しただけである。即ち俗人は片手間のやうに樂しむ。その心持を風流の徒は生涯の唯一のものとしただけである。このたつた一つの點だけこそ最も重大な相異だつた― 私が風流の徒のその徹底的な價値轉換に對する歎賞はすでにこの文の（一）に於て述べてあるから再説はしない。それほどであるから私は、富豪のお茶と眞の風流とを同一視するやうな馬鹿ではないことを認めて貰ふことにして、さて秋聲は、感覚的といふ私の言ひ方を淺いものとし「もつと心的なもの」と言つてゐる。この點とても私は無論、心的であることは承知の上で、その心的といふのは mind に近いか heart に近いかを言はうとして、それが heart に近いことを思ひ、また風流の徒がその心持を日常生活の目に見、鼻に聞き、手に觸れることが出來るところの一切にまで及ぼしたことを考へて、感覚的といふ言葉を用ひたのである。さうして感覚的といふ言葉が意志的といふことゝは相反してゐても、もつと廣い意味の心的なものとは決して何の牴觸をも私は感じないのである。感覚が――いやもつと肉體を聯想させる官能といふ言葉であつてもいい、それが決して心的なものであり得ないと若し誰かゞ言ふならば、一切の藝術、就中、端的に感覚を通してのみ存在し得るところの美術や音樂上の制作には人の心に訴へるところの傑作は絶無であるべき筈だ！ 凡そすべての藝術は、感覚が心的なものである――肉體感が同時に精神感であり得る乃至は精神感が同時に肉體感であり得る事のこの神祕の上に築かれてゐるのである。肉體の恍惚感がやがて精神の恍惚感と交錯することによつてこそ、初めて近代のデカダンの藝術の意味もあつたのである。

私はここで久米の場合にわざと言ひ殘して置いた事、「風流が感覚的なものであるならば近代的のデカダンになつて了ふ」といふ久米の説に答へたいのだが、近代的デカダンの藝術が前述のごとく肉體的恍惚感かやがて同時に精神的恍惚感であり得た時の藝術と解した上で――全くこの解釋は私だけのものではない――、風流といふものをも感覚と見るところの私は、所謂近代のデカダンの徒、ボードレル的精神の青白い情熱と言はれてゐるものと風流の徒の心境とに一味の甚だ相通ずるものを感ずるのである。さうして彼を青白い情熱と呼ぶなら、これを假りに眞白い情熱と呼んで見ようかとも思ふ。但、この二者の相異る點は、どこまでもそれが各、東洋文明の所産と西洋文明の所産とだといふことである――かすかな人間の匂と、强烈な人間の匂と。（何を私が、東洋文明といふか。私は今に章を改めて説く）さうして、デカダンの徒がそこに一種の宗教的暗示を持つてゐるとは言へ結局どこまでも藝術の徒であるやうに、私は風流の徒をも、それが秋聲の言ふが如く「東洋的な宗教的な」何者かであることは認めても、それを「禪修業のやうな努力的な修業」とは感ぜずに、どこまでも彼等を藝術の徒と信じてゐる。藝術のための藝術の徒とさへ言ひたい。その感覚の陶醉が同時に秋聲の所謂「心的」陶醉を兼ね得たところの藝術の徒であり、その藝術的追求はやがて彼等の生活をまで藝術と一致させた。乃至はさせようとした――それは、しかし、意志によつてではない。陶醉的追求である。私は彼等をそれほどの享樂者と見てゐる。

現に我々が目のあたりに見ることの出來る前述の風流的作者永井荷風、或は風流的蠱惑をそれほど戰慄した谷崎潤一郎又今この問題の誘導者となつた室生犀星、或は小田原の閑詩客北原白秋のごとき、それらの人々が風流の眞髓に徹したかどうかは暫くこれを措いて、ともかくも彼等が風流なるものに心を牽かれるらしいことは何人もこれを認めるだらう。更にそれらの人々は我々の時代での感覚的な享樂者的の文藝家であることは誰しも疑はないであらう。してみれば感覚的で享樂的である事は、風流とは何かしら重大な關係のあることが判ると思ふ。「思ひ出すことなど」の筆者である夏目漱石は一代の文人と呼ぶべき人である。私は彼が一代の小説家であつたかどうかは知らない。しかしたしかに一代の文人であつたことだけは疑はない。その夏目漱石のごときもその初期の作品「虞美人草」「草枕」などを見たならば、この人にも感覚的な一面の甚だあつたことを發見するだらう。更にこの人が明治年間の最大の作者として泉鏡花――稀に見る感覚的な作家――を擧げたことは、漱石自身がどれくらゐ感覚的な人であつたかを十分立證すると思ふ。たゞ私の更に知りたいのは、夏目漱石とともに我々の時代の文人の双璧である幸田露伴であるが、私はこの人の風流のなかには感覚的といふよりもより意志的なものを見出しさうである。この人だけは私の數へようとする人のうちの唯一の例外である。そのせゐで

あらうか、私はこの人をたゞ風流の徒とのみは思はずにより哲人的に感ずるのである。さうして風流の徒と東洋的哲人とが微妙に隣り合つてゐる例を見る。

古人芭蕉に就ては私は多くの事實は知らない。又一般にも知られてゐないやうである。この人に就ては私は稿を改めて書いてみる考へもあるから今は細說はしないけれども、私の知つてゐる限りでは彼も亦、その時代の人から或は後世の人から、時に享樂的な性格の人であつたかのやうに見られ、解せられたことを知つてゐる。私は芭蕉の出現があの享樂的な元祿時代であり正風の泉があの世俗的享樂の人工的な談林派の流から深く、實に深く遡つてその澄みきつたところで發見されたのを面白いものに思つてゐる。私は空想してみる——芭蕉にその當時の民衆の空氣をむしろ早く深く味ひ盡したのであつて、民衆が一世紀を要するところの進展を彼は十年に於て成した。一語でつくせば彼の天才は民衆とともにあつて、ただ民衆の容易に飽かなかつたところのものを彼はその一變によつて味ひ盡して、更により不盡の味に就いたのではないだらうか。彼は決して民衆に對して反抗的であつたのではあるまい。即ち、彼自らを導いたものは彼の敏感であつて、彼の意志ではあるまい、と。それは芭蕉の爲人を秋霜烈日の人とは思はずに春風駘蕩の人と見ようといふことにもなる。又その文字的制作によつて見るに、久米は「芭蕉の文學は意志の文學だと思ふ」と言つてゐるが久米のこの說に就ては私は更に說明を聞かない限り、私には全く不可解である。成程、彼の制作は風流的藝術に特有な灰色の世界ではある。然も、その灰色の世界に於て、いかに芭蕉は感覺的であつたか！「何の木の花とは知らず匂哉」「あらたふと青葉若葉の日の光」「山路來て何やらゆかしすみれ艸」「五月雨のふり殘してや光堂」「閑さや石にしみ入る蟬の聲」「木がらしに岩吹きとがる杉間かな」彼の文字のうち傳唱するに足るものを三四思ひ出してみても私にはそれがすべて甚だしく感覺的なものに感じられる。さうしてそれによつて彼の文字は永久に生きてゐるのを見る。たゞその感覺たるや、近代的のものではなく飽くまで風流的のものであることは論ずるまでもない。芭蕉の殘した文字のなかで唯一つ、「行脚掟」はそれの題目が要求するごとく、意志的と言へば言へない事のない唯一の文字であるが、それとても彼の磨かれた趣味性「嗜み」と見るべきものであつて、それ以上に七面倒な何事でもない。又、藝術的文字としてはその全集中寧ろ無くもがなのものである。ひとり芭蕉とのみ言はず、一般の風流的藝術に於て、その制作が風流的感覺を示すことなく、唯に風流的意企「人生觀の凝立」的意志をのみ現はす時、それは何と俗な、月並的風流であつたらう！ 私は斷言する、風流を意志的なものなどと見ることは風流を滅亡させることである！ 試みに思へ、風流の徒がその藝術的極致としてその脈動を常に要求するところの氣品を、彼等は彼等の一種テクニカルな用法でにほひと呼ぶではないか！

「秋聲は芭蕉に就て言ふ——「芭蕉は努力をしてゐる」と。言ふまでもない事だ。人誰か努力せざらんやだ。生きるといふことそのものが既に一つの努力ではないか。しかもすべての傑出した人々はすべての努力をさへ享樂するのである。努力の伴はない享樂をする者はただ蕩兒だけだ！ 享樂の伴はない努力をする者はただ奴隷だけだ！ 芭蕉は蕩兒でもなければ奴隷でもない。ただ彼は偉大な詩人だ。詩人が詩のためにする努力、人間が生のためにする努力、それは彼等が偉大であればあるほど享樂と一致してゐる。

久米、德田兩家の外に久保田万太郎は風流を說いて、「原始精神に眼ざめようとする努力」と言ひ加能作次郎は「或る意味の信頼に安住しようとする努力」とのみ說いてゐる。二家はあまりに語を惜まれたが爲めに、二家自身には充分な說明であつたかも知れないが、二家とは別人である私には不立文字のやうに全く糢糊として、捕捉し難い。が、どうやら二家も亦、風流といふものを何か宗教的意志の所產として觀てゐられるかのやうにだけは私にも感ぜられるのである。

諸家の片鱗に就て、私がこのやうに語を費した諸家を駁することの急なのを、諸家は寬恕されたい。さうして、私が若し諸家の說を正しく解する力がなかつたのならば、私が諸家と說を異にした不幸のためにこの說を細說したのだからして、その私のために諸家は折角の閑を惜まれることなく、私の蒙を啓くことに吝でないであらうことを望む。實際、「風流」を明確に正當に理解することは我々の民俗の藝術の大半を解說することであり、國民性を闡明するに甚だ重要な一眼目であることに氣づかれたならば、前述の諸家であると無いとに不拘、この問題を追求することは決して閑事業ではないと私は信ずる。批評といふものは必ずしも毎月の創作を論ずるだけのものでもなければ、また舶載の洋書と同じ題目をのみ擇ぶべきものとも限らないだらうから。——そこで、この席上の四家であるが、この諸家は風流といふものを甚だ面倒なもののやうに觀察してゐられるかのやうに見える。思ひ切つて妄評を逞しくするなら、諸家はその本質に就ては一向御承知ないことをひどく畏敬して居られるかのやうに見える。趣味の人としてただ傳統的に「風流」を前後もなく尊敬する一般的迷妄であると私は考へはしない——秋聲も富豪のお茶などとは違ふと斷じられた程なのだから。しかし恐らくは、あまりに强くその情感に訴へられるがままに、それを理性の上で是が非でも高價に認めむとする性急な錯誤であらうか、それとももつと外のものであるか、ともかくも諸家は料らずも「風流意志說」といふ途方もない反語によつて、諸家

が相當に愛して居られるらしい「風流」を思ひ切つて揶揄したやうな結果になつてゐる。實際私には「風流意志說」は愉快な程に思ひがけない逆說であつた！ 多謝す、諸家。諸家は私にお誂へ向きの論題を提供された。

まあ諸家と一緒に、風流の徒を宗教的なものと見てみよう。然らば、彼等は何故にたゞ宗教的などではなく宗教そのものにならなかつたのだ。また意志的なものと見てみよう。彼等は何故に克己派の哲人にならなかつたのだ。なぜそれだけの意志を發揮しなかつたのだ。彼等が果して意志的、宗教的なものであるならば、彼等がもつと確實に安住していゝ境地ほ外にいくらでもあつたのだ。彼等は何故に、樹下石上に端坐してその指の爪が組合して掌のたゞなかを突拔けるまでの苦行者に伍しなかつたのだ！ なぜ、「淸貧」をその花嫁に擇んでその腰に繩の帶を卷くところの聖フランシスの徒に雜らなかつたのだ。或はまた樽のなかに横臥して日の光より外に何ものをも求めなかつた犬的哲人の敎を請はなかつたのだ。生憎と彼等がそんなものを創造するやうな力がなかつたからと言はなければなるまい、それなら何故、ほんの手近かにあつて彼等のものと甚だ相似通うた佛敎徒にならなかつたのだ。さうして何が故に徒らに興を追うて藝術に感懷を託したのだ。もし彼等を意志的なものとするならば、何といふ不徹底な彼等の意志だらう。何といふ淺はかな彼等の努力だらう。もしそれが果して意志的なものであつたといふならば、私はそれに蠱惑を感ずるどころではない。その以前に私は彼等を卑屈な不徹底漢とし、淺薄な思想家として卑しむの念に堪へないであらう！ さうして彼等が爲し得たところの藝術を淺はかな中途半端の生んだ醜惡な畸形兒として唾棄するだらう。——もうこれ以上に一分間も考察することなしに唾棄するであらう。

然し私はもう一度考へなければならない。彼等を意志的なものとして認めたのは私ではない。私は私で彼等を徹頭徹尾、一個の藝術的享樂者として認めたのだ。さうして私は主張する——彼等は別に憑つて、來る所があつて卽ちたつた一つの眞實な感覺によつて藝術的陶醉の全く別個の新天地を、苦行者隱者僧侶その他の外に、嚴然として創出したのである、それこそ目ざましい徹底的態度で。

さうして人々が宗敎的苦行だと思ひ、意志的練磨だと早合點をするのも、まんざら無理でもないやうな珍奇な詩的耽美生活が始まつた。

それらの祕密は何もかも、たつた一つの「あれ」のなかにあるのだ！ さうしてその「あれ」といふのは、それこそ不思議なことに全く人間の意志などといふものがそのなかに微塵もあつてはならない「或るもの」であつた。——私は詭辯を樂しむのではない。反語を弄ぶのではない。感ずるまゝの眞實を出來るだけ素直に述べてゐるだけである。今にして考へて見ると、「風流は意志的」と聞いた瞬間に私がびつくりしたのも無理はない——私の心の底では「こんな思想」がその時混沌として眠つてゐたのだから。

さあ、その私の「こんな思想」といふものを、私はこれから說かなければならない。

三、本題

私は旣に風流とは「もののあはれ」であり「さびしをり」であり、乃至は「もののあはれ」「さびしをり」の日常生活化であり、さうしてその中心をなすところのものは學者の所謂「無常感」だと斷定した。「もののあはれ」と「さびしをり」とを一口に同じものと言ふことは出來ない。その言葉が違つてゐるやうに、その內容、精神も亦、多少の相違があることは論ずるまでもない。さうしてそれが一たいどう異つてゐるかといふことに就ては自づとそれを說く折が後にあるつもりである。しかし、たとひそれがどう違つてゐても結局は、同一の流れが、流れゆくがまゝに自づとその岸邊を變へたまでの二つの曲折であると私は思つてゐる。これも私の斷定である。さうしてこの斷案はさうはつきり言ひ切るのはどうも私の獨斷であるかも知れない——私はその點を具さに考へないやはない。然も、どう考へても私の頭では別にこれ以上の考案も出來なければ、またこの自分の斷案に就ては自分では何の疑義をも抱かない。だから、私は私のこの斷案に基いて私の說を樹立するつもりである。

どんな說であらうともその根柢であるところのものは、結局は論者の獨斷なのではないだらうか。その獨斷が人々によつて同感される場合には、それを人々は獨創的だと呼んでゐる。——私の斷案が果して獨創的と呼んで貰へるかどうか、それはおぼつかない。たゞ私としては、どうしても自分でかうとより外には信じられないその點に、基礎を置くより外には方法はない。そこで私の斷案に贊成してくれる人、或はともかくも先づ矛盾が生じないまでに認めてやらうといふ人にだけ、私はしばらく私の說を述べようと思ふ。私の說のこの根本を始めつから認めない人は、私の獨斷に代ふるに、その人が信ずるところの風流の根柢を先づ擧げて、それによつて樹立した風流論を一とほり私に聞かせた上で、私の斷案の滅茶なことを敎へてもらふことが出來れば幸である。——私は先づこれだけのことを斷つて置きたい。——それからもう一つ。私の說が果して古人が考へたとほりの風流の解釋になつてゐるかどうか、私はそんなことは自ら知らない。「古來の正しい風流の心境」と言つてみたところで、古人を地下に呼び起して古人の口づからこれを聞くことが出來ない以上は、誰が「古來の正しい風流の心境」などを知ることが出來るも

のか。たゞ我々に出來ることは、我々の心に多少とも生きてゐるところの風流的感懷に就て、自らこれを檢ね自らこれを究めてそれが合點をうなづくまで、自ら說いて自ら滿足するだけの事なのである。だから、私のなかに風流の感懷が全くなかつたとしたら、私の風流觀はきつと出鱈目なものになるだらう。——私は私の說を初めから會得すまいと用意をしてゐる人々の爲めには、いつも何事をも說くつもりはない。從つて私は誰に向つても私の說に對して同感を强要しはしない。私はたゞ、私が私の說を持することが、私として自然であることを諸君に知つて貰ふことと、もう一つには私のとは異にする諸君子の說が、私にとつて（諸君子にとつてではない！）反對であることが甚だ自然だといふことが私に理解できればいゝのである。又たとひその說が私のものとどんなに反對であらうとも、それが首尾あるものである以上、私は同感しないまでもそれを是非する考へはない。各人は各人の見地から物を見さへすればそれでいいのだ——私はこのとほり個人的である。

私は自分の裕と丈とに合せただけだ。

そこで私は一つの感覺であるところの「無常感」を風流の根柢だとも言つた。その「無常感」とは果して何であるか。「無常感」は佛敎の渡來と一緒に來た。そのしるしには「萬葉集」のなかには「無常感」はないと一般の文學史家は言つてゐる。この定說に對して私は別に異議はない。たゞ、あの宗敎として最も哲學的背景の多い佛敎が、我々の民族の間に傳播してそれが一向哲學的には受け入れられずに——乃至、受け入れられるに先だつて、「無常感」といふ一種の感覺——或は情操だけが先づ形成したことを考へることの點が、我我の民族性を見る上に甚だ興味のあることを思ふのである。實際、我々の民族には思索的な才能乃至嗜好といふものは甚だ少ない。思索癖ある人を見ては理窟つぽいと言つて、これを卑しむ國柄である。思想もなければ哲學もない民族であることは古からだつたと見える。それにしてもその「無常感」は第一に、一たいどこから、民俗のどの階級から發生しただらう。蓋し、「櫻かざして今日も遊び」暮して、遊びくたびれた大宮人の歡樂の果ての哀愁ではないだらうか。實際「もののあはれ」といふ詩境を發見したのは古今集の大宮人たちであつた。

それが佛敎といふ厭世的宗敎から來た一つの感覺或は情操である以上、それを中軸として組立てられた世界である「風流」のなかに、宗敎的な匂ひがあることはあまりに當然なことである。私の興味を持つ點は、そんなところにはない。豆腐が豆から製出されたことに氣づくものには、豆腐が豆の味を持つてゐたからといつてそれを少しも問題にはしないと同じことだ。私にとつてはこの問題の面白味は專ら、宗敎であ

り同時に哲學であるところのものが、たゞ感覺として情操として感得され、さうしてそれがやがて「もののあはれ」といふ藝術境に變つて來たところにだけある。

それにしても「無常感」といふものは、その正體は何か？

一體、人間は、これを民族的に見ても、個人的に見ても、多少とももの考へることが出來るやうな時代——ものごゝろが生じてあまりに多くの年月を要するまでもなく、——少年時代にもなつて一度、己といふものゝ在ることに氣づく時代になりさへすれば、その己であり己と同じである存在「人間」の外にさまゞくな他の存在「自然」があることに氣がつかずにはゐられない、さうして自然對人間といふことに就て、必ずや驚異の目を見張つたであらう。すでにその驚異は一變してやがて皆一樣に、自然の悠久無限なこと然も人間自身の須臾にして微小なことに對する心持に變る。無限大を感じた直後に、それに對照して無限小に近いものを見る。さうしてその無限小とまで思へるものは、今まで可なりに大きなものと心得てゐた己自身であつたことに氣がつく。——これを智惠の初めとも言はう。靈の目ざめとも言はう。——諸君子は、身體なり精神なりのひどく衰へてゐる時の或る瞬間に、もしや己の手や頭などの如き或る部分が、遽に無限に擴大したかと思ふと、見る〳〵うちにそれが一時に芥子粒程に縮まるかのやうな一種不氣味な心持に襲はれた覺えはなかつたか。私は、屢々そんな現象を感じた事がある。さうして私はそれをひとりで勝手に解釋した——これこそは、我々の祖先、乃至は我々自身が自分で氣づかなかつたほど稚かつた頃に、無意識的に自然の偉大と人間の微小とを感得したその一瞬間の驚きが、今に我々の心の奧底にそれほど深く刻まれてゐて、我々がぼんやりとした折ふしに我知らず第一に思ひ出されることがそれなのではないだらうか。あの不氣味に大きな自分の掌や、不氣味に消えてなくなりさうになる自分の掌は、宇宙の人間との象徵ではないだらうか——しかし、こんな解釋はほんの餘談である。たゞ、私は自然對人間といふことに氣づいた時の我々人間の驚異がそれほどまでに深かつたであらうことだけは疑はないのである。實際、人間の一切の文明はそこに發してゐると言つて見ても、あまりにとりとめがないだけで、しかし別に間違ひではない。就中、人間のあらゆる宗敎、あらゆる哲學、あらゆる藝術こそは、その起原を一層直接に、人間的自然の驚異のなかに發してゐる。自然の無限大に對する人間の微小といふこの悲痛な事實が、人間を刺戟したのである。たゞ瞬時にすぎない自己に氣づいた時、或る者は敢然としてこの自然的悠久に對して外に別個の人間悠久——人間的努力の不滅なる何物かを樹立しようと企てた。或者はまた何等かの法則の工夫によつて人間そのものも亦自然とゝもに悠久にあり得るかも知れないと考へてその

方則を探究した。しかし或る者はまた、我々自身であるところの人間といふ微小な存在がこの須臾な存在を遂げんが爲めに支拂ふところの苦惱が、この微小とこの須臾とに對してあまりに高價にすぎることを感じて、我々の生に對する本能的執着を自然が人間に與へた一つの欺謀であるとして、その生を持續せんとする努力そのものが既に一つの自然に對する拜跪であると觀じた末に、寧ろ、決然としてのこの存在を拒否しようと志した。すべての哲學史、すべての宗教史はこれらの事實の列擧に別ならない。藝術は藝術で別に一つの工夫をもつてたとひそれが瞬間であらうとも瞬間のなかに悠久と對抗することの出來るやうな特別に快美な世界を樹立しようとも企てた。その方法が何であり、その方向が何であつても彼等はともかくも、彼等の精根のつゞく限りを盡した。人間の存在に就て光明的な努力をしたところの人はもとより、懷疑的否定的な人々でさへもやはり、各その人間的意志を發揮したのである。人間的意志の讃美に對して、たしかに人間的意志の讃美を否定するところの宗教も哲學もあつた。しかも、それが宗教であり哲學である限りに於ては、人間的意志の讃美者とゝもに、その積極的な否定者も亦たしかに意志的であつた。前者の意志を假りに十(プラス)の力に働いた人間的意志といふならば後者のものを一(マイナス)の力に働いた人間的意志とも言ひ得るであらう、人間は、一度、自然に對して人間自身の微小なことに氣づくや否や、その悲痛な事實から脱脚しようとして、それ〴〵にこのやうな意志を發揮したのである。たとへば破ることの出來ない檻のなかに入れられた猛獸のやうに。見苦しいと言へば見苦しい、しかし、壯烈と言へば壯烈なこのやうな力をもつて戰つたのである。——それが何の爲めであるか私は知らない。たゞ、我々はその猛獸と同じく生きたいといふ欲望を持つてゐるからである。一(マイナス)の力に働いた意志としてもやはり生きてゐるといふ心持を味はんが爲めの一つの手段であつたともいふことさへ出來る。さうしてそれらの力は我我の生がそのやうに限られたものであるといふことを熟知した瞬間に於て、勃然として發揮されたことは檻のなかの猛獸とゝもに至極尤もなことである。

しかも、人間對自然といふこの精神的の目ざめが我々の民俗のなかに現はれた時に、そこに生れ出たところのものは、たつた一つの所謂「無常感」だけであつた。さうして無常感なるものは、卽ち、人間の須臾微小と自然の悠久無限とを認めて感ずるといふだけのその感覺乃至は情操だけにしかすぎないのである。それは決して努力の末に達觀して得たところの何物でもない。寧ろ、それを根本にしてすべての人々が意志的に壯烈な苦鬪をしたその根本そのものである。何の苦もなくたゞ民族が少年或は青年期に近くなりさへすれば自づと氣がつかずにはゐられないだけの感覺乃至は情操だけなので

ある。さうしてそれがやがて、我々以外の他の民族のなかでは、それこそ種々雜多な宗教や哲學やその他の生活方則の苦悶を誘引したところの原形的感覺そのもの、或はそのものゝ極く言ふにも足りないほどの變形にしかすぎないのである。彼等他の民族のなかにあつてはそれだけの苦悶的動作と絶叫とを叫び起したところのその同じ實感が、我々の民族の間では、それが成育すれば宗教にでも哲學にでもなるところの嬰兒が、生れ出ると直ぐに、それ自身が一個の美的なものとなつて、やがて「もののあはれ」といふ藝術境——瞬間と永久とを同一化しようとするところの微妙な一法則の境地——を苦もなく築き上げたのである。我は「苦もなく」といふ。さうだ、その間にそれが藝術になるまでに、或は哲學として或は宗教として、或は藝術の素地であるところの人生それ自身に於て、意志的に或は理性的に、十(プラス)の方向にであらうと一(マイナス)の方向にであらうと、どんな苦悶をしたといふ事實が我々の民族の文明史上に殘れてあるか、また「もののあはれ」の藝術境が始めて開拓された時代よりも以前に、或は以後に、民族的の靈の目ざめとして目すべきどんな時代があるか。奈良朝の文化は、「萬葉集」の藝術とゝもに、正しく未だ靈の目ざめを知らなかつたころの少年のやうな、それほどに人間至上的な無邪氣な潑剌な文化である。さうしてやがておもむろに靈の目ざめを豫覺させてはゐる。たゞ、しかし、たゞそれだけだ。またそれだけであるが爲めにこそ一そう尊くもある。

私は信じてゐるが「もののあはれ」を感じ出したところの詩人たちは、正しく靈の目ざめであつた。しかも彼等はそれに就て、殆んど些も苦しむことなしに、たゞ一つの藝術境を開拓したゞけだつた。あつけないとも言へる奇蹟的だとも言へる。さうしてそれは佛教的な影響であつたかも知れないが、私はより多くそれを偶然的なことだと言ひたいやうな氣がする。私の見るところを以てすれば、「古今集」の詩人たちは全く、或る意味での頽廢者たちであつたのだ。彼等はその歡樂の果で疲れてゐたのである。さうして彼等はたゞの感傷家だつた。然も彼等は實は豐かな天分を抱懷してゐた。

一體、生のあまりにはげしい活動は、その生が不幸でなかつた場合でさへ、我々に屢々死のことを考へさせる。しかも我々は死を樂しく考へるほど疲れてゐる瞬時に於てさへも、生きてゐる限りに於てはやはり生の本能に執してゐる。さうして死を考へてゐることによつて生きてゐることを享樂してゐるといふ心理さへもあり得る。たゞその場合に於ける生の執着も、生の享樂も、それが生としてはいかにも最小限度的なものなのである。さうして「もののあはれ」と言ひ「無常感」といふのは、實は、この最小限度に於ての生の執着と生の享樂とに外ならないのである。活動によつて疲勞した人が無意識的に靜止を思ふ瞬間には、彼の人間的意志は影のやう

に淡くなり、さうしてさういふ人々の目に現はれて出て來るところの自然の悠久は、我々が遂に抱括されるであらうところの最後の故郷へのノスタルジヤの如き哀しい愛情として現はれて來る。しかも彼が生きてゐる限りに於て彼はやはり心から死を欲したわけではない、――人間には死を欲するといふやうなそんな本能は何時も少しも與へられてはゐない。與へられてゐるものは生の本能だけである。死を欲するが如き心持を生じた時とても、それはたゞ生の本能が疲れてゐたか痛んでゐたか狂つてゐたかだけの事なのである。すべての自殺者はたゞ不滿な生に刺戟されて生の本能を狂的に發揮したゞけなのである、況んや、「古今集」の大宮人たちは生の不滿から死を欲したのではなく、却つて幸福な生の過剰的疲勞からであつてみれば、その安靜に對する希求は寧ろ生の喜びを新たにするためのものとしてゞあつた筈である。しかも、彼が一度自然の悠久と自己の須臾とに氣がついて見ると、彼は思ひがけない愕然を以て自己を省みざるを得なかつた。然るに影の如く生の力の薄れてゐたこの滿足的疲勞の人は、その愕然のうちにも決してそれほどの生の力を發揮することが出來なかつた。またしなかつた。彼等は、彼等はその悠久無限のものに氣がつくや否や、彼等の幸福がそれらの悠久なものと終始することが到底不可能なのだといふ一つの悲愁だけは感じた。しかし生の力の薄れてゐる彼等にはその悲愁とて亦淡いものであつた。さうしてこの悲愁は、決してそれ以上に深められも高められもしなかつた。佛教的結論がこの時の彼等を救つたかも知れない――ナせいぜいその結論だけが。しかし私は、彼等を救つたものはさういふ宗教ではなくて、寧ろ彼等自身の豐かな詩人的天分ではなかつたかと思ふ。何故かとならば、彼等はその淡い、しかし根ざしの深いところの悲愁のなかに、彼等の新詩境を先づ發見した。詩人たちは新詩境を發見したその喜び――藝術的陶醉によつて、彼が發見したところの人間對自然の悲しい驚異をわけなく解決してしまつたのである。――所謂「無常感」といふ言葉を、私はわざわざ「無常美感」と呼びたいといふのはこのためである。悲哀の享樂。厭世の享樂。「もののあはれ」の詩情は何も事新らしく說くまでもなく、頽廢的なものである。

この頽廢的詩情が、それにも拘はらず、どうしていつまでも我々の心にふれるか。それは我々がその頽廢的詩情によつて年久しく養はれて來たからであるに違ひはない。それならば何故に、この詩情はそれが民族的詩魂ともなるまでにそれほど年久しく魅力を失はなかつたか。――全く、今でもまだ我々の心に折ふし潑剌として生きてゐることを感ずるではないか。これは正しく考察していゝ點である。さうして私はそのなかに相當に正當な理由を見出すのである。

「もののあはれ」の詩情は、第一にはその題目を人間の靈の

目ざめと呼ぶべき重大な、さうしてそれ故に永久に新らしい人間的事件の中心にその根を下ろしてゐる。しかもその中心へ殆んどぢかに生えてゐると言つていゝ。第二には、この甚だ一般人類的でしかも永久的であるところの題目に對して、その問題を發見して提供すると同時に、それに對して一つの解決をさへ與へてゐるのである。問題を提供すると同時にその解決を提へたと言つても過言ではない。――さうして我々は、折ふしにはまことにこの解決によつて充分滿足するところの自分自身を見出す。「もののあはれ」は果してそれにどんな解決を下してゐるだらうか。

人間が自己を自然に對抗させて、時には自然を征服しようとさへ考へて、敢然と決然とさま〴〵な方法を建て、しかもそれの果に益々苦悶を高めたかのやうにさへ見えるところのそれ〴〵の民族を我々は知つてゐる。然も、我々の民族の祖先が、この同じ問題に直接して期せずして捉へ得たところの、或る新らしい一つの解決は、恐らくは他の民族――殊に西歐の民族にとつては夢想だにもしなかつたものであらうと私は思ふ。――外でもない。我々の祖先はついい（ほんのついい！）我々人間をも自然の一部分として感じたのだ。自然に對抗する人間を感じたのではない。自然に抱擁される人間を感じたのだ。自然の子としての人間を素直に認めた。さうしてそれだけの事だつた。「何の事だ！」笑つてはいけない。が然し、他の民族のあの檻に囚へられた猛獸のやうな奮鬪とこれとを思ひ合す時、自づと笑ひを催すほど、氣がついてみればまるで「コロンブスの卵」のやうな子供らしい、直觀的な、卽興的な、けれどもどう考へたつて本當には相違ないところの解決であつたではないか！

然し、（この然しは甚だ重大なそれである。赤のインキで刷られたい程である）こゝで我々が決して忘れてはならない事には、我々が自然の一部分として我々自身を感じ、それによつて自然對人間の苦悶が甚だしく荷が輕くなるのには、その爲めに我々は我々人間自身の意志を最小限度にまで卑下してしまつてゐるのである！

若し、燃え盛るやうな人間意志にとつてはそれを最小限度のものに限定する爲めには、確に一種の內面的葛藤を要するだらう。一（マイナス）に働くところの意志を充分に發揮しなければならないだらう。然り、佛教哲學の如きは、自己を最小限度に限定するためにはあれほど廣大な哲學を必要としたのである。人間的意志放擲も亦一つの人間的意志活動である。たゞ、もともと燃え盛つてゐないところの人間的意志に於ては、換言すればそれが最初から最小限度的であるものゝために、既にそれ以上の何の意志をも加へる要はない筈である。さうして我々の祖先は――尠くとも「もののあはれ」の詩人たちは、意志放擲的意志一（マイナス）的意志の把持によつて彼等特有の解決を贏（から）

得たのではなく、寧ろ、飽くまでも自然的に生の力の淡くなつてゐるその一刻に於て、偶然にそれを捉へ來つたかのやうに私には見える——意志放擲といふよりもそれは意志脱落の瞬間であつたといふ方がもつと適切であらう。彼等がその解決を得るために努力をした跡は一向に認め得ないばかりか却つてその反證だけを私は發見することが出來る。即ちこのやうにして得來つた詩情であればこそ、それは世界に比類ないほどの短小な詩形に於てのみ成立したのだ。ケーベル博士は我々の民俗の詩歌は、西歐のそれにあつては題目だけにしかなり得ないところのものだといふ意味を述べてゐるのは、達見である。事實、我々の民族は、他の民族がそこから發足して哲學なり宗教なり藝術なりを形成したその地點から、一向發足することなしに、即ち主題そのものだけですでにそれ以上發足する餘地のないやうな境地を得たのであつた。

我々の生の力が薄れ、それが自づと最小限度になるといふこと、即ち人間的意志脱落といふやうな狀態は、生きてゐる人間にとつて決してさう長い時間に渉り得るものではない。これが即ち我々の民俗の詩歌があれほど短小で事が足りたことの唯一の理由である。「萬葉集」時代に於ては存在し得たところの一層長い詩形は、「もののあはれ」が民族的詩情になるや否や全く影を潜めてしまつたのもこの故である。極く瞬間的な感覺に對するその次の瞬間の咏歎であるが故に「もののあはれ」の詩情は確に長い詩形に盛らるべき性質のものではあり得なかつた。(これを假りに、外國の長篇小說と比較して見るがいゝ!)しかも、「もののあはれ」の詩情はもう一そうその進展を示して松尾芭蕉等の詩歌になつた時には、それでなくてさへも短かゝつた詩形がそれの半分で事足りるまでになつた。——進歩すればするほど民俗的藝術の樣式が單純になるといふ例は、まことに奇異に近い現象ではないか。然も、見ざに見ればこの奇異な現象さへ全く當然であることに氣がつくのである。かくの如く沈默に近い文學また虛無に近い美術が嚴然として成立したことの祕密は、その根柢を存するところの「無常感」なるものが人間の最小限度的活動であつて、全く有と無との境に存在する一刹那の感覺であつたことを知れば何の不思議もないのである。

「もののあはれ」の詩情が三十一文字を要したのは、それが單に一刹那の感覺に終始し得ずして、その感覺の次に現はれたところの感慨——しかもたゞの感傷であつたものをまでそのなかにとり入れたことにある。さうして芭蕉の藝術に到つては無常感といふ感傷的咏歎などは既に去つてしまつて、たゞ自己が最小限度に縮んでゐる瞬間の感覺そのものだけを、一そう端的に投げ出したのである。それは風の音、水のせゝらぎも、鳥の叫びや、或は咲く花のやうに、自然そのものである。風が枝を得て鳴るごとく、自然そのものが人を得て叫

び得たごとくであつた。それほど端的で、故にそれほど象徴的であつた。これは風流的文學に於て全く飛躍的な進歩であつた。何となれば、「もののあはれ」にあつては咏歎的であつたが爲めに、結局主觀的であり、主觀的であつたがために自然よりも多く人間を感じさせたところの詩境は、咏歎を去つた——否、咏歎にまで及ぶほどの時間をさへ含まない程の刹那的なものになつたが爲めに、更に一歩を深めて主觀界と客觀界——即ち人間そのものと自然とがいみじく一致したその瞬間を捕捉し得て、そこに自然のなかに抱擁され切つてゐる時の人間の相を的確に描出した。人間にして人間に非ず、全く宇宙的一存在としての人間境がそこに出現した。

「もののあはれ」のなかには、最小限度に於ける人間意志をまだその底にひそめてゐた。何となれば、それは自然と終始し得ないことの、自然と合致し得られないことの咏歎であつた。換言すれば最小限度に於ての生の執着の現れであつた。さうしてそれが最小限度であつたが爲めに、彼等の感受し得た自然對人間の母子的關係には、それほどの矛盾を生じはしなかつたとは言へ、自然によつて抱擁し切られた人間の相そのものとしては一歩遠いところにあつた。少くともその母子關係は懷にある嬰兒と母とのやうなものではなく、むづかつてゐる童兒と母とのやうなものであつた。さうしてそれが爲めに折角彼等が直感的に(論證によつてゞはない)、感覺的に(意志的にではない)即興的に(苦行的にではない)感受(悟得ではない)したところの解決は、彼等の主觀によつて淺くされてゐた。もう一歩、ほんのもう一歩、この咏歎的主觀——人間的意志を去つた方が更に本當の意志脱落であつた。それを完成したところの人が松尾芭蕉であつた。事實、芭蕉の詩境にあつては、人間と自然とは苦もなく溶け合つた。人間的意志が、否、人間的生存そのものが最小限度に表現されたが爲めに外ならない。さうしてこの風流的境地に於ては何人も、——美術は暫く措くとして風流的文學、即ち極度に於ての即興的感覺詩に於ては、何人も芭蕉に追從し得る者はなかつた。例へば與謝蕪村を見よう。

蕪村は飽くまでも風流な人であつた。然も、惜むべし彼の風流は芭蕉のものに比べてはどうしても「風流の爲めの風流」であるかのやうな何物かゞある。ありすぎる。何を私は「風流の爲めの風流」と呼ぶか。曰く、風流が蕪村にあつては直接自然の子ではなくなつて、別に蕪村によつて築かれたところの別個の風流世界があつた。蕪村の藝術はその彼が別個の風流世界に於てのものであり、從つて自然にとつては子ではなく孫になつてしまつてゐるやうに私には見える。蕪村の詩にはあまりに風流的回顧や、風流的空想や、風流的咏歎や、風流的力說が過剩である。「花七日もの食はずとも書畫の會」言はゞ蕪村のなかには刹那の感覺以外のもの、風流的意志が

あまりに多すぎたのである。蕪村は能才であつた。それ故に風流の見解に就て決して誤つてはゐないとは言へしかもその正しく捕捉し得たところの見解を以てしても、その間に風流なるものを自然に對抗――と言つては言ひすぎるが謬くとも別に自然界以外に風流界なるものがあるかのやうな意企が姿體をなしてかすかに感ぜられるのである。危い哉、蕪村は一歩を誤つたならば、終に俗人の風流野狐の風流、富豪のお茶に墮するところであつた！ たゞよくこれを救つたところのものは、蕪村が風流的意企に相比敵するだけの風流的感覺を風流的生活を所持してゐたからである。風流的感覺なくして風流的意企を持つ！ 風流にとつては思つてみただけでも恐ろしい事だ。事實、所謂月並の風流なるものは、意企によつて作られた風流的主義であつた。さうして風流はその月並のために滅びた。――風流は意志的なものなどゝいふ、新潮合評會席上の諸家の說が、どうかそんな俗流のものと五十歩百歩で無ければいゝが、眞の風流は、私の考へる風流は、風流的意企といふ人間意志をさへ既に嫌ふのだ。

然らば、私の考へる眞の「風流」とは何か。私はもう今となれば、少しも遲疑することなく斷言することが出來る。風流の精神とは正に、人間的意流が小さければ小さい程いゝのだ。即ち人間としての意志が極度に於て最小限度であることである。この語感に於て、現代よりもむかし、小說作者乃至小說よりも詩人乃至詩、會合よりもひとりの方、また談論風發よりも拈華微笑の方が――以上すべての後者が以上すべての前者よりも風流だと思へるのは、正に、後者が前者よりも人間的意志がより一そう少なくて事足りるからに外ならない。人間意志の紛糾を極めた葛藤を凝視しそれを組み立てたところに意味のある近代小說を、假りに風流的藝術家に示して、これが藝術の上乘だと說いたとしたら、彼等は恐らくその刹那に卒倒してしまふかも知れない。バルザックと芭蕉とこの二人は文學の兩極である。

風流的藝術が、文學に於ては最も沈默に近い卽興詩をその主要な樣式に撰び、美術に於ては最も虛無に近い單色繪をその主要な手法としたのは、まことに偶然ではなかつた。しかも全然の沈默に非ず、全然の虛無に非ず。どこまでも表現を必要とし――換言すれば藝術として終始したのは何故であるか。或る種の厭世的宗敎、或る種の否定的哲學と甚だ相似通うてゐながら、然も風流がどこまでも藝術であつてその以外の何物でもないのは何故であるか。これは全く考察を要求するところの事實であつて、しかしわけもなく解釋のつくことである。といふのは風流はそれらの厭世的宗敎や否定的哲學と甚だ相似ながら、然も、最も重要な一點に於て最も重大に相異してゐるからである。卽ち、風流は決して我々の生を根柢から否定し拒絕したのではなく、たゞ生を最小限度的なも

のには感じはしたけれども、風流の徒は生を拒否するどころか、寧ろ、生を享樂したのだ――最小限度に於ての生でこそはあつたけれども。もう一度換言すれば、彼等は自然のなかに抱かれた人間としては、人間が生きて甲斐あることを痛感したのである。――私が眞白い情熱と呼ばうといふのはこの爲めである。彼等は人間的意志が構成した人間社會をこそ厭ふの念はあつたかも知れないが、人間そのものを厭ひはしなかつた。最小限度として感得したところの最小限度的人間界に於ては彼等は人間そのものを享樂したのである。さればこそ沈默に近いだけで沈默そのものではなく、虛無そのものではない世界――自然に促された人間のものである限りは、それが世俗的に有意義であらうとも無意義であらうとも、喜怒哀樂微笑號泣の何の聲であらうとも、彼等は喜んでこれを發した。自然に促された人間のものである限りは、それが世俗的に美麗であらうとも醜惡であらうとも、草木魚蟲雲烟山川の何の形であらうとも、彼等は喜んでこれを眺めた。その彼等が發した聲、その彼等が眺めたところのものを、彼等は喜んでこれを傳へた。彼等が遺した制作がその證據物件だ――生の享樂に非ずして誰がそんなことをするのものか。

彼等の喜びは人間自身の意志によつて光るのではなく、自然に反映して始めて輝いた。私が月光的恍惚と呼ぶのはこの爲めである。

彼等の美と眞と善との感じ方はまた當然、どこまでも人間的意志の約束を去つてゐることを好しとした。人間的意志の約束を去つてしかし自然と融合することによつて解放された己を樂しみ、またさういふ己を持つてゐた他の人たちが興の到るがまゝに自づと得たところの諸の制作を、彼等は自然に對するごとく愛好した。人間的意志ののさばつてゐないものを見て氣品ありと歡呼した。それを認めるのには「鼻」が入ると見えて、その氣品のことを「にほひ」と呼んでゐる。「心眼」といふ言葉がある――私は「心鼻」といふ文字を作つてもいゝだらう。精神が感覺に到り、感覺が精神に到り得ることを「心眼」といふ文字をつくつた人も、「にほひ」といふ語を使つた人も、きつと承知してゐたことだらう！ 古人なる哉。

彼等風流の徒が追求してやまなかつたところの淸閑といふのも亦要するに人間的意志の諸の約束――彼等の目からは淺小と感ぜられたところの人間的意志の約束から解放された時間、それによつて自然と人間とが融合された時間、その時間を指したのである。人間的意志ののさばり出ることを彼等はどんなに厭うたか。彼等とても必ずしも綿繡を愛しなかつたのではあるまい。また必ずしも玉樓を憎んだのではあるまい。しかしより多くそれを大儀なものに思つたのであらう。その快樂よりもそれに伴ふ當然の煩悶を憂しと感じたであら

う。桁の低いところの暮しが氣樂だつたのだ。何もかも人間意流的には最小限度であつたのだ。然も根本に於て享樂者であつた彼等は人間そのものを全然無くすることはどうしても嫌だつたのだ。さればこそどんなに手輕な形ででも藝術が彼等に必要であり、飲むにはまた清泉の外にいくらか人間的な苦茗があり、語るにはまた花鳥風月の外に彼等自身と同じ形で同じ心の友を求めないでなかつた。「一盞の酒、二三の良書、會心の友」の外に彼等は「無限の自然」をさへ、然もその目前と胸中とに持つてゐたではないか。この豐饒な彼等の富を見よ！ 彼等はもつと澤山の塵埃的贅澤をしたかつたところを、やつときりつめてこれだけで我慢をしたらうといふのか。さうしてそこが意志的だとでもいふのか。かういふ人に明窓を開いて皎たる寒月を見せたらぶる〳〵とふるへてから「宗匠、風流とは醫者と坊主の發明したかぜを引く機械（からくり）でがすか――何れは特許權ものでせうな」。――一笑。

彼等風流の徒――本當の風流の徒は彼等自らその生活を何かえらい事のやうに考へてゐただらうか。もしさうだとすると彼等も亦、彼等の人間的意志によつて、彼等自身が厭うたところの俗に墮ちなければなるまい。私は彼等がたゞ彼等の好みに終始したものと信じてゐる。實際、我々に生の力の薄れてゐて風流をよしと思ふ時間があるやうに、人間のなかには最小限度的自己の最小限度的享樂を無上に樂しとするところの生れながらに風流な性情もあり得るのである。風流はそのやうな人にとつてのみ生きるの道である。論理によつてたとひ信仰の哲學は築いてもその人に信ずるだけの飛躍的精神がなかつたら、遂に信仰そのものは得られないごとく、意志によつて最小限度の自己を築いても、その人に風流人たるだけの詩的感覺の持合せがなかつたならば遂に風流は知り得ないであらう。

私は言ふ、風流は――尠くとも芭蕉やその他の人々が完成した風流といふのは、中心的には感覺を極度に深めて遂げられたものであり、たとひいかに宗教的であり、哲學的であらうとも徹頭徹尾、藝術である。その事を宗教的に意志によつて完成したのでもない。しかも、その題目が宗教をも哲學をも胚み得るところの根本的な胎であつたが爲めに、我々の民族が無限に新らしい絶好のテーマによつて完成したところのものは期せずして、しかも最も當然の結果として、甚だしく宗教的でもあり哲學的でもあること明白である。人間が全く自然に服し切つて人間的意志を十的（プラス）一的（マイナス）にも一切働かせなかつたが爲めに、人間そのものが、花鳥風月やその他一切の自然物に對して全く同胞であるといふ汎神論的の哲理を、先づ自づと帶びて來た。しかし一向に哲學的ではなかつたところの風流の徒は、哲學としてはその哲理にまで彼自身を見出すことを得ずして、たゞ彼流の持つてゐたその感じだけを、

「花鳥風月を友」とするといふ表現――かの西洋人としては最高の風流文人ラフガディオ・ヘルンによつて驚かれたこの表現によつて述べ得ただけである。またそれらの一切の自然物と、尠くともその詩境に於ては同胞し得たことを彼等がより以上明確に自覺しなかつたがために、彼等がもしそこを自覺しさへすれば當然直ぐにも悟り得るところの「到るところに己がある」といふ浪漫的神祕の歡喜や、或はまだ最小限度に縮み切つた果はやがて自然そのものの最大無限と合致して永久であり得たことにもなるといふ宗教的不滅の悅樂とを、それを味つたであつたらうに、併し彼等自らは少しも力說することが出來なかつた。さうして彼がたまに宗教的な口を利けばすぐに佛教的であり、たまたま哲學的なことを言へば老莊であり、さうしてそれらのものと彼等自らとの相違には少しも考へ及ばなかつたかのやうである。――彼等は、前にも述べた如く、決してたゞの生の否定者でもなく、また決して「至爲無爲」の徒でもなく、最小限度でこそはあつたが生の享樂者であつたのに、さうして、もどかしいのは彼等がいつまでも最小限度的の生であつたことである。いづれは自然の愛子である我々だ。どこまで我儘に人間的意志を逞しくしても依然として自然の愛子には違ひなかつたのに――この飛躍を遂げたならば、しかし同時に風流は無くなつただらう……。

風流の徒が成し遂げようとしたところのものが何であるか。我々は古人に聞くことは出來ない。しかし風流の徒が永久に――人間には生に疲れる瞬間があり、また人間的社會を憂しと思ふ性情がある限りに於て永久に――生きてゐるのは、彼等のあの最も深い、それ故に身心合一的の或る感覺によつてである。それを得るために、彼等は全生命を盡した程だから、もとよりこれに依りすがつて悔ないといふ信念はあつたに相違ない。また意志的でもあつたらう。努力もしたらう。しかし、それ故に彼等を意志的であると呼ぶならば名畫が阿堵物によつて購はれたら名畫の本質は阿堵物だといふのと同じことで、多分は正論といふものではなからうと思ふ。

それにしても、それらの珍らしい藝術を大成した最も主要な人の一人芭蕉は、彼自身の境涯に就て自ら何を語つてゐるであらうか。試みにこれを引用して、諸君子の味讀に委ねよう――

……斯くいへばとてひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさんとにもあらず、病身やや人にうみて、世をいとひし人に似たり、何ぞや法をも修せず、俗をもとめず、いとわかき時よりよこさまにすける事の侍りて、しばらく生涯のはかりごとさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を恥づるのみ……（幻住庵賦）

筆者附記。この未定稿は餘論として「國民性と風流」「デカダン藝術と風流」「東西兩洋文明に就て」「支那の風流西洋の風流」「予の人生觀より見て何故に風流は價値なきか」其他に就て一言附說した方がいいのだけれども、時日に餘裕がないし、また今までにも大たいそれ等の點にふれて私の氣持だけは折々に言つてもあるし、本題は匆惶と筆をとつたがために重複と冗漫とを生じまた力說を缺いたかも知れないが、意のある點は、ともかくも說くだけは說いたから、四）餘論は今は略して、また機を得て發表しよう。

昭和五年五月十八日印刷
昭和五年五月二十三日發行

版權所有

新選佐藤春夫集
定價金壹圓

著者　佐藤春夫

發行者　山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地

印刷者　森江有三
東京市外北品川宿小關五六四番地

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番
一一一二番
二二二一番
四三番

株式會社豐文社印刷

(霧山製本)

新選名作集

新選 谷崎潤一郎集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓六〇錢

神童○饒○續饒鬼○あくび○The affair of Two Watches○前科者○異端者の悲しみ○人面抵○二人の雅兒○玄奘三藏○ハッサン・カンの妖術○柳湯の事件○富美子の足○ちひさな王國○獨逸○呪はれた戯曲○或る少年の怯れ○冊を繙ふる記○兄弟○恐怖

新選 菊池寛集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

▲小說 藤十郎の戀○船饗の立場○窮ひ○亂世○俊寶○仇討三題○恩を返す話○三浦右衛門の最後○堕落り上人○西南戦聞○あるお抗議書○神の如く弱し○死者の願ひ○島原心中○晩年○たちあな姫○羽衣 ▲戯曲 藤原鎌足○盲人○蛇○遊○浦の苫屋○玄宗の心持○世評○貞操○癲癇○病患者○見の場合○鎌倉に立つ妻○ある兄弟○時の氏神○順番○温泉場小景 ▲(長篇小說)火華

新選 菊池寛集(續篇) 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

▲長篇小說 赤い白鳥。第二の接吻。▲短篇小說。▲戯曲

新選 前田河廣一郎集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

三等船客○底船以後○赤い馬車○監獄地獄○異切る者○ストライキ中○麗麗○魯威○十三段の階段○佐吉の父親○手紙善○海の女○蠢人○瓦斯タンク○エレナの話○ドウリスの話○メイの話○日蝕者○「ダンプロ」○太陽の黑點○故郷○餓鬼○海の輝業○スキヤツプ○ムツソリーニ

▲短篇小說 氷會○天驕○復讐○汽車○下獄○マリア○引臓○傍觀者○樣構3番○淳な客へ○ロシアナ夫人の舞踊○コルセット○南京豆○破壊の前夜○悲戦○鼻○無さんの死○罰金○殘具のピストル○後ハ驕騎○成色○黑い海○一寸法師○夜○上陸禁止○犬○寒河江市會○宮傳ビラ○死を嘆ふ群○風○他五篇) ▲中篇小說 快樂師の群○孫茂を買つた男○地獄○最後に鬼ふ著○▲戯曲 ラスプーチンの死○クレオパトラ○(他十篇) ▲長篇小說 六羅馬時代○

新選 前田河廣一郎集(續篇) 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

歎樂○巷の女○深川の唄○あの人達○新鍵明者日記○花瓶○監獄者の裏○小品集 春のおとづれ—花より雨に—夏の唄—弧—傳通院—下谷の家—聚器—日本の庭○鱗衣花立莊○ふらんす物語 舟と車—ローシ河のほとり—秋のちまた—鮫つかひ—晩餐—祭の夜がたり—霧の夜○おもかげ—再會—ひとり旅—雪—巴里の—われ—緑の霧寮 他○增刷集(佛蘭西近世抒情詩選)ボオドレエル—外十二篇○江戸藝術論 浮世繪の俳畫(外九篇)○大雅だより

新選 永井荷風集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓三十錢

▲短篇小說 雲雀○古匣二篇○娘○麻窮室で○山○子供○床甚○風○故郷を去るまで○東京へ○雀の來る○鳩を放つ○路上○地主○こほろぎ○北見○拒手しない男○錦の感謝 ▲戯曲 鸞旺○躍茂左衛門○何が彼女をそうさせたか?○親友○夫婦 ▲長篇小說 實先生○妹の結婚

新選 藤森成吉集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

▲長篇小說 瘦に生くる人々 ▲短篇小說 淫夏婚○誰が殺したか○別離○破壊者○出しやうのない手紙○セメント嬢の手紙○ねこたらしい來事○讀書○支那人の貴○馬鹿を見たりやこ いつらを見る○ロ獄の半日○正札付貴婦人○刺された男○眼○勞働者の居ない部屋○そりや何だ ○住むべき處を求めて○出故け○散歩○どこも冷たい○赤い荷札○春の惱み○燒けた冷で拂ふ ○田舍者が經會を見る○遺族○孤正傳○鶴の咲く頃○浸潤絵○印度の紙○乳色の鶴○其他

新選 葉山嘉樹集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓十錢

新選名作集

新選 北原白秋集(詩篇) 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

「邪宗門」抄○「思ひ出」抄○「雪と花火」抄○「畑の祭」抄○「眞珠」抄○「白の金蔦樂」抄○「雁日異」抄○「水雷異」抄○「秋の獄狀」抄○「日本の笛」抄○「あしの葉」抄○「とんぼの眼玉」抄○「東の電報」抄○「祭の笛」抄○「まぎあ・そうす」抄○「花咲鑑さん」抄○「子供の村」抄○「象の子」抄○「二重虹」抄○「からたちの花」抄○「短狀抄」○口語狀抄○長狀抄○詩文抄○佛句抄○詩論抄○

新選 北原白秋集(散文篇) 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

生ひたちの記○桐の花小品—桐の花とカステラ—書の思ひ—感覺の小函○植物園小品六篇○南蛮小品—漁村の秋—照後の三角—河豚○パパヤ物語—油蟲—正覺坊—蟷と黑人—小笠原の夏○蒲鉾小品六篇○小田原小品その一—五篇○小田原小品その二—四篇○海の妻の溺說四篇○蛯の生活○山莊主人手記四篇○季節の窓十九篇○風景は動く八篇○蟹子ぐるま八篇○▲小說 葛飾文學○ほほよほほ頑禮○鮑○秋山小勘

新選 吉田絃二郎集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

▲小說 芭蕉○空○人間を悲しむ○曝○老來○察日○砂丘日記○支那燈籠○敵はれぬ人間○凡の上○謎の中○カフスとカラー○凡人の一生○或る男と女○冥戦の日○泥梨の下○二芳人○少年○小犬○野蛮○ダビデと子達○霧の中○翠日和▲園解○な雨○風の旅○日の暮るる頃○詩の心○心の影○睡蓮夢○旅人の如く○田舍者が經會を見る○遺族○孤正傳○鶴の咲く頃○浸潤絵○印度の紙○乳色の鶴○其他

新選 吉田絃二郎集(續篇) 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

▲小說 金○時計○盲人の妻○嫉妬○形見分○秋を追ふ○出帆○三人○青い鄙廟○紙屋○海 敵の夜○秋一人○解かなる暮○石田老人○小梅の母○人君への手紙○島原○雛鶴○寂しき人々 ○二人の無能者▲戯曲 西郷吉之助○廣樂の人○門○ 担○師と弟子○呼かなる五月○夏の朝 ○七日の旅○草に臥して○小島の黑○離みあがり○ 鳴者肝にて○式獄写の秋○ 鳴者肝にて○五月の夜○この秋他五篇 れ頃○冬の討○いろいろの旅○拂のも○拂の心○寂き鄙○冬のうた○五月の夜○この秋他五篇

新選 森鷗外集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

○そめちがへ○鷹酔○獨身○青年○藤蔭物○興津彌五衛門の遺書○佐橋甚五郎○護持院ケ原の仇討○大鹽平八郎○安井夫人○津下四郎左衛門○槐山大脳○魚玄機○最後の一句○栗山拾得○ 雜江抽書○解(續譯) 齊藤横町の殺人犯○冬の王○又の爪○感定人○復讐○アンドレアス・タアマイエルが讀書○江馬車○秋夕夢○鑑賞三昧○耶蘇降護祭の貫人○僧の夢○雷鬼

新選 横光利一集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

▲小說 ナポレオンと田鳥○花嬉の感想○街へ出るトンネル○蠻嘯とした風○マルクスの審判 負けた裏人○無禮な街○眼に見えた孤○青い石を拾つてから○春は馬車に乘つて○花園の思想 ○嶺ょどこにでもある○計算した女○火の禁いた煙吉○巻現淫の役者○闇○青い大陸○月冴○ ヒ陸の運○兄妹○神北○滅○▲戯曲 恐ろしき花○閉らぬカチシ○蔭の中○飢の見える部屋○幸福を計る機械○寶の拳拳○食はされたもの○男と女と男○他二篇○

新選 長田幹彦集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

○ゆく春○尼僧○アイヌの子○小夜ちどり○自殺者の手記○旅烏○夕潮○落見○桑名心中○編の曲。(以上長篇十篇)

新選 岡本綺堂集 四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓二十錢

○西南戦聞書○城山の月○熊谷出陣○雨國の秋○歳歴抄○切支丹屋敷○小夏稲の長兵衛○村 井長庵○人龍の父○亞米利加の使○鬼坊主清吉○自來也○涉澤が宿○品川の台場○琴摩の湯○ 雜新小說○新初孫日記○時雨隆る夜○長崎の見弟○江戸名所圖會○お化師匠○三河萬歳○節分 ○風鈴蕎麦屋○蛇を賣る女

新選名作集

新選 小山内薫集

色の褪せた女○手○病友○十三年○乞食○不思議○不男○足損子○堀田の話○新土○梅雨の話○手紙風呂○道戻り○英一蝶○江島生島○新一蝶○黄昏の世界○宵教者

12版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓四十錢

新選 久保田万太郎集

▲小説　霧芝○おみち○おみち後日○みぞれ○ふるさとびと○とらんぷ○浮ぶ瀬○きのふのこと○ふゆぞら○N の手紙○くづれやな○髮火○無線○わかれ○たびがらす○春○茶の花○掘手○火事の記憶○雨○彼について○おもひで○▲戯曲　心こころ○闇深く○ひとりむし○四月蕊○短夜○通り○月夜○冬○蕊面○水のおもて○秋の夜○ありそうみ○不幸○夜蟲▲感想小品　集　日蔭豆にて○「霧芝」のあとに○田原町のこと○夏のおもひで○蟲章

14版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓八十錢

新選 宇野浩二集

子を貸し屋○人心○空しい春○鹹の中○あの頃の春○鶴と虎○十軒路地○心づくし○ぢやんぱん廻り○俳優○千萬老人○因縁爭○一と踊○八木蜘次郎の死○お闘の話○見返した夢○美女○如露○夢見る部屋○人魚潤○最提灯○青春の果○浮世の窓○昔がたり○長い蝶仲○ある春の話○鯛燒屋騒動○晴れたり君よ

14版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓八十錢

新選 里見弴集

友達の見舞○河岸のかへり○驚負○箱根行○題のない小説○女按摩○妻を貰ふ經緯○失はれた原稿○三人の弟子○恐ろしき結婚○ひそもんとり○或る年の初夏に○不良少年○幸福人○不幸のもの○偶然○朴の歌多札○大火○叱る○一目惚○刑事の家○南米記○子ころ○酒○尾行○嚴後の一つ手前○夜客○ムス武遺聞○樂の達磨○百年の戀○小娘○毒薬○夜話○彼と○潮風○甘酒○蔵紙刀○親○暗黒○大臣の靈柩○不貞○線飲靈○丸他

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 近松秋江集

蒼優○無明○伊年の屏風○小石川の家○久世山情趣○老若○人の影○初しぐれ○食後○青章○涙の國屋○流れ○冷熱○嬢はれた女○朝寝○はげ白粉○慕城○村火事○男猪場○蒲窓○浮氣もの○舊戀○雪場○太夫○意氣なこと○女○人男二人○めぐりあひ○爭春の温泉場○銀の○舊戀○舊戀○擅篇○雪場○太夫○意氣なこと○女○人男二人○めぐりあひ○爭春の温泉場○銀河を仰ぐ○「嬢をねんで死ぬ」○柴野と寝間○小猫○子供○見舞○遺言○私は生きて來た○「顔」時代を顧みて○高村行○仇なさけ○死んでいった人々○うつろひ

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓四十錢

新選 豐島與志雄集

▲短篇小説　溺るるもの○黒潮○不育の兄○阿鼻○丘の上○裸木▲中篇　野ざらし▲戯曲街路の人々○盜まれた男○靈魂○響夜○父子○夫婦○怨○愛兄の死○▲長篇　明暗の花

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 夏目漱石集

積○幻影の盾○一夜○二百十日○野菜○夢十夜○それから○須永の話○先生と遺書○文鳥の哲學的基礎

20版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 山本有三集

▲長篇小説　生きとし生けるもの▲戯曲　名門と七郎右衛門○スサノヲの命○父親○不貞○六磯がよひ○シナリオ○雪▲隨筆　道標○坐り○正方形と圓○遠上○大地○鵜雪○見る眼見る人○新五章故國に歸りて。▲雪國紀行○佛國西紀行○佛國西紀行の後に。▲山陰土産一○第二章地中海の旅○第三章燕のごとく歸る○第四章故國を見るまで○大阪より城崎へ○城崎附近○大乘寺を訪ふ○山陰遠の夏○湯當溪探○鳥取の二日○三朝温泉○松江まで○現港と美保の關○出雲浦海岸○大蓮寺の旅情○雲田地方記ふ○石見銀山より石見銀田まで○雲舟の遺跡○高角山○津和野まで。▲熱海土産

20版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選名作集

新選 久米正雄集

▲長篇小説　天と地と▲短篇小説　手品師○虎○銀貨○流行火事○梅の木○田の湯○父の死○不育の子○毋○鍵溜○鑑賞○嫌疑○遺任○哲告者○或る舊婚者の話○仮女と私○秋の夜の話○エロスの戯○坂○鍵溜○鑑賞○嫌疑○遺任○哲告者○或る舊婚者の話○仮女と私○秋の夜の話○て○抱かれてる客○鉄窓○天使○大人の蹴○長友益友○剣鞘○天花○一つの寫眞○蔵務○鍵子○此方が詫びる○慈善家○極道○○蓮子○後の日の童子○嘆き○わが世○ひがこと人のこと○人生○弾じ花○笛吹く人○極兒○聖樹音園○九谷庄三○生と金藻○平堀藤五郎○魚になった興義○秋本の母○お鶴夫人○姉妹○朝子○毋○造り花○花輪をおくる○田舎暮し○山河○若ゆる身連○或女の一日○忌奈遺優○露子の手記○「妻が里○○野田山○藤宙庵の眞立○各國の焼跡○あら磯○遠流アリイ！ゴオランド」○七時半○○調も知らない○本枯○白風な寫貧○山吹○イワンの墓人○大龍寺にて

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 徳田秋聲集

▲長篇　何處まで○奔流▲短篇　艶姓者○悲しみの後○無駄遣○蝋燭○黒い墓○祖父○犬を逐ふ○蟹○貧長

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 相馬泰三集

▲短篇小説　ローマンス○景水のほとり○地獄○夢○裏○小さき影○六月○咲○キヅスの家○田舎醫師の子○孫第生○倒○拳○羽織○耐著地より○感女○懐○懐○鍬勁の日○春○鄙○鴨○一日○呪はれた○三巻酒○家長○叔元先生○友○嬰人○さよ子○溜○やまひ○い軒事件○野の典葬○ェ驛附近○幼年の思ひ○自傷○たゆ○ハンカチーフ○生きもの○皇代子○厨のいたみ○アメリカへ發つ前○ふと○耳火事○▲長篇　荊棘の路

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 島崎藤村集

▲海へ一○第一章海へ○第二章地中海の旅○第三章燕のごとく歸る○第四章故國を見るまで○第五章故國に歸りて。▲雪國紀行○佛國西紀行○佛國西紀行の後に。▲山陰土産一○大阪より城崎へ○城崎附近○大乘寺を訪ふ○山陰遠の夏○湯當溪探○鳥取の二日○三朝温泉○松江まで○現港と美保の關○出雲浦海岸○大蓮寺の旅情○雲田地方記ふ○石見銀山より石見銀田まで○雲舟の遺跡○高角山○津和野まで。▲熱海土産

20版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 西條八十集

▲詩集『春日哀歌（十一篇）○空の羊（八篇）○織人形（十二篇）○繼の指（四篇）○わが家（九篇）○登極（四篇）畏怖の時（四篇）▲謡詩『五篇▲抒情小曲集『十八篇▲蛍落抄　五篇▲隨筆抄　山の畑他十七篇▲小說　陸奥へ行く○四萬より▲蝦曲　犬○亡國の春▲詩論　詩話抄　波浮の女○松脂の匂○赤いカンナの花○蛾○人形と兒童○わが新年の今昔○自然現具他八篇

20版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 宇野千代集

古い瑛具○チロルの秋○鏡鏡屋文六の思案○薬雛○鏡愛恐怖○河○温室の前○可兒君の面會日○百三十二番地の貸座○留守○盛雨○傷痕の巻○空の方きを見て○動員挿話○隣の花○取引にあし○唄○秋の對話○新年狂想曲○ゼンマイの擬れ○素描）あの頃○巴里素描○ふらす○灯ともし頃○秋○海の誘惑○カルナツタの夏の夕○ユ○ブルタアニュの傳說より○チロルの旅（獨獨○言葉言葉言葉獨獨一束○言はじものこと○フアンテジイ○樣愛の心○其他

10版 四六判並製 定価壹圓二十錢 送料壹圓二十錢

新選 岸田國士集

新選名作集

新選 佐藤春夫集

▲長篇小説　室鄕○花はくれなゐ
▲短篇小説　機○マクダレナ○街に笑ふ○窓○殺刄○まいとん○黄昏の幸福○繻○郵便○思慕○一○瀬沼氏の山羊○牙鴉童○人間事○上々吉○百花村物語○揚州十日記○風流論○老青年

新選 池谷信三郎集

▲戯曲　三月井二日○獨り○踏りを待つ人々○首○假裝舞踊會○錆つて來た鍵○繼母○お らんだ人形。

新選 大町桂月集

○冷汗記十篇○皇城拜觀○赤坂御苑拜觀○箱根神社祈願の記○野哭の記○花譜○病院○あた形見○稱名寺の記○雨の高尾○感謝の記○練馬の一夜○亡き叔父○遠ける美人○憂の跡○古塚○須磨の一夜○荒野の鶴○鶴○孫○かた神○小春日和○一日の土工夫○春のひと夜○夜の電車○夜行記○師の弟子○無妻主義○風流玉○り犬○奇遇○花の小金井○相木の閑居○狸征伐○鼠日記（上・中・下）動物合戰○竭笑記○書物に於ける我○秋の天地○洪水を看

新選 武者小路實篤集

▲長篇　○或る男　▲短篇　○小さき世界○芽子○一休に聞いた話○Cの話○友の話○へんな原稿○ユダの接吻○ヨハネ・ユダの嬉遊を聞いて　▲戯曲　桃源にて○日本武尊○二十八歳の耶蘇○佛陀と孫悟空○ある青年の夢○父と娘

新選 佐佐木茂索集

○魚の心○或日の日記○雲に鳥○海湯の町で○古い新芽○影○ふるさとびと○逆目立つ○見と の關係○所謂生き死に○父子一面○父のおもはく○竹瓶ゑて○讀難○長い一日○嘲笑○或冬の日○おもふ○人おのおの○偽つく○頼○微妙な注意○ゆきづり心○寫笑○生活の一例○書きを誘ひ○選擧立會人○水いらず○麹鳥○おぢいさんとおばあさんの話○王城の從兄○おしやべり○面會○臨日○來住○或日あるく○裏懲○赴くまま○鯛日○ある夫の死○他三十五篇

大佛次郎著

赤穗浪士（上卷）（中卷）（下卷）

大衆文學の權威大佛氏苦心の畫期的名作。正しく新しき忠臣藏である。藝術的香氣高く、鋭敏的正當な義士觀として識者の嘆稱措かざるところ。各篇何れも百版を突破した出版界空前の眞行を示した良書。

ごろつき船（上卷）（下卷）

兇惡貪慾の徒に囲まれて、霧國に亡命した三木原伊織の數奇を極めた物語。渺茫たる大洋を背景に活躍跳梁する劍淡、怪傑、義士、惡漢。獄卒の壮な傳奇的香氣、氣宇高邁、詩美横溢、著者の麗筆は正にその高潮に達す。

からす組（前篇）（後篇）

畑谷十太夫は滅び行く武士階級の代表者だ。命にかけての無人から夫の仇と狙はれる淋しい流浪の身を、明治維新に遂著して革命の狂熱に投じた。讀者を魅惑する波瀾に富む筋の中に、詩情ゆたかに而かも正しく歴史を踏てゐる。

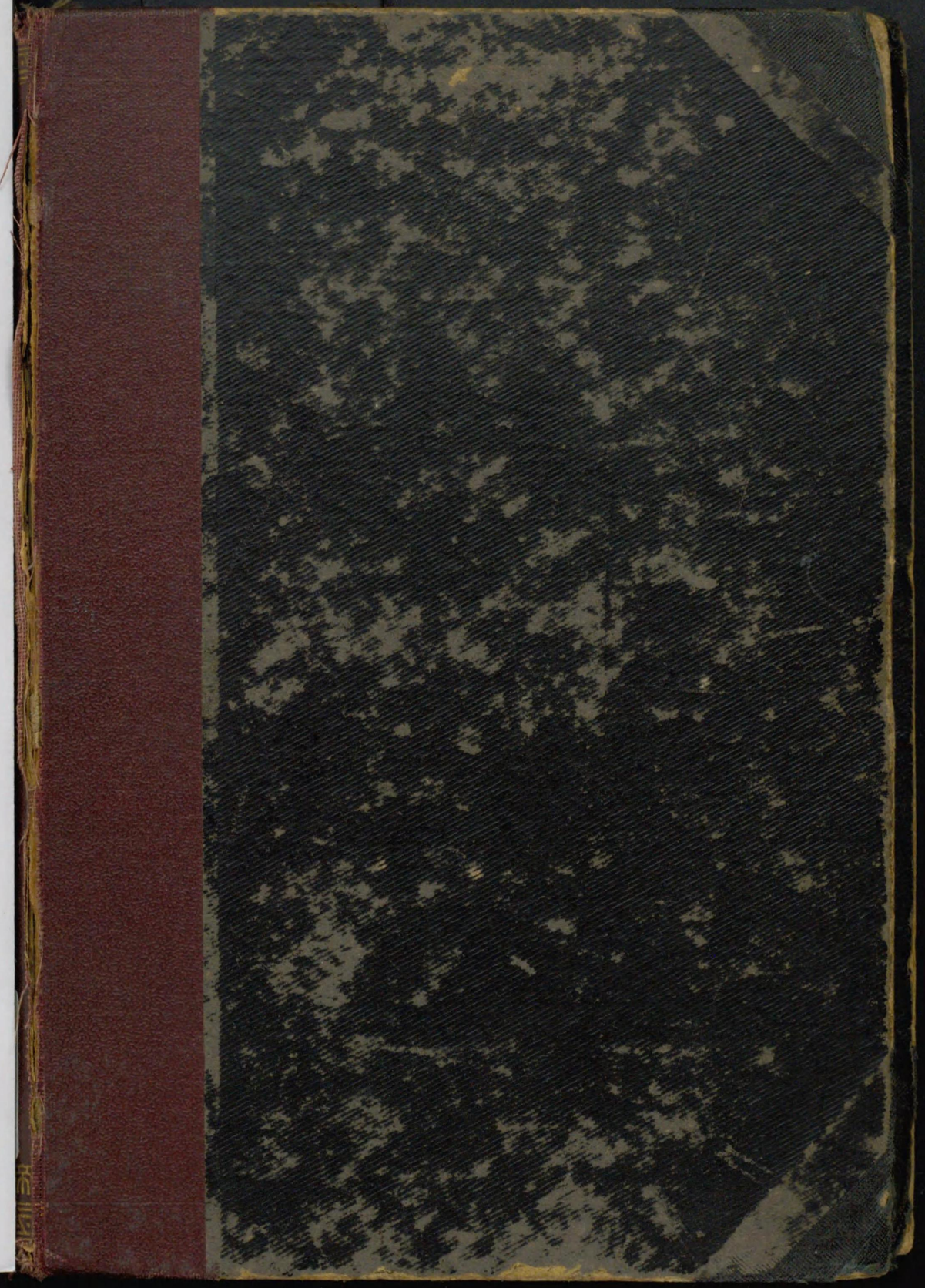
最新刊	近刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊
四六判並製	四六判並製	四六判並製	四六判並製	四六判並製	四六判並製	四六判上製
五一六頁	八ポイント二段組	八ポイント二段組	八ポイント二段組	八ポイント二段組	八ポイント二段組	全二冊
八ポイント二段組	本四六頁	六七八頁	六五二頁	六六頁	五六頁	上卷一圓八十錢
定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓	下卷金二圓二十四錢
送料二十錢	送料二十錢	送料二十錢	送料二十錢	送料二十錢	送料二十錢	定價各一圓五十錢
						送料各二十二錢
25版			14版	10版	112版	40版

66
13

603
187

pd

603
187



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black